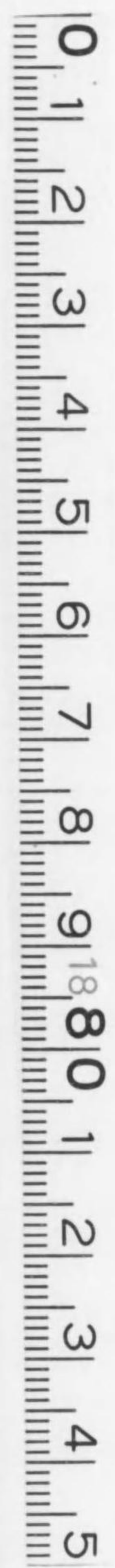


F83  
7

F83-G57-ウ



1200500765342



始





27. 7. 4



F83

G57

(1)

НИКОЛАЙ В ГОГОЛЯ

МЕРТВЫЕ  
ДУЩИ



SOHJU-SHA



死せる魂 下卷

平 子  
井 一  
榮 子  
譯 子





目次

第一部 (承前)

第十章 臆測・コペイキン大尉……………三  
第十一章 生立・走れトロイカ！……………三五

第二部

第一章 テンチエートニコフ……………九一  
第二章 ペトリツシチエフ將軍……………一三九  
第三章 ペトウーフ、プラトーンフ、コスタンジョーグロ、コシカレヨフ……………一五五  
第四章 フロプーエフ、レニーツイン……………二一五  
第五章 ムラーゾフ……………二四八  
譯註……………三〇四



## 第一部 (承前)

### 第十章

讀者には先刻お馴染の、この市の慈父であり恩人であるところの警察部長の邸に集まつた役人連は、ゆくりなくも、重なる不安と焦燥からげつそり瘦せ細つた顔を、互ひに見合はせた。事實、新しい地方總督の任命と、あのやうな重大な内容をもつた報告の到着と、何が何やらさつぱり譯の分らない例の風説とが一緒になつて、彼等の顔にまさしくと苦勞の跡を刻みつけ、多くの者の燕尾服は眼に見えてゆるくなつてゐた。誰も彼もがげつそり憔悴してしまつて、裁判所長も瘦せ、醫務監督も瘦せ、検事も瘦せ、またいつものただセミヨン・イワーノギッチと呼ばれて決して姓を呼ばれた事のない、人差指に大きな指輪をはめて、それを婦人連に見せびらかしてはかりゐる男までが、げつそりと瘦せ細つてゐた。中には勿論、どこにもあるやうに、いつから平氣でビクビクしない手合もあるにはあつたが、それは極めて小數で、實は郵便局長一人きりであつた。彼だけは相變らずの泰然自若たる



態度を少しも變へず、こんな場合にも、いつもの辭で、「我々はあなた方のことはちやんと知つてをりますよ、總督さん！ あなた方は三人も四人も更迭なさることですわね、私なんざあ、もう三十年も同じ職についてゐますからね。」などと言ひ言ひした。それに對して他の役人どもは、かう言つて應酬したものである。「それお君はいいさ、シユブレヘン・ジイ・ドイツェのイワン・アンドレーイッチ。君の携はつてゐる郵便事務つてやつは、郵便物を受付けて發信するだけのことだからさ。インチキをやるといつたところで、締切を十時間も繰りあげて、それに遅れて來た商人から書信の時間外取扱料をせしめたり、規定に反した小包を差出したりする位のものだから、無論、涼しい顔もしてゐられる譯さ、とにかく君は、いつも悪魔を袖の下に潜ませてゐるんだから、自分で取らないつもりでも、悪魔がちやんと押しこんでおいてくれるつて譯さ。君は實際うまくやつてるよ、何しろ子供だつて一人きりでさ。だがブラスコーヴィヤ・フォードロヴナはああいふ羨ましい體格をしてゐるのだから、また一年もたてば姪つて、男の子か女の子を生むよ。さうなつた曉には、あまり暢氣なことも言つてゐられまいぜ。」役人連はこんな風に言つたけれど、實際、悪魔の誘惑に打ち克つことが出来るかどうか——それは作者のかれこれ言ふべき筋合ひではない。さて茲に開かれた集會には、一般の民衆のあひだで分別といはれてゐる最も肝要なものの缺けてゐることが著しく眼についた。一體我々はどうも會議といふものには不向きな國民である。下は村の百姓どもの寄合ひから、上はいろんな學會や委員會などに至るまで例外なしに、我々露西亞人の集會といふやつは、ちやんと一同を統制する主腦部が存在しない限り、きつと飛んでもない混亂におちいつてしまふものである。一體どうしてさうな

のか、ちよつと説明に困るが、どうやらこの國の人たちは、ただ飲んだり騒いだりするために催される、つまり獨逸流の俱樂部や停車場の酒場でやる集まり以外には、どうもびつたり合はないらしい。が、いつも心掛だけは殊勝で、どんな會合にもこのこと集まつて來る。我々はすぐに、おいそれと慈善團體だの、後援會だの、その他いろんな會を拵らへる。主旨はなかなか素晴らしいのだが、そのくせ何ひとつ結果は生まれないのだ。これは多分、我々が初めだけは有頂天になつて、能事をはれりと考へるところから生ずるのであらう。例へば、貧民救済のために慈善團體の設立をまくろみ、相當巨額の金を集めると、さつそく我々はかうした美譽を記念するために、市の高位高官連を残らず午餐會に招待する、無論それで集めた據金の大半は費えてしまひ、残りの半分では、取りあへず委員會用に、暖房装置と守衛のついた堂々たる家を借りる。さうすると、貧民救済のためには、たかだか五留半ぐらゐしか残らないことになる。しかもその金額の割當てについて、會員同士のあひだに意見が對立し、みんながめいめい勝手に自分の親戚縁者を被救護者に推舉するのである。ところが、けふ催された會合は、全然それとは趣きを異にしてゐた。つまり必要にさし迫つて開かれたもので、茲では貧民などといつた第三者のことは問題ではなく、すべての役人の一身上に直接影響する問題が起つてゐるのである。一同を等しく脅やかす災厄が問題となつてゐるのである。従つて、否應なく一致協力し、緊密に結束しなければならぬ筈である。だが、それにも拘らず、飛んでもない事になつてしまつたのである。どんな會合にも付きものの、各自の見解の相違は兎も角として、ここに集まつた連中の意見は、何かしら妙に不可解なほど矛盾を曝け出してゐた。或る者は、チチコフを帝國紙幣の偽造



者だと言つておきながら、すぐその後で、「しかし、ひよつとすると、そんな犯人ではないかも知れない」と付け足した。また或る者は、彼を地方總督廳に屬する役人だと斷言しながら、その舌の根の乾かぬ先きに、「だが、何だか分つたものぢやないさ、額にちやんとさう書いてあるわけぢやなし」と遁辭をかまへたものである。彼が化の皮をかぶつた強盜であるといふ臆測には皆がみな頭から反對して、自然に彼のそなへた上品な風采にも増して、彼の話しぶりには、そんな兇行を敢てするやうな人間と思はれるふしが少しもないと言つた。この時、數分のあひだ何か物思ひに耽つてゐた郵便局長が、不意に靈感でも受けたのか、それとも何か他に原因があつたのか、突然思ひがけないことを叫び出した。「諸君、あれを誰だと思ひます？」かういつた彼の聲には何かしら人の心を震へ上らせるやうな響きがこもつてゐたので、一座の者は思はず、「ぢやあ、いつたい誰だね？」と一齊に叫び出さずにはゐられなかつた。「あれは、諸君、てつきりコペイキン大尉に違ひありませんよ——」そこで一同が異口同音に、「一體そのコペイキン大尉といふのは何者です？」と訊ねると、郵便局長は、「では、諸君はコペイキン大尉が何者だか御存じないのですか？」と言つた。

一同は、コペイキン大尉が何者だか少しも知らないと言へた。

「そのコペイキン大尉といふのはね、」と郵便局長は、誰かそばから他人が指を突つこむのを恐れて、自分の喫煙草入れの蓋を半分だけひらきながら、言つた。——といふのは、彼は他人の指を決して清潔なものと思ふことが出来ず、常々、「あんた方はどんなものでも指でいちくりなさるけれど、煙草といふやつは不淨を嫌ひますからね。」等と、つけつけ言ふ程であつたからだ。さて、「そのコペイキ

ン大尉といふのはね、」かう彼は、先づ喫煙草を一服やつてから、繰りかへした。「だがしかし、これを諸君にお話したものでなら、それこそ、そんじよそこれらの小説家はだしの、とても面白い一篇の敘事詩になりますからなあ。」

その場にゐた一同の者は口をそろへて、是非その話を、つまり郵便局長のいはゆる（そんじよそこれらの小説家はだしのとても面白い一篇の敘事詩）といふやつを聞かせて貰ひたいとせがんだ。そこで彼は徐ろに語りはじめた。

#### コペイキン大尉の物語

「ね、十二年の役の直後のことですよ、君。」と、その部屋には話相手が一人だけではなくて六人もゐたのに、郵便局長はこんな調子で話したものである。「十二年の役の直後に、他の負傷兵と一緒にコペイキン大尉も故國へ送還されてきたのです。どうも尻の落ちつかぬ、恐ろしく氣隨氣儘な男で、しじゆう營倉へ入れられたり、監禁されたりで——實に色んな目にあつてきたんですがね。クラーヌイの戦ひか、ライプツィッヒの戦ひで、片手と片足を失つたんです。ところが、その頃はまだ負傷兵を救済する何等の法令も定まつてゐなかつたのでせう。あの廢兵の年金といふものが制定されたのは、それからすつと後のことですからねえ。そこでコペイキン大尉は働かにならんと考へたのですが、どうでせう、残つてゐるのは左手一本きりなんです。家へ歸つて父親に相談してみると、父親は、「わしにはとてもお前を養ふことは出来ない」つて言ふのですよ。「自分の口を養ふだ



けがかつたんだから」つてね。そこで君、コベイキン大尉は、これは一つ彼得堡へ出かけて、自分分はこれこれの次第で、いはば一命を捧げて君國のために血を流したのだが、何分の扶助を願はれま  
いものかと、關係當局に奔走してみる事にしたので。で、君、まあ荷馬車か御用運送車の厄介  
にでもなつて、やつとのことで彼得堡まで辿りついたといふ譯ですよ。まあ何とか一つ想像してみ  
下さい、つまりそのコベイキン大尉は、あの、いはばこの世に二つとない首都へひよつこり姿を現は  
したのです！急に彼の面前にはつと光りがさしたのです、つまり人生の活舞臺が現はれたのです。  
あのアラビヤン・ナイトのシェヘラザードがひよつこり顔を出したといふわけなんです。さうでせ  
う、いきなりあのネフスキイ通りや、あの素晴らしいゴローホワヤ街や、それからリテイナヤ街が現  
はれたんですからねえ。高い高い尖塔が空にそびえてをり、橋梁はまるで神業のやうに、全然脚柱と  
いふものなしに架つてゐる、つまりセミラミードの天の浮橋をつくりなんですよ、君！そこで先づ  
部屋を借りようとして方々あたつて見たのだが、それがまた恐ろしく高いのです。窓掛といひ、捲上  
げカーテンと云ひ、絨氈といひ、まるで波斯へでも行つたやうなんで……一口にいへば、惜氣もな  
く、ふんだんに金がかけてあるといふ譯です。街をあるいてゐても、鼻につくのは何千何萬といふ大  
金の匂ひばかり。ところが、わがコベイキン大尉の懐ろにある全財産といへば、せいぜい青紙幣が十  
枚に、銀貨で小銭が少しばかりといふ心細さ……。こんなばした錢では小村一つ買へませんからね、  
村を買ふには四萬留も積まなきやなりません。四萬留といへば、佛蘭西の王様にでも貸して貰ふよ  
り他はないといふ始末。そこで、一日一留のレーヴェリとかいふ安宿に泊つて、食事は玉菜汁と敵い

た牛肉一切れだけで済ますことにした……。だが、いつまでもそんなことはしてゐられないと思つた  
のです。そこで彼は、一體どこへ訴へ出たものと人に訊ねてみたのです。すると、「さあ、どこへ  
訴へたものでせうねえ？」と、人々は答へたものです。「なにしろ今は、最高機關が首府にゐないん  
ですからね。」つまり、最高機關は巴里にゐたといふ譯です、軍がまだ歸つてゐなかつたのです。所  
が中に、「臨時委員會が出来てゐますよ。一つ掛合つて御覽なさい、何とか取計らつてくれるかもし  
れませんか」といふ人があつたのです。「ぢやあ一つそこへ行つてみませう」と、コベイキンはそ  
れに應じたのです。「そして、これこれで國家の爲に血を流して、いはば、己れの生命を犠牲にした  
のだと陳情します。」そこで、君、彼はいつもより早目に起きて、床屋なんかへ行つては金がかかる  
といふ譯で、左手で鬚を剃つて、軍服をひつかけると、不自由な義足を頼りに、その臨時委員會の主事  
の許へ出かけて行つたのです。主事の住ひはと訊くと、「あの、海岸通りの家だ」と教へられた。行  
つてみると素敵もない邸で、窓にはめてある硝子などは、考へても御覽なさい、一間半もある鏡硝子  
でしてね、ふんだんに大理石を使つたり、漆を塗つたりしてあつて、ねえ、君……一口にいへば、頭  
がぼうつとなる位なんです。扉についてゐる金屬製の把手なども、實に素晴らしい物だつたから、そい  
つを掴むには、先づ第一に店へ駈けつけて、石鹼を二錢がとも買つて、もの一二時間もそれで手  
を洗ひ淨めてからでなくては、氣が咎めるといつた代物。玄關には銚を持つた門番が一人立つてゐた  
が、そいつが、まるで伯爵みたいな面がまへで、バチスト麻のカラーをつけてゐるところは、何のこ  
とはない、ブクブク肥らされた狎にそつくりなんで……。我がコベイキンは例の義足をひきすつて



應接室へ通ると、うつかり耐などで、亞米利加か印度から渡來した金ピカの花瓶でも押しこかしては大變だと思つて、隅つこの方に小さくなつてゐたものです。彼がそこでうんざりするほど長く待たされたのは、いふまでもない。それといふのも、彼のやつて來たのは、まだやつと主事が床から起きたばかりで、これから方々を洗ふために、侍僕に銀の洗面器を持つて來させたところだつたからですよ。コベイキンがちやうど四時間許り待つたところへ、ちやうやく當直の役人が入つて來て、「主事が只今お出ましになります」といふのです。もう部屋の中は、肩章や金モールをつけた人々で、まるで芋を洗ふやうに立てこんでゐるのです。たうとう主事が顔を出しましたねえ。いやどうも……まあ思つてもごらんなさい——謂ゆる長官といふやつで！ その顔には、いはば、その……身分なり、又……いいですか……官等なりにふさはしい……表情が浮かんでゐるのです。萬事、都風の應對ぶり、請願者に一人々々、「貴方はどうして來たのです？ どうして來たのです？ どんな用事があるのです？ 問題は何ですか？」といつた調子で對應するんです。最後に、君、コベイキンの番になつたのです。そこでコベイキンは、「これこれの譯で、國家のために血を流し、片手と片足を失つて今は働くことが出來ません。つきましては、何分のお指圖によつて、相當の報酬とか、年金とかいふやうなものを頂いて、何とか扶助の道が講じて頂かれないものかと、推して罷り出た次第でございます」と、述べたわけです。主事が見ると、義足をつけた男で、その右袖はベンヤンコのまま、軍服に縫ひつけてある。「よろしい、では近日中に改めて出頭なさい」といふ答へです。コベイキンがどんなに喜んだかは想像が出來るでせう。「よろし、これで望みが叶つたぞ」と思つたのです。彼はもう、歩

道をピョンピョン跳ねるやうにして、バルキンスキイの酒場へ立ちよつて、ウォツカを一杯ひつかけ、それから『ロンドン』で食事を食つたといふわけですよ。先づ續隨子を添へたカツレツと、いろんな添物をしたチキンを注文して、葡萄酒を一本ふんばつしたものです。晩は晩で芝居を見に行きました——つまり、精一杯のおごりやつてのけたといふ譯ですねえ。歩道へ出て見ると、かう、まるで白鳥の様にすらりとした、一人の英吉利婦人がやつて行くちやありせんか。コベイキンの胸の血は俄かに沸き立つたのです——そこで義足をつけた足でコツコツとその女の跡を追つて駈けださうとしたのです。それでも、「いや、いけない」と考へたのですよ。「忌々しいが、女にいちやつくのは暫らく待たう！ 扶助料がさがつてからうんとやるさ。けふは俺は少しお調子に乗りすぎてゐるぞ。」ところが、そんなことをして、彼はその日一日で所持金の殆んど半分は使ひはたしてしまつたのです。三四日すると、彼は再び委員會の主事のところへやつて行つたのです。「例の件がどうなりましたか、お訊ねに參りました。まだ傷も癒えませんが……何しろ國のために血をながしたのですから……」といふやうなことを、切口上で述べたてたものと思つて下さい。すると主事がかう言ふのです。「だがね、何より先きに一言お断わりしておかねばならんが、君の願ひの筋は最高機關の認可がなくては、どうすることも出來んのちや。そもそも今はどういふ時であるか、それは君も知つとるぢやらう。いつてみれば、まだ戦役はすつかり終つてはをらんちや。大臣が歸國されるまで、我慢して待ち給へ。さうすれば君は決して見殺しにされるのではないことを納得するぢやらう。どうしても、それまで食ひつなぐことも出來んといふのなら、わしに出来るだけのことはしよう……」つて



ね。それでまあ、無論わづかばかりではあつたが、節約してやつてゆけば、認可の下るまでぐらゐはどうか持ちこたへられるだけの金が與えられたのです。ところが我がコベイキン先生は、そんなけちなことはしたくなかつたのです。彼は明日にも、「さあ、これを持って行つて、鱈腹のんだり、楽しんでんだりしろ」つてんで、何千といふ大金が貰へると思つてゐたのに、案に相違して、ただ待てといふだけで、時期の指定もしてくれないといふ譯なんです。もう彼の頭の中には、例の英吉利婦人や、スーブヤ、いろんなカツレッツで一杯になつてゐたんです。そこで彼はしをしをと、まるでコツタに水をぶつかけて、尻尾を巻き、耳をたれて逃げ出すブーデル犬をつくり、玄關を飛び出したのです。ちよつぱり味を覺えた彼得堡の生活がもう彼を蝕みかけてゐたのです。それなのに何といふ惨めな暮らしてせう、うまい物などは何一つ口にすることが出来ないのですからね。ところがまだ若くてピチピチした男のことですから、まるで狼のやうに食欲が旺盛だつたんですよ。どこかの料理店の側でも通ると、そこでは外國人のコツタ、それはきつと佛蘭西人なんですがね、そいつが明けつばなしな顔附をして、和蘭陀製のシャツに雪と見まがふやうな眞白なエプロンをかけて、松露を添へたカツレッツかなんかを拵らへてゐます——まつたく贅澤な御馳走で、ほんとに咽喉から手が出るくらゐなんです。またミリューチンの店の前でも通りかかれば、その窓からは素晴らしい鮭だとか、一粒五留もする櫻ん坊だとか、恐ろしく大きな、まるで馬車ほどもある西瓜などが顔をのぞけて、そんなものに百留も拂はうといふ馬鹿な買手を待つてゐるんです——要するに、一步ごとに誘惑が待ちうけてをり、何を見ても涎がだらだらと流れるといつた始末ですが、こちらは——おあづけを喰はされてるんで

すよ。まあ、彼の立場を想像して御覽なさい……一方からは鮭や西瓜を見せつけられながら、片方からは『明日』といふ不味い料理が押しつけられてゐるだけなんですからね。「ええ、もう我慢が出来ない」と彼は思いました。「あいつらは一體どんなつもりでゐるのかしらないが、おれは一つ出かけて行つて、委員会もへつたくれもあるものか、奴らをみんな狩り出して、一體どうするつもりだか詰問してやるぞ！」つてね。實際、彼は臆面のない、恐ろしくうるさ型の男で、かうと思つたが最後、理窟もへちまもあつたものではなく、がむしやりに突進する辯だつたのです。で、彼はそのまま委員会へやつて行きました。「どうしたんだね？」と先方が言ふのです。「まだ何か用なんかね？　もう君には、ちやんと話があるぢやないか」つてね。すると彼は、「ふん、何用ですつて？　あつしはこんなけちけちした暮らしは眞平御免ですよ」と、つけつけ言つてのけたのです。「あつしだつてカツレッツを食つたり佛蘭西葡萄酒の一本も飲んだり、また芝居にでも行つて憂晴らしをしなきやなりませんからね」つて。「いや、さうは行かないよ……」と主事が言ふんです。「かういふ事には、いはばその、辛抱が肝腎なんだ。君には、その決定が下るまでの生活費があげてあるし、いづれは然るべき報償を受けることが出来るにきまつてゐるのだ。そもそも我が露西亞帝國では、祖國のために奉仕した人が何の保護も受けずに見殺しにされた例はまだないのぢやから。しかし、君が今すぐにカツレッツを食べたり芝居を見たりしたいといふのなら、そいつはどうも困つたものぢや。さういふことなら、自分で資力を見つけて勝手にやつてゆくがよからう」つてね。ところが君、コベイキンは平氣の平左で、それ位のことではビクともしないのです。彼はがんと騒ぎたてて、誰彼なしに喰つてかかる始末



「サ！ そこにゐる係り役人や書記連一同をさんさんにこきおろしはじめたのです。……。「君だつて、さうだ！ お前さんだつて、さうだ！」と、彼は一人一人に向つて、「あなた方は職務といふものを御存じない！ あなた方は祿盗人だ！」などと罵つて、一同をこつびどくやりこめたのです。學句の果てには、全然別の役所の將官がひよつこり顔を出したのにまで喰つてかかる始末で！ 飛んでもない騒動を持ちあげてしまつたのです。こんな没不曉漢にかかつては何とも仕方がありません！ たらとう主事も、これは手ぬるい手段では駄目だと思つたのですよ。そこで、「よろしい！」と主事が言ひました。「もしも君が、當座の給與だけでは満足することが出来ず、君の扶助料の決定するまで、おとなしくこの首都で待つてゐることが不服なら、君を本籍地へ送還するまでのことぢや。さあ、傳令兵を呼んで、この男を本籍地へ送り届けるやうにしろ！」すると言下に傳令兵の姿が扉口に現はれたが、七尺ゆたかの大男で、その頑丈な手が、生まれながらに馭者にでもなるやうに出来てゐるといつたやつで——いはば齒醫者の手先といつた男なんです……。そこで、神の僕なる我がコベイキンは、その傳令兵と一緒に馬車へ乗せられて了つたのです。「ふん、少なくとも馬車賃を拂ふ必要がないから、それだけでも有難いといふものさ」と彼は、ふてくされたものです。かうして彼は護送されて行つたんですがね、護送されて行きながら、肚の中ではこんな風に考へたのです。「よおし！ 手前たちはおれに、自分で金を儲けて勝手に食つていけつていやがるのだな。よおし、おれは自分で儲けてやるぞ！」つてね。さて、彼が果してどこへ送りとどけられたのか、その邊のことは皆目不明なんです。そのままコベイキン大尉の噂は、詩人たちがレタ河と名づけてゐる、あの忘却の河の底深く消

え去つてしまつたのです。ところが諸君、そもそも物語の緒は茲からはじまる譯なんですよ。さて以上のやうな次第で、その後コベイキンの行先は杳として分らなかつたのですがね、いいですか、それから二月もたたない中にリヤザニーの森林地帯に物取り強盜の一團が現はれたのです。しかもその一味の首領といふのが、君、他ならぬあの……。

「いや、ちよつと待ち給へ、イワン・アンドレーエギッチ。」と、この時、不意に警察部長が話を遮つて言つた。「君のお話では、第一コベイキン大尉には、片手と片足がないといふんぢやありませんかね、ところがあのチチコフにはちやんと……。」

茲で郵便局長は、頓狂な聲をあげて大きく手を振りまはし、自分の額をボンと一つ叩くと、一同の前で成程わしは頓馬だと公然自分を罵つた。彼はどうしてそんなことぐらゐ最初から氣がつかかなかつたのか不思議で堪らず、露西亞人といふやつは謂ゆる後で氣のつく癩癩もちだとは、なるほどよく言つたものだと感じた。しかし、暫らくすると彼は又しても狡く立ち廻つて自分の非を糊塗しようと思ひ、英國では機械學が非常な進歩を遂げて、最近の新聞で見ると、或る人が實に精巧な義足を發明したさうで、なんでも、ちよつと眼につかないやうな小さな弾機が仕掛けてあつて、それを押すと、その義足をつけた男がひとりでのこのこと歩き出してどつかへ行つてしまつたため、爾來その男の行方がさつぱり分らなくて困つてゐるさうだ、などといふ話を持ち出した。

しかし一同は、チチコフがコベイキン大尉だなどといふことには甚だしく疑問を抱いて、郵便局長の説を餘りにも見當はずれであると思つた。とはいへ、彼等はまた彼等でなかなか人後には落ちず、



郵便局長の穿ちすぎた臆測と五十歩百歩の揣摩臆測を逞ましうしたものである。いろんな、皆それ出  
應にこぢつた臆断の中から、しまひにはこんなまで飛び出して来た——それは口に出すのも可笑  
しいくらいだが——チチコフはナポレオンの變装したものではなからうかといふのであつた。元來、  
英吉利人は露西亞の領土が非常に廣大であることを妬んでゐる、だから漫畫などにも、よく露西亞人  
が英吉利人と話をしてゐるところが描いてあるが、その英吉利人は綱をつけた犬を後ろにつれて突つ  
立つてゐる——この犬は言ふまでもなくナポレオンを指すのである。で、英吉利人は「氣をつける、  
お前の方でかうかういふ風にしなければ、おれはすぐさまこの犬をお前に喉かけてやるぞ！」と言つ  
てゐるのだ。ところで、今や英吉利人がその犬をいよいよセント・ヘレナの配所から放免したのかも  
知れない。そこでナポレオンは露西亞へもぐりこんで来たのに違ひない。チチコフの姿に化けてはゐ  
るけれど、その實チチコフなどは眞赤な嘘だといふのである。

勿論、こんなことを役人達が信じた譯ではなかつたが、それでもよくよく考へて、てんでに肚の中  
でそれを吟味してみると、成程さういへば、チチコフがどうかして横を向いた時、その顔がナポレオ  
ンの肖像そっくりであることを思ひ出したのである。警察部長は十二年の役に出征して親しくナポレ  
オンの風手にも接してゐたが、成程ナポレオンは背丈もチチコフとどつちつかずだし、姿形にしてか  
らが、チチコフ同様、あまり肥つてもゐなければ瘦せてもゐなかつたことを容認しない譯にはゆかな  
かつた。恐らく讀者の中には、そんなことはみんな出鱈目だと言はれる方があるかもしれないし、作  
者も矢張り、さういふ方たちの意を迎へて、まつたくこれは出鱈目ですと申しあげたいところである

が、残念ながらこれは、現在お話するとはり寸分の違ひもない事實であり、さらに一そう驚くべきこ  
とは、それが蒙昧な山間僻地の出来ごとではなく、兩首都のどちらからもさして遠く離れてゐない市  
で發生したといふ點である。尤もこれは、かの有名な佛蘭西軍撃退の後、程なく起こつた事件である  
ことを記憶しておく必要がある。その當時、凡て我が國の地主や、役人や、商人や、賣子等、苟くも  
讀み書きの出来る者はもとより、眼に一丁字なき手合ひに至るまで、少なくともその後八年間といふ  
ものは、まるで政治問題に熱中してゐたのである。『莫斯科報知』や『祖國の子』が、矢鱈に奪ひあひ  
で讀まれて、それが最後の讀者の手に渡る頃には、もう何の役にもたたない、ぼろぼろの紙屑同様に  
なつて了ふ有様であつた。「やあ、おとつあん、燕麥は一升いくらで賣つたね？」とか、「昨日の薄  
雪で、いい獵ができたらうね？」と訊く代りに、猫も杓子も、「新聞には何と出てゐるね？ ナポレオ  
ンをまた、島から釋放したんぢやなからうね？」などと言つたものである。商人連中はそれを非常に  
氣遣つてゐた、といふのは、彼等は、もう三年このかた牢獄につながれてゐる或る豫言者の言葉をす  
つかり信じきつてゐたからである。その豫言者は木皮のサンダルをはき、ブンブンと魚の腐つたやう  
な臭ひのする裸皮の皮衣をきて何處からともなくやつて來て、ナポレオンは反基督者で、今は頑丈な  
鎖につながれて、六つの壁と七つの海にかこまれてゐるが、やがてその鎖を斷ち切つて、全世界を征  
服するだらうといひふらした。そんな豫言をして廻つたかどで、彼は當然の報いとして投獄の憂目を  
みたのであるが、それにも拘らず彼の豫言は効を奏して、商人どもをすつかり狼狽させてしまつたの  
である。その後、長いあひだ商人連は、どんなに有利な取引のある時でも、料亭へ行つてお茶を飲み



ながら、反基督者ナポレオンの話に暇を潰したものである。官吏や貴族連の多くも矢張り知らず識らずの間にその問題を考へるやうになり、周知の如く、その當時非常に流行してゐた神祕主義にかぶれて、『ナポレオン』といふ名前を構成してゐる文字の一字々々に或る特殊の意味を發見したり、中にはその名前から黙示録の神祕の數を引き出した者さへ少なくなかつたのである。こんな次第だから、役人連が我れ知らずその問題に引つかかつて、深く考へこんでしまつたからとて、別に不思議ではないが、しかし間もなく一同は、さうまで氣をまはすのは餘りにも早計で、どうもこれは見當はずれである氣がついて、ハツと我れに返つたものである。彼等は、又しても考へに考へ、さまざまに談合を重ねた末、結局、もう一度よくノズドゥリョフに訊き糺してみるのも強ち無駄ではなからうといふ意見に落着いたのである。そもそも最初に、死んだ農奴などといふ話を持ち出したのは他ならぬ彼で、どうやらチチコフとは何か特別深い關係を結んでゐることであるから、従つてチチコフの素性について必らず何か多少は知つてゐるに違ひない。してみれば、一應ノズドゥリョフの言ふことに耳をかすのも無益ではないといふのである。

この役人諸子だの、その他いろんな身分の連中は、まつたく以つて奇態な人々である。そもそもノズドゥリョフが大の嘘つきで、彼の言ふことなすこと何一つ信用の出来ないことは承知でゐながら、しかも尙その彼に助けを求めるのだからをかしい。いやまつたく、かういふ手合ひにかかつては降参である！ 彼等は神は信じないで、眉間がムズムズすれば必らず死ぬ、などといふ馬鹿げたことを信じきつてゐるのだ。彼等は素朴な高い叡智と調和に限なくみだされた、白日のやうに明澄な詩人の創

作をば頓と見向きもしないで、そこいらの身のほど知らずが捏つちあげた、まるで自然をぶちこはして裏返しにしたやうな、怪しげな眉唾ものに飛びついてゆく。彼等にはそんなものが恐ろしく氣に入つて、「これ、これ、これこそ眞に心の祕奥を解いたものだ！」と叫びだすのだ。彼等は生涯、醫者には三文の値打も認めず、いよいよとなると、加持や祈禱で病みをなほす老婆にかかつたり、又ひどいになると、自分で何かわけの分らない塵芥を寄せ集めてあやしげな煎じ薬をこしらへて飲んだりするが、そんなことで果して病氣がなほると思ふ氣持がとんと解せないのである。尤も、實際苦境に立つてゐる實情から見て、役人諸子の立場にも幾ぶん恕すべき點がないでもない。よく、溺れるものは藁をもつかむと言ふが、危急存亡の場合には、一本の藁に身を託す事の出来るのはせいぜい蠅ぐらゐのものだといふ、分りきつたことが分らない。しかも彼の體重は二十貫まではなくとも、十七貫はたつぶりあるのだ。が、そんな分別も今は頭に浮かばず、一本の藁に縋りつくのである。それと同じく我等の役人諸子も、つひにはノズドゥリョフといふ藁に取りすがつたのである。で、さつそく警察部長がノズドゥリョフに宛てて夜會の招待狀を認ためると、大長靴をはいて、いかにも氣持のいい櫻色の頬をした一人の平巡查が、すぐさまサ「ベルを押へて小走りにノズドゥリョフの宿をさして駈けだして行つた。折からノズドゥリョフは重大な仕事に没頭してゐて、ここ四日間といふものは部屋から一步も外へ出ず、誰ひとり部屋へは入れないで、食事も小窓から出し入れさせてゐた——で、げつそり瘦きて土色の顔をしてゐた。それは多大の注意を要する仕事で、數十組の骨牌の札から、最も忠實な親友のやうに全幅の信頼をかけることの出来る、的確無比な一組を描へることであつた。その仕事



はまだこの先き少なくとも二週間はかかりさうであつたが、その間ちゆうホルフィーリイは、例のメ  
デリヤンカ種の仔犬の躰を特殊の刷毛で掃除したり、一日に三度づつ石鹼で洗つてやらなければなら  
なかつた。ノズドゥリコフは、さうして引籠つてゐるところを邪魔されたので、非常に腹を立て、い  
きなり巡査を頭くだしに口汚なく罵つたが、市長の招待状を一讀すると、いづれその夜會には一人や  
二人すぶの素人がやつて來ようから、こりや一儲け出來さうだと思つて、忽ち機嫌をなほし、手早く  
部屋に錠をおろして、ぞんざいに着物をひつかけながら、一同のところへやつて來た。ノズドゥリコ  
フの陳述と證言、ならびに推定は、役人連のそれとは凡そ對蹠的な相違を示したため、彼等の最後の  
臆測などは根底から覆へされてしまつた。そもそもノズドゥリコフといふ男にとつては、如何なる疑  
惑も絶対に存在しなかつた。で、役人連がいろいろと臆測するにあたつて甚だしく不安動搖の色を見  
せたと同じ程度に、彼の方は確乎不動の信念を示したものである。彼はあらゆる條項に對して、少し  
の淀みもなく答へ、チチコフは數千留にのぼる死んだ農奴を買ひこんだが、別に賣つてはならないと  
いふ理由がないから自分も賣つてやつたなどと公言した。チチコフは探偵ではなからうか、そして何  
事かを探り出さうとしてゐるのではあるまいかといふ質問に對してノズドゥリコフは、たしかにチチ  
コフは探偵であると答へて、ただ自分と一緒に學校へ行つてゐた頃から彼は『告げ口屋』といふ渾名  
をつけられてゐた位で、一度など何か密告したかどで生徒仲間から——その中には自分も加はつてゐ  
たが——こつびどく袋叩きにされて、そのために後で兩方の顛顛だけでも二百四十四匹からの蛭を吸ひ  
つかせなければならなかつたほど顔がぼんぼんに腫れあがつたことがあるなどと話したものだ。尤も

ノズドゥリコフは四十四と言ふつもりだつたが、口から出る時、ひとりで上に二百がくつついてし  
まつたのである。チチコフが贋紙幣造りではないかといふ質問に對しても、ノズドゥリコフは立ちど  
ころに、さうだと答へて、今度はチチコフの驚くべき機敏なことを示す一つの逸話を物語つた。それ  
は彼が二百萬留からの贋造紙幣を隠匿してゐることが分つて、直ちにその家に封印がほどこされ、扉  
口といふ扉口には二人づつの番兵がつけられた。ところがチチコフはその夜一晩のうちに紙幣を殘ら  
すすりかへてしまつたため、翌日その封印をとつて調べたときには、本物の帝國紙幣ばかりになつて  
ゐたといふのである。またチチコフは果して知事の娘を誘拐しようといふ計畫してゐるのだらうか、そし  
てノズドゥリコフ自身それを幫助するため、この事件に關係してゐるといふのは、本當かといふ質問  
に對しては、いかにも自分が力を貸してゐる、もし自分がゐなかつたら、何一つ成就はしないだらう  
と答へた。が、茲で彼はハツと我れに返つて、こんな言はずもがなの嘘をつけば、自から求めて災ひ  
を招くやうなものだと氣がついたけれど、彼はどうしても自分の舌を制することが出來なかつた。成  
程それも無理からぬことで、後から後からひとりで、面白いほど細々とした出鱈目が口をついて出  
て來るのだから、あたらしそれを無駄にする譯にはゆかなかつたのである。で、二人は田舎の教會でこ  
つそり結婚式を擧げることになつてゐる、その村はトゥルマチェフカといふのだなどと、誠しやか  
に村の名前まで言ひ、式を司るのはシードル神父といふ坊主で、謝禮も七十五留で話がついたが、そ  
れも、この坊主がミハイルといふ穀物商をその教母と結婚させたことを告發してやると言つて自分が  
嚇しつけたからこそ濫々納得したのだ。そればかりか、自分は輕馬車までチチコフに提供して、立場



々々にはちやんと替馬の用意までしてやつてあるのだと言つた。かうした出鱈目な話がいよいよ詳しくなつて、しまひには驛遞取者の名前までが一々あげられた。初め役人連は例のナポレオンの話を持ち出しかけたが、その口の下から、そんなことを切りださうとしたことを後悔した、それといふのも、ノズドゥリョフが調子にのつて、とても本當と思はれないばかりか、まるで雲をつかむやうな馬鹿げきつた話を喋りだしたからである。それで役人連はフーッと溜息をついて、その場をはづしてしまつた。ただ一人、警察部長だけは、せめてのことに何か手掛りでも得られないかと思つて、なほ暫らく耳を貸してゐたが、これもしまひには手を一つ振つて、「何が何やら、さつぱり分りやしない！」と呟いたものだ。結局、どんなに骨折つたところで牡牛から乳はしほれないといふ話につくづく感心するぐらゐが落ちであつた。で、役人連は前よりも一層困つた羽目になり、到底チチコフの素性を知ることが不可能だと諦らめてしまつた。これでも人間といふものの頼りなさがはつきり分る。それが自分のことではなくて他人のことではあれば、なかなか賢い智慧がまはり、いい分別もつくのである。他人が何か苦しい羽目に立つてゐるやうな時、彼は實に周到な、しつかりした助言を與へる。「なんといふ機敏な頭だらう！ なんといふしつかりした人格だらう！」と群衆は叫ぶ。ところが、この機敏な頭に何か不幸が降りかかり、彼自身が苦しい羽目に立つやうなことになる——そんな人種などはどこかへ雲がくれをしてしまふのだ！ その確乎たる人物が、すつかり狼狽してしまひ、似ても似つかぬ憐れむべき臆病者に、見る影もない弱々しい子供に變つてしまふ、いや、何のことはない、あのノズドゥリョフがよく口癖にいふ、助平になつてしまふのである。

ところで、かうしたいろんな風説や評判や取沙汰が、どうした譯か誰よりも一番、あの氣の毒な檢事に非常な打撃を與へた。その打撃があまりにひどかつたため、彼は家へ歸つてからも、あれやこれやとしきりに考へこんでゐたが、突然、別にどうしたといふ譯もないのに、ぼつくり死んでしまつた。腦溢血でも起こしたのか、それとも何か他の病ひが突發したのか、とにかく坐つてゐたのが急にふんぞり返つて、椅子からバツタリ轉げ落ちてしまつたのである。例によつて家人は驚いて、「こりや大變だ！」と叫ぶなり、放血でもする他はないと思ひ、急いで醫者へ人を走らせたが、よくよく見れば、すでに檢事は魂のない亡骸となつてゐたのである。その時になつて初めて人々は、成程この男にも良心は確かにあつたのだが、謙遜のあまり、つひぞそれを見せなかつたのだと氣がついて、悼ましく思つた。兎にも角にも、偉人である小人であるに拘らずかくも果敢なく人が死ぬといふ事實は、恐ろしいことであつた。まだつい昨日までは達者に歩きまはつたり、ヴァイストをやつたり、いろんな書類に署名をしたりして、あの濃い眉と頬りに瞬きをする左の眼とを、よく役人連中のあひだに見せてゐた男が、今は變りはてた姿を卓子の上に横たへてゐるのだ。もはやその左の眼もまつたく瞬きをしなかつたが、しかし一方の眉だけは、まだ何やら物問ひたげに釣りあがつてゐる。この故人の訊ねてゐるらしい、なぜ自分は死んだのか、いや、なぜ自分は生きてゐたのか、といふ疑問には、神より他に答へる者はないのである。

「だが、それはどうも變だ！ だいたい子供にだつて大凡の見當はつく筈のことに、苟くも役人ともあるものが、自からそんな妄想を描いて怯えたり、そのやうな馬鹿げた眞似をして、いよいよ眞實か



ら遠ざかるなんて、どうもこれは眉唾ものだ！」かう言つて讀者の多くは、かくいふ作者の脱線ぶりを咎めたり、或は又あの可哀さうな役人連を馬鹿だと言つたりされらう。なにしろこの馬鹿といふ言葉ほど人間がふんだんに使ふ言葉はなく、日に二十度ぐらゐはこれを平氣で隣人に捧げるからである。十のものなら九つまで相手に美點があつても、たつた一つ缺點があれば、あいつは馬鹿だといふ烙印を捺すために、九つの美點は無視されてしまふのである。ずつと四方を見透すことの出来る高處に坐つて、靜かに下界を見おろしてござる讀者には、下界で行はれてゐるいろんないざこざも樂々と批判することが出来ようけれど、下界にうごめいてゐる人間には、つい目と鼻の先きのことしか分らないのである。世界人類發達史の中には、全然取るに足らぬものとして、さつさと抹殺されてしまつたと思しき世紀がかなり多くあるやうだ。現今なら三歳の兒童でもよもや犯すまいと思はれるやうな誤ちが、この世界ではさらに犯されて來たのである。ひたすら永遠の眞理に到達せんものとして、選りにも選つて人類は、どんなに曲りくねつた、狭い、薄暗い、通りぬけることも難かしい、その上ひどく遠まはりな道を歩いて來たことだらう！その實、人類の前には、皇居に定められた莊麗な宮殿へでも通ずるやうな、眞直ぐな、廣々とした大道がひらけてゐたのである。他のあらゆる道よりも廣々として美しいこの大道は、晝は白日に照らされ、夜は夜もすがら灯火に照らし出されてゐたにも拘らず、人類はそれを他所に無明の闇をさ迷つてゐたのである。すでに天よりの啓示に導かれながら、しかもなほ彼等はこの大道を外れて、あらぬ方へと踏み迷ひ、白晝、道もない山里に進路を失つて、互ひに五里霧中をさ迷つたり、また鬼火にさそはれて深い沼地に踏みこんだ擧句には、恐怖のあま

り、「出口は何處だ？ 道は何處だ？」と、どんなに互ひに訊ねあつたことだらう！すべてをはつきりと認識してゐる今日の人々は、寧ろかくの如き間違ひを不思議に思つて、自分たちの祖先の無智を晒つてゐるけれど、さうした過去の年代記こそ、天の聖火によつて記録されたもので、その中に書かれた一字々々は烈しい叫び聲をあげ、どの頁からも、我等現代人を指導する嚴かな手が差し伸ばされてゐるのだとは知らない。しかも今日の人々は祖先を晒ひながら、さも偉さうに大きな顔はしてゐるけれど、豈圖らんや自分たちもまた、やがては後世の物笑ひになる數々の新しい誤謬を犯しはじめてゐるのである。

しかし、チチコフは夢にもそんなこととは知らなかつた。丁度その頃、まるで故意とのやうにちよつと風邪を引いたのが因で、齒槽膿瘍と軽い喉頭炎に悩まされてゐた。かういふ病氣の蔓延には、我が國の多くの縣下町は氣候が頗るお誂へむきである。萬一こんなことから、後繼者も残さずこの世を去るやうなことがあつては大變だと思つたので、彼はその三四日は大事をとつて部屋に引きこもつてゐたのである。その數日のあひだ、彼は絶え間なく、無花果を浸した牛乳で含漱をしては、後でその無花果を食べて了ひ、加密爾列の煎汁と樟腦の濕布を頬にあててゐた。彼は時間潰しに、買ひこんだ農奴全體の詳細な表を新らしく拵らへたり、旅行鞆の中から捜し出したラワリエール公爵夫人の著者を讀んだり、手箱の中から色んな持物や書附を出して調べたり、二三の書類を改めて讀み返してみたりしたが、何をしてもし矢張りひどく退屈だつた。彼には、この市の役人連のうち、誰ひとり安否を訊ねに來てくれる者もないのが、何としても不可解であつた。まだ最近までは、やれ郵便局長だ、やれ



検事だ、やれ裁判所長だといつて、入れかはり立ちかはり、始終色んな馬車が旅館の前に停つてゐたものぢやないか。彼はただ部屋の中を歩きまはりながら、肩をすくめるより他はなかつた。それでも、やつとのことで気分が少しよくなり、これなら新鮮な外氣にあたつても差支へないと分つた時、彼は何とも言ひやうのない歡喜の情に驅られたものだ。そこで一刻の猶豫もなく、さつそく彼は身仕舞に取りかかつた。まづ例の手箱を開けて、コップに一ぱい湯を注ぎ、髭刷毛と石鹼を取り出すと、やをら顔を剃りにかかつた。これは併し、もうすつと前から必要に迫られてゐたことで、手をちよつと顎に觸れながら鏡を一目見るなり、彼は、「ひえつ、まるで林みたいに髭ばうばうぢやないか？」と、口走つたほどである。まさか、林といふほどではないまでも、一面に頬から顎にかけて、春時の麥のやうに濃い髭がツクツクと伸びてゐた。顔を剃りをはると、今度は服を著けはじめたが、あまりせかせか急ぐものだから、ズボンが今にもすり落ちてしまひさうだつた。やうやく、ちやんと服を著け、オーデコロンをふりかけて、暖かく外套に身をくるむと、用心のために頬を包んで、さつさと街路へ出て行つた。久しぶりに戸外へ出た彼の心は、やうやく恢復に向つた病人が皆さうであるやうに、ひどく陽氣だつた。出つくはすほどのものは家でも、行きすりの百姓でも、何もかもが自分に向つて笑ひかけてくるやうに思はれた——その實、彼がすれちがつた二人の百姓は、かなり險惡な顔をしてゐて、その一人は既に仲間の横つ面に拳骨を一つ喰らはせたところであつた。彼は最初に先づ、知事を訪問してやらうと思つた。道々も彼の胸にはさまざま思ひが浮かびあがり、例の金髮娘の姿が頭の中でぐるぐると渦を巻き、ちよつと惡戯をしてやりたいやうな空想さへ頭をもたげて、疾くも

彼は自分を少しからかつてみたり、にやにやと一人笑ひをしたりしはじめたものである。さうした上乗の御機嫌で、彼は知事邸の玄關さきに姿を現はした。さつそく玄關へ入つて、手早く外套をぬぎすてようとした途端に、「お通しすることは出来ません！」といふ、まつたく思ひもかけぬ門番の言葉に、彼はすつかり度膽をぬかれた。

「なに！ どうしたと！ 君はどうやら、わしを見違へてるんだな？ ようく顔を見るがいいぞ！」と、チチコフは相手に言つた。

「どうして見違へるもんですか！ 何も、初めてお目にかかる譯ぢやなし。」と、門番が言ひ返した。

「あなただけは、確かに、お通ししてはならないんです、他の方なら、いつかう差支へありませんがね。」

「これはしたり！ そりやどうしてだね？ 何故だね？」

「さういふ伝附けなんですからね、どうもしやうがありませんのさ。」さう言つてから、門番は「ふん」と一言つけ足したが、それから先きは平氣な顔で相手の面前に立ちふさがつたきり、前にはあんなにいそいと外套をぬがせながら、よく示した、あの愛想のいい態度などは露ほども見せなかつた。どちやら、彼はチチコフを見ながら、肚の中では、（へつ！ 旦那がたに門口から追ひ返されるやうでは、どうせこいつも、いい加減の碌でなしに違ひない！）とでも考へてゐるやうだつた。

（さつぱり分らない！）と、チチコフは心の中で考へた。そして丁々その足で裁判所長のところへ廻つてみた。ところが裁判所長も彼の姿を見ると、ひどく狼狽してしまつて、一言として辻褃の合つた



話が出来ず、兩人とも照れくさくなるやうな頓珍漢なことを言ひだしたものだ。裁判所長の家を出たチチコフが、道々、所長はいつたい何を思つてゐるのだらう、彼のいつた言葉にはどんな意味があるのだらうと、とつおいつ、その眞意を明らかにしようと思つて躍起になつて考へてみたが、結局、何一つ了解することが出来なかつた。それから彼は、他のいろんな連中のところ、つまり、警察部長だの、副知事だの、郵便局長だのの家へも寄つてみたが、どれもこれも、彼に玄關ばらひを喰はせたり、又たとへ通しても、變な態度で、まるで奥歯にもの挟まつたやうな不可解な口をききながら、妙にそはそはするばかりで、何もかもがひどく妙竹林なことになつてしまひ、果てはチチコフの方で、こりや、どいつもこいつも頭が變なのぢやないかと疑ひだしたほどであつた。彼はなほ二三の人を訪ねて、せめてその理由だけでも突きとめようとしてみたが、結局なんら得るところはなかつた。夢に夢みる心地で、彼は、ラフラと目的もなく市ぢゆうを歩きまはりながら、これは一體、自分の頭が狂つてゐるのか、それとも役人どもの氣がふれてゐるのか、これは夢の中の出来ごとなのか、それとも夢にも劣らぬ馬鹿げたことを現でやつてゐるのか、頓と見當もつかない爲體であつた。おそくなつて、もう殆んど暗くなりかけた頃、さつきはあんなに上乘の機嫌で出かけた我が宿へ、やうやく立ちかへると、退屈まぎれに、お茶を持つて来るやうに言ひつけた。彼がじつと考へこんで、自分の變てこな立場について、とつおいつ空しき思ひをめぐらしながら、やをら茶を注ぎにかかつた時、不意に部屋の扉があいて、まつたく思ひがけもなく、ノズドゥリコフがぬつと姿をあらはした。

「そら、影にもいふだろ、惚れて通へば千里も一里つてね！」さう言つて彼は無縁帽をぬぎながら、

「今この側を通ると、窓に灯りが見えるぢやないか。ようし、一つ寄つてやらう！ きつとまた起きてるに違ひない、と思つたのさ。おや！ こいつは素敵だ、お茶が出てるんだね、喜んで一杯御馳走になるぜ。けふは晝飯にいろんなしつこいものを自暴につめこんだため、胃の腑の中がじわじわしてゐるんだよ。なあ、さういつて煙草を一服つめさせてくれよ！ 君の煙管はどこにあるんだい？」

「だつて、僕は煙草をやりませんからね。」と、チチコフは素つ氣なく言つた。

「馬鹿な、君が煙草のみだつてことをおれが知らないとしてもいふのかい。おうい！ 君んとこの下男は何とかいふ名前だつたねえ？ おうい、ワフラーメイ、ちよつと！」

「ワフラーメイぢやない、ベトゥルーシカですよ！」

「なんだつて？ でも以前、君んとこにワフラーメイつてのがゐたぢやないか？」

「ワフラーメイなんて下男は、僕のとこにゐたことがありませんよ。」

「うん成程、ワフラーメイつてのは、デレョービンのうちにゐる下男だ。デレョービンつていへば、奴は素晴らしい幸運を掴みをつたぞ。奴の伯母さんがね、なんでも息子が農奴の娘と結婚したとかいふので、かんかんに怒つて、今では遺産をすつかり野郎に譲ることに遺言を書きかへつちまつたといふのさ。おれも子々孫々のために、そんな伯母さんがせめて一人あつたらと思ふねえ！ ときに兄弟、君はどうしてさう引つこんでばかりゐるんだい？ どこへも顔出しをしないぢやないか。それあ、おれだつて、君が時々、學問上の仕事に追はれることや、本を読むのが好きだつてことぐらゐは無論、知つてるけどさ。（とところでノズドゥリコフが、どういふところから我等の主人公が學問上の



仕事に携はつてゐたり、本を読むのが好きだなどと断定したのか、それは正直なところ、我々にはさつぱり分らない。チチコフにしては尙更のことである。あつ、さうさう、チチコフ！ 君があれを見たのだつたらなあ……。それこそ屹度、君の諷刺的才能の素晴らしい材料になつたのだがなあ。(どうしてチチコフに諷刺的な才能があるといふのか——これもやはり分らない) 實はねえ、リハーチェフつていふ商人のところでもゴルカをやつたのさ。その時だよ、大笑ひをやらかしたのさ！ おれと一緒にだつたペレベンチェフの野郎がね、「こいつあ、チチコフがゐたら、持つてこいだがなあ！……」つて吐きやがるのさ。(ところがペレベンチェフなんて、チチコフにとつては、生まれてこのかた聞いたこともない名前だつた) それはさうと、兄弟、君はまつたく卑劣きはまるインチキをやつたぢやないか、そら、おれと一緒に将棋をさした時にさ。あれあ、おれの勝だつたんだからなあ……。おれはただ、君にまんまと舉足を取られたといふだけの話さ。しかし、どういふものか、おれは頓と怒るといふことの出来ない性分だね。つい近頃も、裁判所長と一緒に……。うん、さうさう！ これは是非、君の耳へ入れておかなきゃならんが、市ではどいつもこいつも君のことを糞味噌に言つてるぜ。奴らは君を賈金づくりだらうと言つて、しつこくおれに耳こすりをしやがるのさ。で、おれは極力、君の肩をもつて——君とは學校も一緒だつたし、君の親爺のこともおれはよく知つてるつて、大いに辯じておいたよ。うん、何のことはない、彼奴らをすつかり煙にまいてやつたのさ。」

「えつ、僕が賈金づくりだつて？」と、チチコフは椅子から飛びあがりながら、喚いた。

「だが、君はどうして、ああ彼奴らを嚇しつけたんだい？」と、ノズドゥリコフは言葉をつづけた。

「彼奴らは、君、怖ろしさのあまり気が狂つちまつたやうなんだぜ。君のことを、やれ強盗だの、やれ探偵だの、それあ大騒ぎなのさ……。檢事なんぞは、あんまり吃驚したために死んぢまつたぢやないか。あす、お葬ひだよ。君は参列しないのかい？ 實をいふと、彼奴らは新任の地方總督を怖がつてるんだよ。君の口から何かはれやしなげかと思つてさ。だが、おれは、地方總督つて奴についぢやあ、かういふ意見を持つてるのさ——もし奴さんが反り身になつて、威張りちらしたりすれば、貴族階級は手に負へなくなるにきまつてるんだ。貴族つてやつは、ちやほやして賈ふことが無性に好きだからさ。さうだろ？ それあ無論、じつと書齋の中にとちこもつてゐて、舞踏會なんぞ一度も開かないつて構はないさ。あんなことをやつたつて、いつたい何になるんだい？ そんなことで何一つ得になる譯はないぢやないか。それはさうと、チチコフ、君もすゐぶん危ない藝當を企らんだものだなあ。」

「え、危ない藝當つて？」とチチコフは、不安さうに訊ねた。

「知事の娘を連れて逃げようつてやつさ。尤も、實をいへば、それをおれは待つてゐたんだがね、いや、まつたくの話さ！ 初めて、いつか舞踏會で、君とあの娘と一緒に見た時、おれはすぐさう思つたよ、(ははあ、チチコフの奴、どうも只事ぢやないぞ……) つてさ。だが、君があんな娘に白羽の矢を向けたのは、どうかと思ふなあ。おれはあんな娘なんて、ちつとも好いとは思はないよ。好い女といへば、ピクーツフの親類に一人、素敵なのがあるぞ、あいつの妹の娘なんだがね、それあ素晴らしい娘だぜ！ ああいふのこそ、ほんたうの上玉つていふやつさ！」



「それあ、いつたい、君は何を變なことをいふんです？ 僕が知事の令嬢と墮落をするんだつて？ それあ、いつたい何のことです？」と、チチコフは眼を丸くしながら言つた。

「ううん、そんなことあ、もう澤山だよ。君はすぬぶん白つばくれることの好きな男だなあ！ 實はそのことであらあやつて来たんだぜ、何なら君に一臂の力を貸さうと思つてさ。なあに、構ふことあない、結婚式も擧げさせてやらうし、馬車や替馬のこともおれが引き受けようぜ、但し一つ條件がある——おれに三千留だけ貸してくれるつていふ條件なんだ。なあ、兄弟、今おれはどうしてもそれだけ要るんだよ！」

こんな風にノズドゥリコフが、べらべらとくだらぬことを喋つてゐる間ちゆうチチコフは、これは夢の中で聞かされてゐるのではないかと、それを確かめようと思つて何度も眼をこすつたものだ。贋造紙幣の犯人だの、知事の娘の誘拐だの、どうやら自分が原因になつてゐるらしい檢事の急死だの、さては地方總督の赴任だのといつた、まつたく思ひもかけぬいゝろんな話に、彼はすつかり驚かされてしまつた。(ふん、いよいよそんなことになつたとすれば、)と彼は肚の中で考へた。(もう何も、かれこれぐづつてゐることはない、こんなところは一刻も早く逃げ出さなきや駄目だ。)

彼は早々にノズドゥリコフを追つばらふと、直ぐさまセリフアジを呼んで、翌朝の六時には間違ひなくこの市を出發できるやうに、馬車に油をさしたり、その他、萬遺漏なく、夜明けまでによく調べておくやうに言ひつけた。セリフアジは、「はい、畏まりました、パーヴェル・イワーノヴィッチ」と答へたが、そのくせ暫らくのあひだは扉口でもちもちしてゐて、すぐには立ち去る様子も見せなかつ

た。旦那はそれにはかまはず、早速ベトウールシカに言ひつけて寢臺の下からもうかなりひどく埃のつもつてゐる旅行鞆を曳つぱり出させると、二人がかりで、靴下だの、襪衣だの、肌着の洗つたのや洗つてないのだの、長靴の型木だの、カレンダーだのを、手當り次第に詰めこみはじめた。何もかも無茶苦茶に片づいてしまつた。彼は翌日になつて何一つ差障りの起きないやうに、せひ前の晩にすつかり用意を整へておかうと思つたからである。セリフアジは二三分間、扉口にもちもちしてゐたが、やうやく、のろのろと部屋を出た。まつたくのろのろと人間の頭で想像の出来る限りの、ゆつくりした足どりで、磨りへつた階段に、濡れた長靴の跡をベタンベタンとつけながら階下に降りると、彼はまた長いこと後頭部をボリボリ搔いてゐた。彼が頭を搔いたのは一體どういふ譯だらう？ いや一般にかういふ手合ひが頭を搔くのはどういふ時だらう？ 明日あたり、何處かお上の酒を賣る居酒屋で、見苦しい毛皮外套の上にぎゆつと帯を緊めた兄弟分と出會ふつもりでゐたのが、不意におぢやんになつて忌々しいといふやうな時だらうか？ それとも新しい土地で好いたらしい女と懇ろになり、毎晩、宵闇が町を包んで、赤い襯衣をきた若者たちが召使どもの前でバラライカを掻き鳴らし、仕事を了へた平民どもが低い聲でぼそぼそと語りあふといつた頃ほひ、いつもの門口に立つて女と逢曳をしたり、その白い手を心ありげにぎゆつと握つたりするのも、いよいよこれでおしまひだといふやうな時だらうか？ それともただ、下臺所のベチカの側で、毛皮外套をかぶつてごろ寝をした、ボカボカと暖かい古巢にもお別れなら、都會風の柔らかない肉饅頭を添へた玉菜汁に舌鼓を打つのも今日限りで、明日からはまた、雨や泥濘や、あらゆる道中の勞苦を忍びつつ、旅をつづけて行かねばなら



ないといふやうな時だらうか？ いづれとも神ならぬ身には知る由もない。露西亞人が頭を掻くのは、その場合々々によつて、實にさまざまの意味があるのである。

## 第十一章

しかし、何一つチチコフが豫想したやうにはゆかなかつた。まづ第一に、彼は思つたよりも遅く眼を覺ました——これがそもそも面白くないことの初めだつた。起きるとすぐさま彼は、馬車に馬が附けられて、萬端の用意がととのつてゐるかどうかを見にやつた。ところが、まだ馬車に馬も附けてなければ、何一つ準備が出来てゐないとのこと——それが第二に心外であつた。彼は赫つとなつて、我等の友セリファンを殿しつけてくれようと思ひながら、それでも相手が何を楯に辯解するだらうと、じりじりしながら待ち構へてゐた。間もなくセリファンが扉口へ姿をあらはした。そこで旦那は、たいてい今出發といふ間際になつて必らず召使たちから聞かされる、いつもの御託を拜聴する榮譽をになつた譯である。

「だけんど、パーウェル・イワーノギッチ、馬に蹄鐵をうたなきやなりましねえでがせう。」

「えい、この、ぼんくらの豚め！ 木偶の坊め！ それならそれと、なぜ前に言はなかつたんだ？ それだけの暇がなかつたとしてもいふのか？」

「それあ、暇がなかつたちふ譯ではありましねえがね……。それから車の輪ですがね、パーウェル・イワーノギッチ、あれも輪鐵をすつかり取つ替へなきや駄目でがせうなあ、なにせ、今頃は道路がで



こぼこで、どこへ行つてもガタガタと揺れますだから……。それから、これも一言いさせて貰ひますが、馬車の前の方が、まるでぐらぐらになつてをりましてね、あれぢやあ、たうてい二丁場とはもちますめえよ。」

「えい、この悪黨め！チチコフが両手を振りしほりながら、さう喚きさま、づかづかと相手の前へ歩み寄つたので、セリファンは、旦那から鐵拳のお見舞を受けるのではないかと、びくびくしながら、二三歩うしろへ退つた。

「貴様はおれを殺さうとも思つてるのかつ？ ああん？ おれの咽喉首でも掻き切らうといふのかつ？ 街道へ出たら、このおれを殺さうとも企らんでやがるのたな、この忌々しい豚め、この海坊主野郎め！ ああん？ ああん？ おれたちはもうここに三週間もじつとしてたんぢやないか、ああん？ この碌でなしめが、さうならさうと、前に一言ぬかせばいいのに、かういふぎりぎりのどんづめになつて無理難題を吹つかげやがるんだ！ さあいよいよといふ間際になつて、もう乗りこんで出かけるばかりになると、どうだ？ 貴様はかういふ醜態をさらけやがるぢやないか、ああん？ ああん？ ああん？ 貴様はぢやんと前から知つてゐたんだらう？ さうだ、知つてゐたんだらうか？ ああん？ ああん？ 返答をしろ。知つてたんだらうか？」

「知つてたがす。」と、セリファンは首をたれて答へた。

「ぢやあ、どうして前に言はなかつたのだ、ああん？」

セリファンはそれに對して一言の口答へもしなかつたが、首を垂れたまま、どうやら肚の底では、「ちえつ、飛んでもねえことになつちまつたぞ。成程おらは知つてゐて、それを言はなかつただもの！」と、獨り言をいつてゐるやうだつた。

「さあ、早く行つて鍛冶屋を連れてこい。そして二時間のうちに何もかも仕上がるやうにするんだぞ。分つたか？ 間違ひなく二時間のうちにだぞ、それかもし出来ないなんてえことになつたら、おれは貴様を、おれは貴様を……餓ん棒みたいに捻ぢまけて、結びこぶを拵らへてくれるぞ！」我等の主人公はかんかんになつて怒つてゐたのだ。

セリファンは命令を果しに行くつもりで、扉口の方へ軀を向けようとしたが、ふと思ひとまつて、「それから、まだ一つ、旦那、あの連錢茸毛の野郎ですがね、ほんとにあいつは、もう、賣り飛ばしちまひたい位がすよ。だつて、パーウエル・イワーノギツチ、あいつは全くのやくざで、何ともかんとお話にならねえ馬でしてね、邪魔になるだけでがすよ。」

「よし！ ぢやあ、おれが市場へ行つて、賣り飛ばしてしまはう！」

「ほんとでがすよ、パーウエル・イワーノギツチ、あいつは、見かけだけは立派でも、その實、狡いことこの上もない馬で、あんな馬つて、まつたく……。」

「馬鹿野郎！ 賣らうと思へば、おれが勝手に賣るわい。餘計なことを貴様がぐづぐづ言ふには及ばん！ さあ、おれはぢやんと見てをるぞ、貴様がすぐさま鍛冶屋をつれてきて、二時間以内にも何もかも用意をととのへればよし、さもなければ、汝を叩きのめして……そのしやつ面を臺なしにしてくれるぞ！ さあ、行きやがれ！ さつさと出ていけ！」セリファンは部屋を出て行つた。



チチコフはすつかり不機嫌になつて、サーベルを床へ投げつけた。それは必要な場合、相手に情れを抱かせるため、旅行中、片時も手許を離さなかつた品である。鍛冶屋とも、かれこれ半時間あまりも唾みあつた擧句、やつと折れあつたものだ。鍛冶屋といふやつは、大抵きまつて仕様のない悪黨で、急ぎの仕事だとして取ると、普通の六倍も高い手間賃を吹つかけるからである。我等の主人公がどんなに激昂して、彼等を悪黨だの、泥坊だの、旅人を苦しめる追剥ぎだのと罵り、果ては最後の審判の怖ろしさまで引合ひに出して脅してみても、いつかな、鍛冶屋たちをへこますことは出来なかつた。彼等はどこまでも強情を張りと呼して、賃銀をまけなかつたばかりか、二時間でしろといふ仕事に五時間も暇をかけたのである、その間ぢゆう彼は、あらゆる旅行者のよく知つてゐる、あの不愉快な氣持——つまり、持ち物は残らず腕に仕舞ひこまれ、部屋の中には紐きれや、紙屑や、いろんな塵芥が散らばつてゐるばかりで、まだ道中に出た譯ではないが、さりとてじつと坐つてもゐられぬ、あの落ちつきのない氣持を、心ゆくまで味はされたのである。そんな時、旅行者はしようことなしに窓から往來を覗きながら、自分たちの僅かな小金のことなどをベチャベチャ喋つて通る人たちが、愚かしい物珍らしげな眼差でこちらを見あげては、またさつさと通りすぎて行くのを眺めて、まだ出發の出来ない自分の身が一層みじめに思はれて、いやが上にも心を苛立てるものである。彼の眼にく、ありとあらゆるもの——こちらの窓と向ひあひの小店も、向ふ側の家に住んでゐて、短かいカーテンの懸つた窓へ近寄つて來る老婆の顔も、何もかもが彼には厭はしく思はれるのだが、それでも彼は窓をはなれようとしない。或は我れを忘れ、或は眼の前で動いたり靜止したりしてゐるものをぼん

やり眺めて立ちつくしながら、たまたま自分の手許の窓硝子にぶつかつてブンブンいつてゐる蠅などを、忌々しさに押しつぶしたりするのである。しかし、どんなことにも終りはあるもので、やうやく待ちに待つた時が來た。萬端の用意がととのつて、馬車の前部は然るべく修繕され、車の輪には新しい輪鐵がはめられ、馬は水飼場から曳き出され、泥坊鍛冶屋も受取つた留銀貨を敷へ直しながら、旅の平安を祈つておいて、さつさと歸つて行つた。たうとう馬が馬車につけられ、買ひこんだばかりの焼きたての輪餅が二つ載せられて、馭者臺に陣取つたセリファンも何か自分の食ひ物を衣囊へねぢこむと、最後に我等の主人公が、例の半木綿のフロックを着て、無縁帽をふりながら立つてゐる給仕や、自分とは關係のない旦那が出發するのを欠仲の出さうな顔で眺めてゐる旅館の下男や、他所の従僕や馭者たちに見送られながら、出立の間際には必らず付きものの、いろんな情景を眼の前に、やをら馬車に乗りこんだ——すると、もうすむん長くこの市に逗留して、いい加減、讀者を退屈させたに違ひない、例の、獨身者のよく乗りまはすやうな半蓋馬車がいよいよ旅館の門をすべり出たのである。《やれやれ、助かつた！》チチコフはさう思つて、十字を切つたものだ。セリファンはピューンと鞭を鳴らした。はじめのうち暫らくは踏臺の上にしやがんでゐたベトールンシカも、間もなく彼の横へ割りこんで來た。我等の主人公はグルジャ毛氈の上にゆつたりと座を占めて、鞆革のクッションを背中にあてがつた拍子に、また温かい二つの輪餅を押し潰してしまつた。馬車はくだんの、よく物を撥ねあげる力のある舗石道に出たため、またしてもガタゴトと跳ねたり躍つたりしはじめた。妙に莫然たる氣持で彼は、家や、壁や、木柵や、往還を眺めやつた。それらは又それらで、て



んでにこちらへ飛んで来ては、徐々に後へ引き退つてゆくやうに思はれた。生涯のうち、いつの日に  
かまた再びそれらを見る事が出来るかどうか、それは神より他に知る者はないのだ。或る街角を曲  
つたところで一行は馬車を停めなければならなかつた。といふのは、見渡すかぎり賑々たる葬禮の行  
列が今もこちらへ進んで来るところだつたからである。チチコフは首を突き出して、ペトールシ  
カに誰の葬ひだか訊いてみると言ひつけたが、それは検事の葬式だと分つた。彼はひどく不快な気分  
に襲はれて、すぐさま馬車の隅へ身をひそめると、革の膝掛をかぶり、窓掛を引きおろした。かうし  
て馬車が立往生をしてゐる間に、セリフアンとペトールシカとは恭しく帽子をとつて、誰がどん  
な恰好で、どんな服装をして、どんな馬車に乗つてゆくかと、じろじろ眺めながら、徒歩の人は幾  
人、乗物の人は幾人、両方あはせて一體どの位あるだらうと、人数をかぞへたりしてゐたが、彼等の  
主人は、誰に會つても知つた顔をするな、知合ひの従僕を見ても挨拶をしてはならんぞと固く戒めて  
おきながら、そのくせ自分も革の窓掛についてゐる硝子ごしに、おづおづと葬列を眺めにかかつたも  
のだ。棺の後ろからは、ぞろぞろと例の役人連が帽子をとつたままつて行く。チチコフは自分の馬  
車が見つけられはしないかと、びくびくしてゐたが、彼等は今それどころではなかつたのだ。よく會  
葬者のあひだでぼそぼそと取り交はされる、いろんな世俗的な談話にすら彼等は心を向けようとしな  
かつた。その時の教等の思ひは、ただ自分たちの身の上のみ集注されて、新任の地方總督とは一體  
どんな人物で、どんな風に事にあたり、自分たちをどう取扱ふだらうなどといふことばかり考へてゐ  
たのである。徒歩でゆく役人連の後には箱馬車が何臺もつづき、その窓からは喪服用の頭巾をかぶつ

た婦人連の顔が見えてゐた。その唇や手の動き具合よりみれば、彼女たちは確かに何か活氣のある話  
をしてゐるやうであつた。恐らく女たちも新しい地方總督の赴任を話題にして、總督がどんな舞踏  
會を催すだらうなどと、いろいろ取沙汰をしながら、相も變らず、衣裳につけるレースや縫附飾のこ  
とであれやこれやと心をくだいてゐたのに違ひない。さうした箱馬車に次いで、空の輕馬車が數臺、  
一列になつてつづいて行くと、それで葬列もやうやくおしまひになつたので、我等の主人公も再び馬  
車を進めることが出来た。革の窓掛をあけて、ぼつと吐息をつくとき、彼はさも感に絶えたやうに、「あ  
あ、あの検事も！ すつたもんだで生き永らへた末、たうとう死んでしまつたのだ！ 定めし新聞に  
は、部下と全人類の哀惜の中に尊敬すべき市民が逝去したとか、類ひ稀れな父であり、模範的な良人  
であつたとか、その他いろんなことを矢鱈に書きたてることがだらう。また屹度、後に残した妻や子の  
悲歌の涙と共に葬られたなども書き加へられるだらうが、しかし、つらつら考へてみれば、結局、  
間違ひのない事實としては、君が恐ろしく眉毛の濃い男だつたといふこと位しか傳へられはしないの  
だ」と呟やいた。そこで彼は、セリフアンに出来るだけ急ぐやうにと命じながら、心の中では、「た  
が、葬式に出會つたのは縁起がいいぞ、死人に出會へば幸先がいいつていふからな」などと考へてゐ  
た。

さうかうするうちに半蓋馬車はいよいよ寂しい街から街を通り抜けて、やがて市街もこれで終りら  
しく、木柵だけが長くつづく傍らへと出た。間もなく舗石道も終ひになり、關門を通り抜けると、市  
はもううしろになつて、ぐるりには何ひとつなく、一行はいよいよまた旅の空へ出たのである。から



して、又しても街道の兩側を、里程標だの、宿場役人だの、井戸だの、荷馬車の行列だのが、後へ後へと飛び過ぎて行き、灰色の村落にさしかかる度毎に、サモワールだの、女房連だの、旅籠屋から燕麥をかかへて飛び出して来る素敵つこい亭主だのが眼についた。もう八百露里からの道を歩いてゐるといふ、ちぎれ草鞋をはいた徒歩旅行者にも逢へば、木造の小店や、麥粉の桶や、草鞋や、輪廻といふ、その他いろんながらくたの眼につく小さな町も通りすぎた。だんだんに塗つた關門だの、修理中の橋だの、右にも左にも目路のつづく限り涯しない野原だの、地主の乗つてゐる古風な旅行馬車だの、『何々砲兵大隊』と書いた緑いろの砲弾箱をはこんでゆく騎馬の兵士だの、曠野のそこそこに點々として連なる、緑や黄や、まだ掘りおこしたばかりの黒々とした島の精だの、遠くから聞こえてくる歌聲だの、霧の中に浮かんでゐる松の梢だの、遠く消えてゆく鐘の音だの、蠅のやうに見える鴉の群れだの、涯しない地平線だの……ああ、我が露西亞よ！ 露西亞よ！ 作者は今、御身の姿を心に浮かべてゐる、遠くこの妙なる麗はしの國から御身を眺めてゐるのだ。總じて御身は貧弱で、傲慢で、どうも居心地が悪い。人を樂しませたり驚異の眼を睜らせるやうな、奔放な自然の奇もなければ、摩訶不思議といはれるやうな人工の美もない——断崖の上に聳り立つ、窓の澤山ある宏莊な宮殿をもつた市もなければ、邸内や、瀑布の轟きや絶え間なき水しぶきの中に生ひ茂る繪のやうな樹木や常春藤もなく、涯しもなく頭上はるかに巍々と聳え立つ巖を仰ぎ見ることもしなければ、葡萄蔓や常春藤や、數知れぬ野薔薇のからみついた重疊たる拱梁もなく、その拱梁の間から、銀いろの明るい空に浮かぶ輝やかなしい山脈の悠久な輪郭が仄見えることもない。御身のうちにあるものは凡て茫漠として

平板である。坦々たる平原のあひだに建の低い市々が、まるで點か記號のやうに突起してゐるだけで、何ひとつ人の眼を惹き、心を魅惑するものがない。しかもどんな神祕な捕捉しがたい力があつて、かくまで御身に心惹かれるのだらう？ どうして御身の、あの退屈な歌が、國土のつづく限り、涯から涯まで、どこへ行つても嬌々として小止みなく鳴り響き、耳朶を打つのだらう？ 一體、この歌の中には何があるのだらう？ 何がかくも我れを呼び、慟哭し、心を緊めつけるのだらう？ どんな聲音がかくも惱ましく胸を打ち、魂に喰ひ入つて、わたしの心臓にからみつくののだらう？ 露西亞よ！ 御身はこのわたしに何を望んでゐるのか？ どんな不可思議なつながりが御身とわたしのあひだに匿されてゐるのか？ 何をそんなに御身は眺めてゐるのか、また御身のうちにあるありとあらゆるものが、どうしてさう期待に充ちた眼をわたしに向けてゐるのか？……それはかりか、わたしがかく疑惑にとざされて、じつと立ちつくしてゐるとき、今にも雷雨をもたらさうな重々しい雨雲がかく疑惑にとざされて、廣漠たる御身を前にしてわたしの思考力はたと鈍つてしまふのだ。この涯なき廣表は何を豫言してゐるのだらう？……そもそも御身そのものがかく宏大無邊である限り、そこにこそ、その御身の懐ろにこそ、測り知られぬ大思想が生まれる筈ではなからうか？ 御身の懐ろで縦横に腕をふるひ、駈けまはることが出来るとしたなら、そこにこそ剛勇無双の勇者が生まれる筈ではなからうか？ その力強い廣表がわたしをむんすと驚掴みにして、怖ろしい威力をわたしの魂に反映させてゐるのだ。今わたしの兩の眼には、本然ならぬ威力が宿つてゐる……。ああ、なんといふ輝やかにしくもいみじき、世に知られぬ僻地であらう！ 露西亞よ！……



「締めろ、手綱を締めろつたら、馬鹿つ！」と、チチコフがセリファンに嘯鳴りつけた。

「こら、サーベルでも眞向から喰らひたいのか！」かう、そのとき先方から馬車を飛ばせて来た、二尺あまりもある泥鯨髭をのびした傳令兵が、喚きたてた。「やい、何をぼやぼやしてやがるんだ、椋鳥め、手前の眼にやあ、お上の馬車が見えねえのかつ！」それなり、三頭立の馬車はガラガラッといふ凄まじい音と共に、濛々たる土埃をたてて、幻影のやうに姿を掻き消してしまつた。

旅路といふ言葉には、何といふ不思議な、人の心をそそつて、どこかへ持つて行つてしまふやうな、微妙な響きがこもつてゐることだらう！ 實際にまた、旅路そのものは堪らなく好いものだ！

快晴にめぐまれた日で、秋の木の葉がサラサラとさやぎ、外氣はひんやりと……。旅行者は旅外套の襟を掻きあはせ、帽子を目深に引きさげて、出来るだけびつたりと居心地よく馬車の隅へ身を擦り寄せ、最後にもう一度、ブルツと戦慄が五體を通りすぎると、今度は氣持よくぼかぼかと暖かくなる。馬は一散に走つてゐる……。いつか、誘ひこむやうに睡氣が忍びよつて兩の脛がくつきあひ、

《彼方に見えるは白雪ならで》といふ小唄も、馬の鼻息も轍の音も、もう夢現つに聞きながら、いつか隣りの乗合客を片隅へ押しつけるやうにして、グウグウ鼾きをかいてゐるのだ。ふと眼を覺ますと、もう宿場を五つも通り越してをり、月が出てゐる。見も知らぬ町、古風な木造の圓頂閣と動んだ尖塔のある寺院、くすんだ丸太づくりの民家と白い石造の邸宅、月の光りがそこそこに落ちて、まるで壁や舗石道や街路に白麻の手巾でも撒きちらしたやう。それを斜めに炭のやうに眞黒な陰影が横断してをり、斜光を受けた板屋根は、さながら磨きたての金属のやうにピカピカ光つてゐる。猫の仔一

匹すがたを見せず、何もかもがまどろんでゐる。ボツンとただ一つ、どこかの小窓に灯影が映してゐるのは、その市の町人が自分の長靴でも縫つてゐるのか、それとも麵麴屋が麵麴を焼いてゐるのでもあらうか？——だが、そんなことはどうでもいい！ ああ夜！……天上の力！ 何といふ素晴らしい夜が天空を領してゐることだらう！ ああ大氣！ そして高く遙かな大空が、その近づき難き天涯の底に朗々と晴れわたつて、限りなくひろがつてゐる……。しかし、冷たい夜の息吹に爽々しく臉をくすぐられると、いつか好い氣持になつて、ついうつらうつらして前後を忘れてしまひ、グウグウ鼾きをかきはじめる。すると片側へおしつけられた可哀さうな隣りの乗合客が、何かひどく重いものがのしかかつてきたことに氣がついて、腹立たしげに軀をねぢまはす。眼を覺ますと——眼の前は、またしても田畑と曠野ばかりで、何一つ變つたものもなく、見渡す限りがらんとして、何の變哲もない景色だ。數字を書いた里程標が眼をかすめて飛びすぎて行く。夜が明けそめる。灰白くなつて冷々とした地平線の上には、ぼやけた金色の縞がかかり、風が一段と爽やかに寒々と身にしみるので、防寒外套を一層ひしと掻きあはせる……。何といふ快適な寒さだらう！ ついまた快い睡りに落ちてしまふ！ ガタツと揺れて——また眼を覺ます。日はもう空高く昇つてゐる。「お手やはらかに頼むぜ！ お手やはらかに！」といふ聲が聞こえる。馬車は急坂をくだるところで、下には廣い堰があり、大きな明るい池が陽光を浴びて、銅器の底のやうに輝やいてゐる。部落があつて、傾斜地に百姓小屋が散らばつてゐる。その片側には、田舎寺の屋根の十字架が星のやうにチカチカ光つてをり、百姓どもの喋り聲もガヤガヤ聞こえて出して、胃の腑が堪へ難くギユウギユウいひ始める……。ああ！ この長い



長い旅路も、時には實にいいものだ！ 何度わたしは、溺れる者が藁に縋るやうに、あわただしく旅に出たことだらう、そのたんびにわたしは快適な旅に救はれて危く破滅から免れたものだ！ そして旅の空では、どんなに素晴らしい構想や詩的情緒が生まれ、どんな素敵な感銘を受けたことだらう！ ……だがこの際、我等の友なるチチコフも全然散文的な夢想にばかり耽つてゐた譯ではない。それでは一體どんなことを感じてゐたのか、それを一つ觀察してみよう。初めのうち彼は何の感興をも覺えず、ただ恙なく市を出はづれたかどうか、それだけが氣になつて絶えず後ろばかり振り返つてゐたが、やがて市はもう疾づくに姿を消して、鍛冶場だの、磨粉場だの、そのほか市の界限にあるいろんなものが何もかも見えなくなり、石造の教會堂の白い屋根の頂きさへも、すつと前に地平線の彼方に影を没してしまつたのを見究めると、やうやく彼は専ら道中のことに思ひを潜めて、ただ右を見たり、左を見たりするだけで、もうN市のことなどは、遠い遠い少年の日にでも通りすぎた場所かなんぞのやうに、まるで彼の記憶から消え失せてしまつたのである。やがて道中のこともいつから注意を惹かなくなると、彼はかろく眼をとちて、枕の上へ顔を押しつけてしまつた。實のところ作者は、かうして、やうやく自分の主人公の身の上話をする機會が得られて寧ろ嬉しいのである。讀者も御存じのやうに、これまでは、やれ、舞踏會だの、婦人連だの、やれ、ノズドゥリョフだの、町の風説だの、さては、かうして書物に記載してみると實にくだらなことのやうであるが、そのくせ、實社會に於いてはなかなか重大なものと目される、あのさまざまな些事に妨げられて、絶えずその機會を逸してゐたからである。だが、今こそさういふ餘事はさておいて、ひたすら我等の主人公の前身を語る

ことにしよう。

さて、私の選んだ主人公が讀者のお氣に召したかどうかは甚だもつて疑はしい次第である。彼が御婦人がたの御氣に召さないことは、確信をもつて斷言することが出来る。それは御婦人がたが、小説の主人公といふものはどこまでも完全無缺な人間であるやうにと望んでをられるからで、たとへ備かでも、精神的乃至は肉體的に、何らかの缺點があれば——もう駄目である！ 作者がどんなに深く主人公の魂の奥底を觀察し、その形貌をまざまざと鏡に映すよりも明瞭に描きだしたところで、そんなものは三文の値打も認めてはもらへはしないのだ。そもそもチチコフが中年で、でつぷり肥つてゐることが、甚だ彼に不利なのである。どんな場合でも、小説の主人公がでぶでぶ肥つてゐては落第で、たいがい御婦人がたは外方をむいて、「ちえつ！ 何ていけすかない！」と仰つしやるにきまつてゐるのだ。嗚呼！ 作者には何もかもそれが分つてゐる、それにも拘らず、作者は主人公として謂ゆる高潔の士を選ぶことが出来なかつたのである。しかし、やがてこの物語の中でも、これまでつひぞ一度も奏でられたことのない別種の琴線が鳴りだして、露西亞魂の無限の寶庫が開かれ、神の如き勇氣をそなへた男性や、優にやさしい女ごころの美しさの限りをそなへ、寛容と自己犠牲の念に満ちあふれた、世界中どこを探しても見つけるとの出来ないやうな素晴らしい露西亞乙女が飛び出して来るかもしれない。さうすれば、人種を異にするどんな優秀な人々も、これに比べてはまるで死人のやうに見えるだらう——ちやうど生きた言葉に比べては書物が死物に等しいと同じやうに！ やがて露西亞の國民運動が興るだらう……そして、他國民にあつてはその品性の上面を軽くかすめたに過ぎな



いものが、どんなに深くスラブ民族の品性に喰ひ入つてゐるかを悟るだらう……。だが、いつたい何のために、そんな先きのことまでかれこれ言ふ必要があらう！　もう疾づくに一人前の男として、辛酸な内的生活や、孤獨な何ものにも迷はない新鮮味の中で鍛へあげられたはずの作者が、まるで青年のやうに我れを忘れてしまふのは、甚だ不體裁である。何事にもちゃんときまつた、順序と場所と時とがあるはずだ！　が、とにかく、この小説の主人公には高潔な人間は用ひられてゐない。どうして用ひられなかつたかといふ理由をあげることすら出ない。第一、もういい加減に一息つかせてやらなければ、高潔な人間が可哀さうだ。またむやみに、高潔な人間、高潔な人間と、この言葉が濫用されすぎる。そればかりか、高潔な人間を馬に見たてて、作家といふ作家がそれに打ち跨がり、鞭や手あたり次第の得物で追ひ立て急ぎ立て乗りまはしたのだ。高潔な人間はあまりに苛責を受けたため、今では高潔のこの字もなくしてしまひ、五體は瘦せさらばうて見る影もなく、骨と皮ばかりになつてゐる。高潔な人間ともてはやすのも表面だけで、その實、高潔な人間を尊敬してゐる譯ではない。いや、もうそろそろ悪黨を驅りだしてもいい頃だ。だから卑劣漢を主人公としてお目見得させた次第である！

我等の主人公は、取り立ててこれといふほど立派な家柄の出ではなかつた。両親は貴族ではあつたが、古くからの代々の貴族なのか、それとも成りあがりの一代貴族なのか、その邊のところは皆目わからない。彼の顔立は両親に似てゐなかつた。少なくとも、出産の時その場にゐあはせた親戚の女で、普通にちび女と呼ばれてゐるやうな、ちんちくりんの女が赤ん坊を抱きあげるなり、「おやおや、

思つたとはまるで違ふ赤ちゃんだよ！　この子は母方のお祖母さんに似るはずだつたのに、そしてその方がよかつたのにさ。それがどうだらう、諺にいふ通り（父親にも似なければ、母親にも似ない、どこかの風來坊をつくり）つて顔をしてゐるぢやないか」と、口走つたほどであつた。そもそも最初に人生といふものが、雪にうづもれた仄暗い小窓越しに一種味氣なく頼りない光りを彼の上に投げたのであつた。少年時代にも、彼には友達もなければ遊び仲間もなかつた！　夏冬ともつひぞあけられたことのない小窓のついた小さい部屋、仔羊の毛皮を裏につけた長いフロックを着て、素足に編物のスリッパをはき、絶えず溜息をついて部屋の中を歩きまはりながら、片隅においてある砂箱へ唾ばかり吐く病身の父、明けて、暮れても、指や唇まで墨汁で眞黒にしながら、ペンを持つて腰掛に坐らされてゐること、いつも眼の前にぶらさげられてゐる手木の「嘘をつくな、目上の者に従へ、心を正しくせよ」といふ格言、絶えず部屋を歩きまはるスリッパの音、單調な手習ひに飽きて、書いてゐる文字に髭や尻尾をくつつけてゐると、不意に響きわたる「また悪戯をしてゐるな！」といふ、聞き慣れてはゐるが、いつも刺々しい聲、いつもさうした言葉について、後ろから長い指を伸ばして耳の縁をグイとひどく抓られる時の、あのお馴染の不快な氣持——かういつたものが、どうやらぼんやり記憶に残つてゐる、彼の幼年時代の惨めな思ひ出であつた。しかし人生といふものは東の間に急激な變化を齎らすもので、或る春のはじめの、日ざしも麗らかに、水の流れも滔々たる一日、父は我が子をつれて、ガタ馬車に乗つて出かけた。その馬車につけたのは、鹿毛に斑のある、博勞仲間で『かささぎ』といふ異名で呼つてゐる瘦馬で、チチコフの父の所有に屬してゐた唯一の農奴の家長で、主人の家



の仕事を残んど全部その双肩に引きうけてゐた、小柄な僱僕男が御して行つたのである。一行は一晝夜半あまり、その『かささぎ』に曳かれて行つた。途中で泊つて、川を渡り、冷たい肉饅頭と羊の焙り肉とで辨當をつかひ、三日目の朝になつて或る市に辿りついた。少年の眼の前へ思ひもかけぬ壯麗な街並がパツと現はれたため、彼は暫らくはあいた口も塞がらなかつた。やがて『かささぎ』は馬車もろともに、パシヤンと穴の中へ飛びこんだが、そこからは狭い泥濘だらけの横町がだらだらと下へつづいてゐた。馬はそこで僱僕の馭者や主人に追ひ立てられて、長いこと、一心不亂にもがいたり足掻いたりした擧句、やつとのこと一行を、坂の途中にある小さな邸へ運びこんだ。その古ぼけた小さな母家の前には、花を一杯につけた林檎の木が二本あり、家の後ろには、ななかまどと接骨木の木だけの、長の低い小さな庭があつて、その叢みの奥に、柿板葺きの木造の小舎がかくれてをり、擦硝子入りの小さな窓が一つ見えてゐた。ここには、チチコフ一家にとつては親戚にあたる、皺くちやの梅干婆さんで、いまだに毎朝、市場へ出かけては、歸つて來ると靴下をサモワールで乾かす婆さんが住んでゐた。彼女は少年の頬つべたを軽く叩きながらその丸々ふとつた肉附につくづく見とれた。彼はこの間に留まつて、これから毎日、市の學校へ通はなければならなかつた。父は一晚とまつて翌日かへつて行つた。いよいよお別れといふ時にも父は涙一滴こぼさなかつた。何か甘いものでも買つたり、お小遣にしろといつて、銅貨で五十圓くれたが、何より肝腎なことは、かういふ賢明な教訓を與へて行つたことである。「いいかえ、パウルーシヤ、よく勉強をしろよ、馬鹿な眞似をしたり、惡戯をしてはいけないが、何より大切なことは、先生や目上の人の氣に入るやうにすることだよ。目上の

人の氣に入つてさへおけば、よし學問は出來なくても、生まれつき才能には恵まれてゐなくても、結構うまくいつて、他人などはみんな追ひ越すことが出來るんだよ。友達づきあひなんぞすることはないぞ、どうせ碌なことは教へてくれやしないから。それでも、どうしてもつきあはなければならなかつたら、なるべく金持の子供とつきあふがいい、さうすれば、いざといふ時にはお前の助けになるからな。他人におごつてやつたり、御馳走をすることはないぞ、それより、他人からおごつてくれるやうに、巧く立ちまはるがいい。何より、貯蓄に心懸けて、錢をためることだ。錢がこの世では一番たよりになるのだからな。友達や仲間といふやつは、こちらが落目になると、第一番に裏切るけれど、錢といふやつは、どんな不幸な場合にも決してお前を裏切るやうなことはないよ。この世では錢さへあれば、どんなことでも出來るし、何でも貫徹することが出來るのだ。」かういふ教訓を與へて、息子に別れを告げると、父はまた『かささぎ』に馬車を曳かせて家へ歸つて行つた。それ以來、少年は二度と再び父には會はなかつたが、その言葉と教訓とは、彼の魂の底に深く沁みこんでしまつたのである。

パウルーシヤはその翌る日から學校へ通ひだした。特にどの科目といつて特別よく出來る學科はなかつたが、何よりも勤勉で几帳面な點に於いて彼は衆に抽んでゐた。その代り、他の方面——即ち實際的な方面で、素晴らしい才能を發揮した。彼は忽ち物事の要領を呑みこんでしまひ、友達との交際に於いても、うまく自分が御馳走になるやうには仕向けても、自分の方からは決しておごらなかつたばかりか、時としては、おごつて貰つた物をこつそり隠しておいて、後でそれを、おごつてくれた



相手に賣りつけるやうなことをさへしたものだ。まだ子供の時分から、彼は何事にも自己を制することが出来た。父から貰つた五十哥には決して手をつけなかつた。いやそれどころか、まるで並はずれな縦横の機智をはたかして、その年の中にもう幾らかそれを殖やしたほどで、なんでも蠟で鴉の形を拵らへて、それに彩色をほどこして、非常にいい値で賣つたのである。それからまた暫らくのあひだは別の投機に熱中したもので、それはかうである——先づ露店で何か食べ物を買ひこんで来て、教室ではなるべく金のある仲間のそばに腰をかける、さうして、その仲間が生唾を呑みこみはじめると、や——それは相手が空腹を感じだしたしるのだが——それを見てとると、彼はそしらぬ顔をしながら、ベンチの蔭から生薑餅だの白麵麩の一片をそつと見せびらかして、相手をじらして、その食欲についで金をせしめたのであつた。また彼は、二ヶ月のあひだ部屋にとちこもつて、二十日鼠を一匹、小さい木の檻籠に入れて、少しの休みもなく飼ひ馴らした擧句、たうとうしまひには、命令どほり、後足で立つたり、横に寝たり、起きあがつたりするやうに仕込んでから、それを矢張り非常にいい値で賣つたものだ。貯金が五、留に達した時、彼は囊を縫つて、また新らしく貯めにかかつた。上長に對しては、彼は更に上手に立ちまはつた。ベンチに掛けるにしても、彼ほどおとなしく、じつと坐つてゐる者はなかつた。茲で一言しておかなければならないのは、受持の教師といふのが、生徒が静肅で行儀のよいことの恐ろしく好きな人物で、いはゆる利口な、頓智のいい生徒には、我慢がならなかつたことである。彼にはさういふ連中が、どうしても自分を嘲笑つてゐるやうに思はれて仕方がなかつたのである。どうも才走つた奴だと睨まれてゐるやうな生徒は、ほんのちよつと身動きをする

とか何心なく眉でもしかめようものなら、もうそれだけで、たちまち教師の不興を買ふに充分であつた。彼はさういふ生徒をどこまでも追及して、情け容赦なく懲罰を加へたものだ。「ようし、貴様のその圖々しい、人を食つたやうな態度を叩きな呼してくれぞ！」と、彼はがなりたてるのだ。「ちやんと貴様の吐は知り抜いてゐるんだぞ、貴様が身のほどを知らないのと同じくらゐに、わしは何もかも知つてゐるんだ。さあ、膝を突いて立つてをれ！少しは俄じい目を見るがよからう！」かうして、哀れな少年は、何の咎とも分らずに、膝頭を擦りむきながら、一晝夜の飢えを忍ばねばならないのだつた。「才能だの天分だのといふものは取るに足らん！」かう、常々その教師は言つた。「わしは何よりも品行に重きをおいてゐる。たとへ、いろはのいの字一つ知らないでも、品行さへ方正な生徒には、わしは全科目に満點をつけてやる。しかし、根性がまがつてゐて、人を嘲けるやうな癖のある子供は、たとへッロンを瞪若たらしめるほど學問が良く出来ても、零をつけてやるのだ！」こんな風に言ふその教師は、クルイロフが死に際に、「酒は飲んで飲まいでも、務めることはちやんと務める」などと言つたといふので、この寓話作家を死ぬほど嫌ひ、自分が前に奉職してゐた學校では、生徒が非常に静肅で、蠅の羽音さへ聞こえる位で、一年中を通じて生徒のうち、教室で咳をしたり涙をこぼしたりする者は一人もなかつたから、放課の鐘がなるまでは、教室の中に人がゐるのかゐらないのか、とんと分らないくらゐだつた、などとさも満足さうに、眼を細くして物語つたものだ。チチコフは直ぐにこの先生の氣風を呑みこんで、品行よく見せるにはどういふ風にしなければならぬかといふことを會得した。課業ちゆうには、後ろからどんなに突つかれようと、彼は眉毛一筋うごかさず、まばたき一



つしなかつた。そして放課の鐘が鳴ると同時に、薄地に駆け出して、彼は誰よりも先きに三角帽を教師に取つてやつた。(その教師は三角帽をかぶつてゐたからである。)三角帽を渡してやると、今度は誰より先きに教室を飛び出して、二度も三度も教師に出會ふやうにして、そのたびに彼は帽子をとつてお辭儀をしたものだ。かうした努力は完全に効を奏した。で、ずつと在學中は素晴らしい點を取り、卒業の折には全科目に満點の成績をつけられて、卒業證書と共に、『學術優等品行方正を賞す』と金文字を入れた本を一冊もらつた。學校を卒業する頃には、もうそろそろ下顎に剃刀を當てなければならぬ位の、かなり風采の立派な若者になつてゐた。丁度その頃、彼の父が亡くなつた。遺産として残されたのは、もうどうにも繕ひやうのないぼろぼろに着古された四枚のジャケツと、羊の毛皮を裏につけた二着の古いフロックコートと、それから、ほんの僅かばかりの金子であつた。どうやら彼の父は、金子を貯めよ金子を貯めよと、口先だけは喧ましく言つても、自分ではいつかう貯めなかつたものと見える。チチコフは早速、古ぼけた家邸を、取るに足らぬ僅かな地所もろとも、一千留の金子にかへ、農奴の一家を市に移して、そこに落ちついて勤務につかうと目論んだ。丁度その頃、靜肅で品行の正しいことをあれほど愛好した哀れな例の教師が、あまり馬鹿げてゐたためか、それとも何か他に原因があつてか、とにかく學校を罷免になつたのである。教師は自棄になつて酒を飲みだしたが、たうとうしまひには、飲代もなくなつてしまひ、おまけに病氣になつて、一片の麵麩もなければ、頼る人もなく、どこか場末の、犬小屋のやうな火の氣もない荒ら家に逼塞してゐた。以前の教へ子で、始終この教師から、やれ従順でないの、態度が傲慢不遜だのと言はれてゐた、謂ゆる利口な生

徳や領知のきく學生が、この舊師の氣の毒な境遇を知ると、中にはいろんな必要な持物まで賣り拂つて、さつそく彼のために義捐金を集めた。ただパウルーシャ・チチコフだけは、自分も貧しいのだからと言ひ逃れて、なんでも五哥銀貨を一枚だけ出したきりであつた。で、級友たちは即座にそれを彼に叩きつけて、「えい、この吝嗇漢め！」と罵つたさうだ。哀れな教師は、自分の以前の教へ子たちがそんなことまでしてくれたと聞いた時、兩手で顔をおほつて、霞んだ兩の眼からぼろぼろと涙をこぼしながら、頭はない子供のやうに、おいおいと泣いた。「死に臨んで、わしは初めて心から泣かされました。」と、彼は弱々しい聲で言つたが、チチコフのことを聞くと、せつなさうに溜息をついて、から附けくはへたさうだ。「えつ、あのパウルーシャがね！人間つて、そんなに變るものかしら！ほんとに心懸けのいい子でな！亂暴なところなど少しもない——仔羊のやうにおとなしい子供だつたが！それぢやあ、猫をかぶつてゐたのだな、まんま猫をかぶつて……」

だが我等の主人公が、生まれつき、これ程までに冷酷無情で、憐憫も同情も知らないほど鈍感な性質であつたとは、一概にいふことは出来ない。彼とても、憐憫も感ずれば、同情も禁じ得なかつたのだ。それどころか、舊師を扶助したいのは山々であつたが、ただ、これだけは手をつけまいと決心した金子に手をつけるのが厭さに、あまりまとまつた金額は出せなかつたのだ。つまり「儉約して錢を貯めよ」と諭した父の教訓が骨身にしみこんでゐた譯である。しかし彼は決して金子そのものために金子に執着を持つてゐたのではない。彼を支配したのは決して吝嗇でも貪慾でもなかつたのだ。さうだ、彼を動かしてゐたのは決してそんなものではなかつた。彼は何ひとつ不足のない榮耀榮華な生



活を未來に夢見てゐた。馬車や、素晴らしい設備の住宅や、美味しい料理——さういふものが絶えず彼の胸裏に浮かんでゐたのである。そのうちには何時か、必らず身をもつてさういつたものを享樂することが出来るやうにと、只管それがために自分のあひだは自からの慾望を抑へ、他人への義理を缺いてまでも、零細な金子を粒々として貯めてゐたのである。自分の傍を金持が、素晴らしい馬具をつけた跑馬に曳かせた軽快な美しい馬車に乗つて景氣よくやつてゆくのをみると、彼はその場に釘づけにされたやうに、じつと立ちすくんでしまふ。が、やがて長い夢からでも覺めたやうに、我れに返つて、かう口走つたものである。「なんだ、あいつも帳附をしてゐた頃は、頭をおかつぱにしてゐたやないか！」とにかく、富とか安逸の匂ひのするものは、何によらず、彼には自分でも譯の分らない異常な印象を與へたのである。學校を出ると、彼はもう一刻もぼんやりしてゐることが出来ず、少しも早く勤め口がありついて精勤を働きたいといふ強い念願に驅り立てられた。けれど、立派な成績の卒業證書がありながら、支金庫の下つ端役人になるのにも、彼は並々ならぬ難關を突破しなければならなかつた。どんな邊鄙な片田舎でも、やはり手廻といふものが必要なのだ！ 彼はやつと詰まらない職にありついたが、給料は年に三四十留に過ぎなかつた。それでも彼はその職務に精勵して、どんなことにも打ち克たうと決心した。實際、前代未聞といつてもいいくらゐの、克己と忍耐と節約を彼は示したのである。朝早くから夜おそくまで、精神的にも肉體的にも倦まず憊まず、公文書の中へ埋まりきり、彼はせつせと書きものに没頭し、夜も家へは歸らず、役所の事務室で卓子の上に寝て、時には小便と食事を共にしたりもしたが、それにも拘らず、身のまはりをさつぱりとし、服装もきちん

と整へて、顔には氣持のいい表情をうかべ、そのうへ物腰にどことなく上品な趣きさへ添へるコツを心得てゐた。支金庫の役人といへば、面相がお粗末で、風采のあがらないことで特に知られてゐるものだ。中には麵麴の焼け損ひみたいな顔をしてゐる連中もあり、頬が右へ膨れあがつてをれば、顎は左へひん曲つてゐるし、上唇は水腫のやうにむくれて、おまけに龜裂が入つてゐる始末——一言にしていへば、まつたく見られた面ではないのだ。この連中の言葉づかひがまた實に亂暴で、がみがみとまるで噛みつくやうな劍幕でまくしたてる。何かといへば、ハッカスに贅を捧げて、今なほスラヴ族の血が多量に異教時代の名残を留めてゐることを證據だてる。時には、謂ゆる一杯機嫌でもつて、役所へのさばり出ることさへあるので、さうなつては神聖なお役所も臺無しで、文字どほり香しからぬ空氣に充たされてしまふのである。かういつた役人連のあいだに伍して、一から十まで全然この手合ひとは正反對で、顔立も綺麗なら、聲にも愛嬌があり、そのうへ強い酒などは一滴も飲まないチチコフが、一段と圖抜けて目立たない筈はなかつた。が、それにも拘らず、彼の進路には苦難が横たはつてゐた。第一、彼の上役といふのが極めて齷齪な、まるで木石のやうに冷酷な、梃子でも動かぬ頑固屋の標本をつくりの課長で、生涯に一度として笑顔を見せたこともなければ、人に向つて御機嫌は如何と挨拶ひとつしたことのない、實に近寄りにくい人物であつた。この男が往來に出た時にせよ、家にゐる時にせよ、つひぞいつとも違つた顔をしてゐるのを見た者はない。何か一度でも彼が同感を示したこともなければ、酒を飲んで酔つて笑つたこともなく、酔つぱらつた時には山賊でもやる、あの馬鹿騒ぎに彼が現を抜かした例もない。いや絶対に彼は、そんな氣振りも見せなかつた。何一つこ



男には、悪人なら悪人、善人なら善人といふ、はつきりしたところがなく、そのどちらでもないところに、何かしら不気味なものが現はれてゐた。彼の大理石のやうに冷酷な顔は、どこといつて際立つた缺點がなく、それでゐて、見たところ全然類ひのない顔で、その線と線が互ひに深刻な均衡を保つてゐた。ただやたらに痘斑や窪みはその輪郭を破つてゐるため、民衆的な表現に従へば、悪魔が夜な夜な豌豆を搗きにくるといつた顔に數へられる譯である。こんな人物に取りいつて御機嫌を取り結ぶなどといふことは、とても人間業では出来さうもなかつたが、しかしチチコフは進んでそれをやつて見た。最初に彼は、ごく詰まらない事柄で相手に取り入らうとした。先づこの男が使つてゐる鷲ベンの削り方をよく調べて、それに倣つて何本も鷲ベンを削つておき、始終それを相手の手許へ差し出すやうにした。また、相手の卓子の上にとぼれた砂だの煙草の粉を、吹き拂つたり掃き落したりもした。相手のインキ壺を拭く新しい布片を持つて來もした。また、いつも退廳の一分間ぐらゐ前になると、世の中によくもこんな帽子があると思はれるやうな、とてもひどい相手の帽子を捜して來て、そつと手許に置いてやり、もし相手が背中を壁で擦つて白い粉でもつけてをれば、それをよく拂つてやりもした。しかし、さうした努力も、まるでそんなことは何一つしなかつたと同様に相手からは全然、認められなかつた。最後に彼は課長の家庭生活と家族關係をさぐつて、相手が年頃の娘を持つてをり、それがやはり、夜な夜な悪魔が豌豆を搗きにくるといつたさうな御面相の持主であることを嗅ぎ出した。そこで彼はこの搦め手から攻撃してやらうと考へた。その娘の日曜日ごとに行く教會を調べあげると、彼はさつぱりした服装に、ピンと糊のきいた胸當をつけて、毎週その教會へ出かけては、彼

女と相向ひに席を取るやうにした。この戦法がまんまと圖にあたり、さすがに頑固な課長もつひに折れて、彼をお茶に招待したのである！ 役所の連中がまだそれと氣づかぬ中に、事をどんどん運び、逸早く先方の家へ引き移つて、もうその家にとつて必要缺くべからざる人間になりますし、麥粉を買つたり砂糖を買つたりして、娘に對しては婚約者のやうな態度を取り、課長をお父さんと呼んで、その手に接吻したりしたものだ。役所ではみんなが、二月の末か、遅くとも大精進期の前には婚禮が擧げられるものと決めこんでゐた。頑固な課長も、我等の主人公のために當局に奔走してくれるやうにさへなり、間もなくチチコフには、たまたま空いた課長の椅子が與へられることになつた。どうやら、彼が老課長に接近した第一の附け目はそこにあつたらしく、目的を達すると同時に、彼は自分の荷物をこつそりまとめて、もう次ぎの日には早くも新しい宿へ移つてゐた。もはや課長をお父さんと呼びもしなければ、その手に接吻することも罷めてしまひ、結婚の話などは、全然何事もなかつたやうに、そのまま立ち消えになつてしまつた。それでも老課長に會ふたんびに、彼はいそいそとその手を握つて、どうかお茶に來て下さいなどと愛嬌をふりまいた。だから、さすが物に動じない頑固一點張りの相手も、そのたんびに頭を振り立てては、かう鼻の先きで呟やいたものだ。

「一杯くはせやがつたな、畜生め！」

これが、我等の主人公の乗り越えた最大の難關であつた。もうこれから先きは、すつと容易に物事が首尾よく成就して行つた。どうやら彼も一角の人物になつた。彼には處世のために必要なあらゆる武器がそろつてゐた——洗練された舉措動作はいかにも氣持よく、事務にかけてはキビキビと鋭横に



彼腕をふるつた。さういふ武器によつて間もなく彼は、謂ゆる割のいい地位を贏ち得て、それをまた實に巧みに利用したのである。かの收賄に對する極めて嚴重な紀明が行はれたしたのは丁度その頃だつたといふことを心得ておく必要がある。ところが、彼は一向そんなことに驚かなかつたばかりか、さういふ弾壓に逢つて初めて本領を發揮する、あのいかにも露助らしい日端をはたらかして、忽ちそれを、逆に自分に有利な武器に變へてしまつたのである。では一體どんな風にしたかといふと、かうである——まづ請願者がやつて来て、やをら手をポケットに突つこんで、我が露西亞帝國に於ける一般の表現によれば、謂ゆるホワンスキイ公爵の署名した紹介状を取り出さうとするとき、その手を押へるやうにして、「いや、いや、その御斟酌には及びませんよ」と彼は、にっこりしながら言つたものだ。「あなたは私をそんな人間だと思ひになるんですか？ いや、決して決して！これは我々の義務なんです、我々の職務なんです。だから決して報酬などは頂かなくても、手続きはちやんといたします！ その點はどうか御安心ください。明日までには萬遺漏なく整へておきますから。では、ちよつとお住ひを伺はせて下さい、わざわざ御足勞をかけるまでもなく、こちらからお宅へお届けいたしますから。」そこで請願者はすつかりいい氣持になり、殆んど有頂天になつて、「いや、まづたく立派な男だ、ああいふ人間が一人でも餘計にゐてくれると有難いんだがなあ！ あれはまづたく、素晴らしいダイヤモンドだ！」と考へながら、家へ歸つて行く。ところが、請願者が一日待つても二日待つても、頼んでおいた一件書類はいつから家へ届けてくれない。三日目になつても、やはり來る様子がない。痺れを切らして彼が役所へ行つてみると、書類はまるで手もつけてないのだ。そこで素晴らし

ダイヤモンドに會つて様子を糺すと、「おや、御免なさい！」かう、チチコフは相手の兩手を握りながら、馬鹿丁寧に言ふのである。「何しろ、このところ仕事が高んでをりましてね、しかし、明日は萬事とのへておきますよ、明日は間違ひなく！ いや、まづたく申譯ございませぬ！」さう言ひながら、實に魅惑的な素振りをするのであつた。そんな折に、着物の裾でもはだかつてゐたりしようものなら、急いでそれを直して、裾を手で抑へたものである。ところが、明日になつても、明後日になつても、そのまた翌る日になつても、書類はいつから届けてくれない。そこで請願者は、「ははあ、こりや何か曰くがあるんだな？」と、やうやく氣がつく。で、それとなく當つてみると、「幾らか書記には掴ませなくつちやあ」といふ話だ。「勿論、出しますとも！」二十五哥銀貨の一つや二つは、ちやんと出す覺悟なんで。」——「いや二十五哥銀貨ちや駄目ですよ、白紙幣一枚つづつは奮發しなくつちやあ。」——「えつ、書記に白紙幣を一枚づつですつて！」請願者はおつたまげてしまふ。——「何をそんなに吃驚なさるんで？」と、先方が應酬した。「つまり、かうなんですよ。書記には結局、二十五哥づつしかあたらないで、殘額は上役の懐ろへ入るつて譯でさ。」血のめぐりの悪い請願者も、ここでボンと額を一つ叩いて、新らしい制度だの、收賄の取締りだの、役人連のいやに上品ぶつた、馬鹿丁寧な態度だのを、糞味噌に罵るのである。(少なくとも以前は、やり方のコツぐらゐはちやんと分つてゐた。まづ課長に赤紙幣の一枚も握らせさへすれば、滞りなく地がついたものだが、今どきは白紙幣でなくつちや通用しないと仰つしやる。おまけに、相手の肚をさぐるのに一週間もかかるんだ……ちえつ、役人どもの清廉だの潔白だのなんて、糞くらへた！)なるほど請願者がかういふのは尤もであ



る。その代り大つ平に賄賂を取るやうな者は一人もなくなり、課長や局長といった上役はこの上もなくお上品に取りすましてゐて、ただ秘書だの書記だのといふ手合ひだけが悪者にされた譯である。間もなくチチコフには素晴らしい幸運がめぐつて來た。といふのは、非常に大規模な豫算で、或る官立の建物を造營する、建築委員會が組織されて、彼もそれに推舉されて、最も活動的な役員の一になつたことである。委員會はすぐさま事業に着手した。その建物をめぐつて荏苒六ヶ年の歳月が費やされた。ところが、天候に妨げられたとでもいふのか、それとも建築材料の所以だともいふのか、兎に角その建築は、基礎工事以上には少しも捗つてゐなかつた。それに反して、市の別々の方面に、委員會の役員に住ひととして、それぞれ一軒づつの瀟洒な構への住宅が、いつの間にか立派に出來あがつてゐた。どうやらこの方が、すつと肥料がよくきいたものらしい。役員連はそろそろ好い景氣になつて、めいめい家庭を営んだりし始めた。やうやくこの頃になつて、チチコフも初めてあの嚴しい禁慾と頑固な自己否定の掟を少しづつ緩めにかかつた。この時分から初めて、あの久しい間の精進がやうやく緩和されるに至り、彼とてもいゝんな快樂に對して必らずしも無關心であつた譯ではなく、ただ血の氣の多い青年時代には誰ひとり完全に抑制する者のない情熱をよく彼が制御し得たに他ならないことが明らかになつた。ちよいちよい奢侈が頭をもたげて、相當腕ききの料理番を雇つたり、和蘭陀渡りの薄手の襪衣を身につけるやうになつた。また、その縣下ではまだ誰も著てゐないやうな素晴らしい服地を買ひこんだりして、その頃からして、どつちかといへば、ピカピカして赤味の勝つた、例の肉桂色といふやつに執着を持つやうになつたのだ。また素晴らしい二頭立の馬車を手に入れ、自分

で片方の手綱をにぎつて、脇馬の首をぐつと外方へ引きしぼつて駆けさせた。オーデコロンを混ぜた水を海綿にふくませて、それで軀ぢゆうを拭く習慣のついたのもその頃だし、また肌を滑らかにする目的で、非常に高價な石鹼を買つたりし始めたのもその頃からだし、それから矢張り……

ところが不意に、これまではいつものほほんをきめこんでゐた長官のあとへ、今度は軍人あがり、とても口喧ましく、收賄はもとより、少しでも不正なことは斷じて許さない、新しい長官が赴任して來た。到着したすぐ翌日、彼は一々始末書を提出させて、職員といふ職員をすつかり震へあがらせたが、收支が曖昧で、到るところに使途不明のまま、公金が不足してゐるのを發見すると、忽ち、例の素晴らしい構への瀟洒な住宅に眼をつけて、さつそく調査の歩を進めた。役人連は續々と免職になり、瀟洒な素晴らしい構への住宅は國庫に沒收されて、種々の保護院や少年兵の校舎などに姿を變へた。誰もかもが散々に叩きのめされた譯であるが、殊にチチコフはひどい目にあつた。あんなに氣持のいい表情をもつてゐたにも拘らず、彼の顔が最初から長官の氣に入らず——いつたいどうした譯か、それはさつぱり分らない。聞々かういふことには、まるで原因のないことだつてよくあるものだが——とにかく、チチコフを死ぬほど毛嫌ひしたのである。尤も、この頑迷不靈な長官は、何人にとつても恐ろしい脅威であつた。が、矢張り軍人あがりであるだけに、従つて、官吏社會で行はれる巧妙なトリックには、いつから氣がつかかなかつた。それで暫らくの間に他の役人連が、いかにも尤もらしい僞装と巧みな操縦によつて彼をまんまと丸めこんでしまつたため、間もなくこの將軍は以前のより一層ひどい悪黨どもの傀儡に化してしまつた。しかもその手合ひがそんな悪黨だとは夢にも知



らず、それどころか、適材ばかり集めたものと自惚れて、おれには人の才能を見分ける鋭い眼力があるなどと、本気で自慢したものである。婦人連は忽ち彼の氣風と性格を會得くわいとくんでしまった。彼の配下に屬する者は一人残らず、惡辣極まる不正不義の追求者となり、さながら銛いばしを携へた漁夫がよく肥つた鱈たら魚でも追ひまはすやうに、一事が萬事、不正の利慾を貪るに汲々として寧日なき有様であつた。しかもそれが悉く圖にあたつて、役人どもは短日月のあひだにめいめい數千留づつの私財を積むに至つたのである。その時分には、先きに臙首された役人連も多くは正道に歸つて、再び復職を許されてゐた。が、チチコフばかりはどんなに奔走しても復職の願ひが叶へられなかつた。すつかり將軍の鼻づらを捉まへて、好きなやうに引つぱりまはす術を心得てゐる將軍の主席秘書が、例のホワンスキイ公爵の紹介狀にそそのかされて、どんなに彼のために骨を折つてくれても、こればかりは絶対に如何ともすることが出来なかつた。成程この將軍は、好きなやうに鼻づらを持つて引つぱりまはすことは出来ても（とはいへ、御本人はそんなことに氣がついてゐた譯ではないが、その代り、一旦からと思ひこんだが最後、その考へが、まるで鐵の釘でも打ちこんだやうに、しつかり頭に食ひこんでしまつて、どうしてもそれを引き抜くことが出来ない、といつた類ひの人間であつた。賢明な秘書がやうやくなし得たことといへば、ただチチコフの勤務履歴に汚點を留めぬやうに取り計らつたぐらゐが關の山で、それも、チチコフの家族の悲惨な運命をまざまざと、眼に見えるやうに述べたてて、同情に訴へた結果、やうやく長官を動かすことが出来たのである。が、我等の主人公にそんな家族のなかつたことが、せめてもの仕合はせであつた。

「ふん、何といふことだ！」と、チチコフは呟やいた。「うまく引つ掛けて、手近まで引き寄せた途端に、まんまと取り逃がしちまつた譯だ。今さら泣いてみたところで始まらない、何とか善後策を構じなくつちやあ。」そこで彼は意を決して、これまでかなり勝手氣儘にふるまつてゐた、放漫な生活をすつかり引き緊めて、再び辛抱の二字を頭に、新規まきなほしに、改めて榮達をはかることにしたのである。それには他の市へ引き移つて、そこでもう一度名をあげなければならぬと思つた。しかし、どうも思ふやうには行かなかつた。ほんの短時日のあひだに、彼は二度も三度も勤め口をかへなければならなかつた。その勤め口も、むさくるしくて卑しいものばかりだつた。茲でせひ御承知おき願ひたいのは、チチコフといふ人間が天地開闢以來、類のない、いたつて潔癖な虚飾みせかけ漢だつたといふことである。最初のうちは、ずるぶん野卑な連中とも接觸しなければならなかつたけれど、それでも彼は、心には常に潔癖をたもち、事務室などもワニス塗りの卓子をそなへて、きちんとよく整頓されてゐないと、どうも氣にくはなかつた。話をするときにも、彼は決して無作法な言葉を口にしなかつたが、他人がもし、こちらの身分や官等に適はしい敬語を使はないと、いつも機嫌を悪くしたものだ。讀者は彼が、平素一日おきには必らず肌膚を取り替へ、殊に夏、暑い時分には毎日取り替へたといふ事實を聞いて、さぞかし満足されることと思ふが、彼は何かちよつとでも不快な臭ひがすると、すぐ腹を立てるのであつた。そんな理由から、例のベトワールシカが着物や長靴を脱がせに入つて來るたんびに、彼は急いで鼻の孔へ丁香香を押しこんだもので、彼の神經はまるで少女のやうに敏感であつた。従つて、いつもアルコールの臭ひをブンブンさせて、無作法な眞似ばかりしてゐるやうな手合



ひと再び肩を並べるといふことは、彼には堪へ難い苦痛であつた。で、心ではどんなに頑張つてゐても、矢張りさうした不遇時代には、さすがに肉も落ち、顔色まで蒼白もろめたほどである。もうその頃から彼はそろそろ肥りだして、讀者がこの男と知合ひになつて、初めて彼を御覽になつた時のやうな、あのでつぷりした、申七分のない恰幅をそなへ、鏡を覗くたんびに、一再ならず、初々しい妻のことだの、可愛い子供のことだのといつた、いろんな楽しい空想に耽つては、いつもその後でにつこりと微笑を浮かべたものである。が、ふと今、鏡に映つた自分の姿を眺めると、彼は思はず、「おや、おやー おれの穢きたなくなつたことはどうだい！」と、口走らずにはをられなかつた。そしてその後は久しいあひだ、鏡など覗かうともしなかつた。しかし、我等の主人公はすべてを耐へ忍んだ、一心に、我慢よく辛抱した。そして最後に税關吏の職にありついた。茲でちよつと一言しておかねばならぬのは、この勤めが久しい以前から彼の野心の秘かな対象となつてゐたことである。彼は税關の役人が洒落た外國製品を身邊にそなへたり、珍らしい陶器やパチスト麻布マキを教母だの、叔母だの、妹などに送つてやつたりするのを知つてゐた。すゐぶん前から、彼は溜息をつきながら、よくこんなことを呟つぶやいたものだ。「ああいふところへ勤めたいもんだ。國境は近いし、同僚はみな教育があるし、第一、あの素晴らしい和蘭陀渡りの襦じゆ衣だつて幾らでも手に入れることが出来るんだからなあ！」それからもう一つ、肌をとでも白くして、頬に生々した艶を出す、或る種の佛蘭西石鹼セキのことを、その際、彼が心に浮かべてゐたことも、序でに附け加へておく必要がある。それが一體どんな名前の石鹼やら、さつぱり見當がつかないけれど、彼はそんなのが外國には必らずあるに違ひないと想像してゐ

たのである。そんな譯で、もう前にも彼は税關へ入りたいと思つたのだが、ちやうど例の建築委員會のいろんな當面の利益に阻まれたり、また税關がどんなに有利であるにしても、まだ空を飛んでゐる鶴に他ならないが、委員會の方は兎にも角にも手に握つた四十雀だといふ、至極尤もな考へから、そのまま今日に及んだのであつた。が、今や彼は、是が非でも税關へ入りこまうと肚をきめた——そして、つひにその目的を達したのである。彼は異常な熱心さで職務についた。さながら彼は、税關吏たるべき運命を擔つてこの世に生まれて來た觀があつた。これほど機敏で洞察力に恵まれた爛眼の持主は、つひぞこれまで誰も見たことがないばかりか、話に聞いたこともないくらいであつた。三四週間のあひだに彼はもう、すつかり税關の事務に手馴れて、一から十まで何もかもすつかり呑みこんでしまつた。そればかりか、わざわざ秤はかりにかけたり、物指ではかつてみたりするまでもなく、ちよつと品質を見ただけで、羅紗ワジャなり他の織物なりが何ヤールあるかといふことを一目で見抜いたり、小包みを手てに持つて見ただけで、即座にその目方が何百匁あるかを言ひあてたりすることが出來た。旅客の持物を検査する段になると、他ならぬ彼の同僚の言ひ草ではないが、まつたく犬のやうによく鼻がきいたもので、彼が卸の一つ一つまでを、一々手でさはつて行く根氣のよさには、まつたく驚嘆の他はなかつたが、しかも彼は、冷靜石の如き落着きと、殆んど信じられないやうな感慙な態度でそれをやつてのけたのである。身體検査をされてゐる當人がむかつ腹を立て、堪忍袋の緒を切らして、この税關吏の、いかにも氣持のよささうな顔をした横つ面をぶんなぐつてくれようと、うづうづ苛立つてくるやうな時ときでも、彼は顔の筋ひとつ動かさず、例の感慙な態度も失はないで、ただこんな風にいふだけ



であつた。「まことに恐縮ですが、ちよつとお立ちになつて頂けないでせうか？」とか、「恐れ入ります  
が奥さん、ちよつと隣りの部屋までお越しねがへませんでせうか？ あちらで、この官吏の一人の  
細君が、ちよつとお耳を拝借いたしますから」とか、「失禮ですが、あなたの外套の裏を、ちよつとナ  
イフでほどかせて頂きます」とか。さう言ひながら、彼はそこから肩掛だの、ハンカチだのを、まる  
で自分の旅行鞆トからでも取り出すやうに無頓着に曳つぱり出したものである。上官連ですら、あいつ  
は悪魔だ、人間ぢやないと評したほどで、馬車の輪からも、轆カからも、馬の耳からも、そのほか、そ  
んなところに物が隠してあらうとは、作者などにはとても考へもつかない、つまり税關役人だけが眼  
をつけるやうなところからいろいろなものを探し出したものである。だから、國境を越えた哀れな旅人  
たちは、暫らくのあひだは茫然自失の體で、全身にかいた冷汗を拭き拭き十字を切りながら、ただ  
「えい、何てこつた！」と呟やくばかりであつた。その有様は、教師から何か訓戒を受けるために秘  
密室へ呼びこまれた生徒が、訓戒どころか全く思ひもかけぬ、こつびどい打擲を受けて、そこから飛  
び出して来るのにさも似てゐた。暫らくのあひだは、彼のために密輸業者どもは戰々競々として生き  
た空もない有様であつた。これは波蘭に住む全猶太人にとつての大恐慌であり、絶望であつた。彼の  
公正と廉潔とにはまるで手の施しやうがなく、それは殆んど不自然に思はれるほどであつた。彼は、  
いろんな没收した貨物をごまかしたり、押收したものの、却つて手續きが面倒だといふので國庫へ  
は收めない細々した品物などを着服して、ケチな資本を拵らへるといふやうなことさへしなかつた。  
これほど熱心で無慾恬淡な勤務ぶりが、一般的な驚嘆の的とならずにゐる筈はなく、しまひにそれが

長官の耳に入らぬ譯はなかつた。で、然るべき官等を授かり、地位も一級あがつたが、すると彼は、  
密輸業者を一網打盡に檢擧する案を提出して、その實行方法を自分に一任して貰ひたいと願ひ出た。  
彼は直ちにその指揮權と、あらゆる探索をする無制限の權力を委託された。これこそ豫て彼が望んで  
ゐたところであつた。ちやうどその頃、極めて正確な方法で、實にうまく考へた、密輸業者の有力な  
團體が組織されてゐた。その大膽な計畫が圖にあたれば、何百萬留といふ利益のある見込みがついて  
ゐた。彼はもう疾づくにその情報を手に入れてをり、剩つさへ自分を買収するために派遣されて來た  
使者に、「まだその時期でない」と耳打ちをして、拒絶したほどであつた。が、いよいよ例の命令を受  
けると、彼はすぐさま、さあ、「今こそ時だ」と密輸團に知らせた。この計算には一分の狂ひもなかつ  
た。今こそ彼は、二十年の精勵格勤によつても得られないほどのものを、たつた一年で手に入れるこ  
とが出来たのだ。前に彼がそんな手合ひと容易に關係を取り結ばうとしなかつたのは、どうせ詰まら  
ない手先に使はれるだけで、大して金になる見込みがなかつたからである。が、今は……今は事情が  
全然別で、どんな好き勝手な條件でも持ち出すことが出来るのである。なるべく支障のないやうに事  
を運ぶため、彼は自分の同僚の、もう一人の役人を抱きこんだ。その男はもう頭に霜をいたたく年配  
であつたにも拘らず、その誘惑を退けることが出来なかつた。約定が取り結ばれると、密輸入團はい  
よいよ活動に移つた。活動は華々しく開始された。恐らく讀者諸君は、西班牙から緬羊を移入するや  
うに見せかけて何度も行はれた、あの巧妙きはまる密輸入の話の聞いてをられるに違ひないが、その  
緬羊どもは二重に毛皮を著せられて、毛皮の下には何百萬留といふ價格にのぼるブラバントのレース



が匿されてゐたのである。それが丁度チチコフの税關に勤めてゐた頃の出来事であつた。もしチチコフがこの計畫に加はつてゐなかつたなら、世界ぢゆう何處の猶太人にも、こんな藝當がうまいまよやつてのけられる筈はなかつた。かうして三四回、緬羊の群れに國境を越えさせると、二人の役人の懐ろには、おのおの四十萬留からの金がころがりこんでゐた。それどころか、チチコフの方は一層大膽であつただけに、恐らく五十萬留を越えてゐたらうといふ評判であつた。で、もしも或る不吉な獸が道を横切るやうなとさへなかつたなら、この素敵もない金額はどこまで殖えて行くとも見當がつかなかつた。ところが魔がさしたとでもいふか、二人の役人は、つい前後の考へもなく、有體にいへば、つまらないことから赫つと逆上して、仲違ひをしまつたのである。二人が何か夢中で議論をしてゐた際に、それを、少しは酒の勢ひがまじつてゐたかも知れないが、チチコフは相手の役人を、なんだ坊主の件めと罵つた。ところが、相手は事實坊主の子であつたにも拘らず、どういふ譯か、恐ろしくかんかんになつて腹を立て、即座に嘯みつくやうな烈しい調子で、こんな風に言ひ返したのである。「なに嘘をつけ！ おれは苟しくも五等官で、坊主の件なんかぢやないぞ！ さういふ貴様こそ、まさしく坊主の小件だ！」そして、いよいよ相手をやつつけてやらうものと、逆振をくはせるやうに、「どうだ、それみたことか！」とつけ加へた。彼はこんな風に體をかはして、先方から吹つかけてきた悪口を逆に相手へ投げ返したばかりか、「どうだ、それみたことか！」などと、すねぶん人を喰つたことを言つたにも拘らず、それでもまだ足りないで、相手を秘かにその筋へ密告したのである。だがこの二人は、何でも税關吏たちの言ひ草では、そんなこととは別に、まるで瑞々しい燕のやうに

新鮮で、ピチピチした一人の若い女を張りあつて、喧嘩をしてゐたといふことで、いつか闇夜に暗い横町かどこかで我等の主人公を闇討にするため、數人の男が買収されてゐるといふ噂さへあつたくらゐだ。が、二人の役人が唾みあつてゐる間に、その女は二等大尉のシャムシャレヨースとかいふ男にまんまと弄ばれてゐたといふ話である。果して真相がどうであつたか、それは神より他に知る者がな<sup>い</sup>。もし物好きな讀者があつたら、一つお好きなやうに筋を立てて戴きたいものだ。何より肝要なことは密輸業者との秘密な關係がばれてしまつたことである。五等官は自分も身を滅ぼしたけれど、とにかく相棒を暗いところへ打ちこんでしまつた譯だ。二人の役人はその筋に逮捕されて、あらゆる財産は差押へられ、残らず没收されてしまつた——すべてが、あつといふ暇もなく、晴天の霹靂のやうに二人の頭上へ襲ひかかつたのである。悪夢からでも覺めたやうに我れに返ると、飛んでもないへまをやつたことに氣がついて、二人は愕然とした。五等官は運命に抗すること能はず、何處か邊陲の地へ左遷されて、あたら一生を棒に振つてしまつた。が、六等官は飽くまで運命に反抗した。彼は檢證をやつて來た長官の鋭い眼をかすめて、金子の一部を巧みに隠匿しおほせた。彼はもうどこまでも經驗をつんで、裏の裏まで世間を知つてゐる人間の、あらゆる微妙な、變轉自在な手練手管を驅使した。——或る時は如才のない態度で効果をあげ、或る時は感動的な言葉でホロリとさせ、また或る時は、どんな場合にも決して事をぶちこはすことのない阿諛で煙に巻き、或る時はそつと袖の下を使つた——一口にいへば、免職にはなつても、例の相棒みたいな不體被な羽目に陥らないだけの工作を施して、刑事裁判をまんまと免れたのである。だが、もはや彼には、あの莫大な金も、いろんな外國製の



雜貨も、何一つとして残されてゐなかつた——さういふものは、それぞれみんな他に愛好者を見つけてしまつたのだ。彼の手許には、どちを踏んだ時の用心にもと隠しておいた僅々一萬留の金と、和蘭陀製の襦袢が二ダースばかりと、よく獨身者が乗りまはすやうな例の小型の半蓋馬車と、二人の農奴——馭者のセリファンに従僕のベトールシカ——とが残つてゐるだけであつた。それに税關役人が親切に残しておいてくれた、頬の肌理をよくするための石鹼が五つ六つ——それだけで一切合切だつた。こんな譯で、又しても我等の主人公は惨めな逆境に身をさらしたのである！ 怖ろしい災厄の海嘯が彼の頭上にどつと押し寄せたのである！ これこそ彼が、勤務中にも正義のために苦しんだと稱するところのものである。今や、このやうな暴風や、試煉や、運命の有爲轉變や、人生の悲哀に責め苛まれた後では、手許に残つた虎の子の一萬留を後生大事に、どこか平和な田舎町へでもすつこんで、明け暮れ更紗の寛衣にくるまつて、建の低い家の窓際に坐りながら、日曜ごとに窓さきでおつ始められる百姓どもの喧嘩を取り裁くとか、新鮮な空氣を吸ふために、ちよつと雞舍へ出かけて、スーブにする牝鶏を手づから觸つてみたりしながら、彼がそんな風にして極めて靜穩な、しかしながら、それはそれで必らずしも無用でない半生を、ることになるだらうと推測されないものでもない。が、事實はまるで正反對であつた。茲で彼の不撓不屈の性格を正當に見なほす必要がある。人間一匹を臺無しにしてしまはないまでも、その情熱を冷まして、すつかり骨抜きにしてしまふには十分な目にあひながらも、チチコフの身内に燃えてゐる不思議な情熱の火は決して消えなかつた。彼は悲しみもした、怒りもした。全世界に對して不平不満も漏らした。運命の不公平に立腹もすれば、人間の不公平

に憤慨もした。しかも尙、新らしい畫策を棄てることが出来なかつたのだ。一言にしていへば、彼は極度の忍耐を示したのである。それに較べては、あの獨逸人のしぶとい我慢づよさなどは物の數ではなかつた。獨逸人の我慢づよいのは、ただ血の環りが遅々としてのろくさいことに起因してゐる。それに反してチチコフの方は、血の環りがよすぎて、それが奔放自在に跳ねあがり飛びまはらうとするのを、適當に制御してゆくには、思慮に富んだ意志の力がかなり必要であつたのである。彼はとつおいつ考へた。その考へにも成程もつともな點がない譯でもなかつた。(おれはどうしてこんなことになつたのだ？ どうしておれにばかり災難が降りかかつて來たのだ？ 今どき誰が後生大事に役目のことばかり考へてゐる奴があらう？——どいつもこいつもみんな自分の懐ろばかりこやしてゐるぢやないか。おれは誰ひとり他人を不幸にした覚えがない。寡婦のものをつんだこともなければ、人を破産させたこともない。おれはただ有り餘つた上のお剩りを頂戴しただけのことだ。みんなが取るやうな場合に限つて取つたまでのことだ。おれが着服しなければ、きつと他の奴が着服したにきまつてゐるのだ。他の奴らが富み榮えてゐるのに、どうしておればかり蛆蟲のやうに滅びなければならぬのだ？ いつたい今のおれのさまはなんだ？ この有様で何の役に立つといふのだ？ どの面さげて、ちやんとした一家の父に顔が合はされよう？ 今のおれはただこの世の場ふさげに過ぎないといつて、どうして良心の苛責を感じないでゐられよう？ 後になつて、おれの子供たちは何といふだらう？ 屹度、「見よ、うちの親父は大畜生も同然で、財産らしいもの一つ残して行かなかつたぢやないか？」と言ふにきまつてゐる。)



チチコフが自分の子孫のことをひどく心に懸けてゐたことは、すでに周知の事實である。これはまつたく感慨無量な対象である！ 誰にしてもこの、「子供たちが何といふだらう？」といふ疑問が、どういふ譯とも知れず、ひよいと頭に浮かんで来るやうなことさへなかつたならば、まさか、かうまで淺ましい眞似はしないだらう。で、今やこの未來の遠つ祖は、恰かも用心深い猫が、どこから主人が見てをりはせぬかと、片方の眼であたりに注意をはらひながら、石鹼でござれ、蠟燭でござれ、獸脂でござれ、金糸鳥でござれ、手近にさへあれば、何でも大急ぎで搔つばらつてゆくやうに——つまり、何一つ見逃さうとはしなかつたのである。我等の主人公は、このやうに不平をいつたり、涙を流したりはしたけれど、そのあひだも、彼の頭腦は決して活動をやめることなく、捲土重來の意氣に燃えながら、ひたすら計畫の熟するのを待ち侘びてゐた。そこで彼は、又しても小さくなつて苦しい生活に堪へ、あらゆる慾望をおさへて、身綺麗でお上品な地位から、再び卑しい下等社會の泥沼に身をおとしたのである。そのうちには良い芽が出るだらうと思ひながら、彼は甘んじて代辦人の職に就いた。これはまだ我が國では、まともな人間扱ひも受けてゐない職業で、どこへ行つても爪弾きをされ、下つ端役人は愚か、當の依頼人からまで馬鹿にされて、いつもベコベコと玄關側に匍ひつくばつて、人にこき使はれるものと相場がきまつてゐた。が、窮乏の前には背に腹はかへられなかつたのである。依頼を受けたいろんな事件の中に一つかういふのがあつた。それは數百人の農奴を抵當に、貴族保護局から金を借りる手續をしてくれといふ依頼であつた。その依頼者の財政は素亂の極に達してゐた。家畜が瘟疫で全滅したり、管理人が大の山師だつたり、兇作がつづいたり、疫病が流行して饑

良な百姓がバタバタと死んで行つたり、就中、當の地主が無分別で、莫斯科の別邸をば最新の流行様式に飾りたて、その調度に有金を一文のこらすかけてしまつたりしたため、果てはもう日々の糧にも事を缺くといふ事態に立ちいたつたのである。それが爲に、たうとう、最後に残つた農奴まで抵當に入れなければならぬ羽目になつたのである。ところが、そんなものを抵當に、國庫から金を借り出すなどといふことは、その頃はまだ珍らしいことであつただけに、借りる方でも聊かおつかなびつくりの爲體であつた。で、チチコフは代辦人として、先づ豫めその筋の役人を巧く手懐けた。(周知のやうに前もつて役人を手懐けておかないことには、ちよつとした問合せや照會だつて、なかなか受附けてくれるものではない。たとへマデーラの本づつでも、みんなにふるまつてからでなければ駄目である。——そこで彼は、役人連を然るべく手懐けておいて、さて徐ろに、實は抵當に入れる農奴の半數はすでに死んでゐますが、と事情を打ち明けて、後で何か面倒なことが起ころはしないでせうかと、恐る恐る伺ひを立てた。：。「しかし、人口調査簿には載つてゐるんだらう？」と、書記が言つた。「それあ載つてゐますよ」と、チチコフは答へた。「ふん、それなら何もびくびくすることはないさ！」と、書記が言つた。「一人死ねば、一人うまれる、それで結局いけいけだ。」このやうに書記は、うまく語呂を合はせるやうに言つたものだ。が、同時に我等の主人公の頭に、人間がこれまで思ひついたこともないやうな、素晴らしい天來の思想が閃めいたのである。(ちえつ、俺はなんといふ頓馬だ！)と彼は肚の中で呟やいた。(一生懸命さがしてゐた手套が、ちゃんと帯にはさんであつたといふ譯ぢやないか！ さうだ、かういふ死んだ農奴でまた農奴名簿から削つてない奴を、おれが買ひ占めて、



假に千人も手に入れてみる、そいつを貴族保護局へ抵當に入れたら、一人あたり二百留は貸してくれる、さうすれば二十萬留といふ大金にありつけようつてもものだ！それに、今は絶好の時機だ——つい先頃、傳染病がはやつて、有難いことに、だいぶ百姓が死んでゐる。地主どもは地主どもで、骨牌に負けたり、放蕩に耽つたりで、いい加減左前になり、どいつもこいつも勤め口でもないかと、のこのこ彼得堡へ出かけて、領地などは放つたらかしで管理は出鱈目ときてゐるから、租税を納めるのも年々苦しくなるばかりだ。してみれば、誰だつて、人頭税を拂ひたくないだけにでも、そんなものは二つ返辭で譲つてくれるだらう。旨くゆけば、これでまた一儲け出来るかもしれないぞ。尤も、なかなか難かしい藝當で、いろいろと面倒でもあらうし、その上、こんなことから萬一へんな評判でも立つては、それこそお仕舞ひだ。だが、それならそれで人間は天から智慧才覺を授けられてゐるのだ。ところで、何より都合のいいことは、これが他人にはちよつと思ひもよらぬ代物で、誰ひとり眞面目にとる奴のないことだ。尤も、土地がなくては農奴を買ふことも、抵當に入れることも出来ない譯だ。それならおれは、移民の目的で農奴を買ふことにするんだ、移民といふ名目で。今でもクルミヤ地方かヘルソン縣あたりから、農奴を移住させるとさへ言へば、土地はいくらでも無償で拂ひ下げてくれる。そこへみんな移住させるんだ！ヘルソン縣へ！一件の農奴たちはそこに住まはせておく譯さ！そして移民の手続きは、ちやんと正式に、合法的に踏むことが出来るのだ。もし、本當に百姓たちがゐるかどうかを検査すると言ひだしたつて、なあに、それも一向かまはないさ、どうしてそれを拒むもんか！おれは、警察署長が自分の手でちやんと署名した證明書だつて見せてやるさ。

村の名はチチコフ村とでもするかな、それとも、おれの洗禮名をとつて、パウロフスコエ村とでもしておくか。こんな風にして我等の主人公の頭に、あの奇怪な計畫が組み立てられたのである。それに對して、讀者が彼に感謝の念を抱かれるかどうか、それは與り知るところでないが、作者自身は、とても筆紙に盡されないくらゐ、それを有難く思つてゐるのである。それはなんと言つても、もしチチコフの頭にかういふ考へが浮かばなかつたなら、決してこの敘事詩も世に出る運命を擔はなかつたからである。

露西亞人の流儀で胸に十字を切つて、彼はいよいよ實行に取りかかつた。そこで先づ、永住地を捜してゐるやうに見せかけたり、その他いろんな口實をかまへて、彼は我が帝國の所々方々を視察してまはることにした。殊に凶作とか、悪疫とか、その他さまざまな災厄を蒙つて、他よりも一層疲弊してゐるやうな地方、つまり、死んだ農奴をなるべく容易に、なるべく安く買ひ取ることの出来さうな地方ばかり捜しまはつたのである。彼はどんな地主にでも、行き當りはつたりに話を持ちかけるといふやうなことはしないで、なるべく自分の嗜好に適した人物、つまり、かういふ取引を、何の故障もなく、すらすらと運ぶことの出来さうな相手を選んで、先づ近づきになると、出来るだけうまく取り入つて、死んだ農奴などは、商取引といふよりは寧ろ好意づくで、ただでも譲つてくれるやうに持ちかけたものである。だから讀者は、これまでに登場した人物がどうも自分の趣味に合はないからといつて、作者をどうか責めないで戴きたい。それはチチコフのせゐなんです。ここでは飽くまでチチコフが主人公だから、彼が行かうと言へば、どこへでも隨いて行くより他はないのである。また、登場人



物の外観に生氣がないとか、性格がみすぼらしいからといふ非難に對しては、作者としてはただ、廣大な事件の全貌なり發展なりが、さう初めから、すつかり分るものではないとお答へするより他はない。どんな大都會へ乗りこんで行つても、それがたとへ一國の首府であつても、最初は必らず何となく殺風景なものである。初めのうちは何もかも平凡で、單調なものだ。まづ、煤煙によつた工場が涯しもなくつづいて、それからやうやく六階建の家の角が見えだし、商店や看板が見えだして、やがて都會らしい輝やきと、喧喧囂々たるどよめきと、いみじくも人間の頭と手とで作り出されたありとあらゆる物象につつまれた、鐘樓や、柱廊や、銅像や、塔だらけの、壯大な街路の展望がひらけるのである。チチコフの最初の農奴買入れがどんな具合に行はれたかは、すでに讀者諸子の御覽になつたとほりであるが、さてこれから先き問題がどう發展して、我等の主人公が如何なる成功や失敗を繰り返すか、更に困難な障害にぶつかつて、彼がどうしてそれを解決し、克服して行くか、又どんなに偉大な人物が次々に登上して、秘められたこの龐大な物語の樞軸がどう廻轉して、そのスケールがどんなに廣く展開して、全篇が莊嚴な抒情的發展を見せるか——それはやがて追々に分つて戴けることと思ふ。この中年の紳士と、獨身者がよく乗りまはす半蓋馬車フリイカと、從僕のベトールシカと、馭者のセリファンと、それから既に讀者諸子が名前まで御存じの、『議員』から、あの狡い連錢茸毛に至るまでの三頭の馬とから成る旅行者の一團の前には、まだまだ、長い道中が横たはつてゐる。さて、これが我等の主人公のありのままの姿である！ しかし、詮するところ倫理的資質に於いて彼が如何なる人物であるか？ それを一口に断定しろといふ聲がかかるかも知れない。彼が十全の徳を具へた聖人

でも君子でもないことは、すでに明白である。では、いつたい何者なのか？ 厚顔無恥な破廉恥漢だとでもいふのか？ それでは何が故に破廉恥漢なのだ？ 何が故にさうまで他人を苛烈に取扱はねばならないのだ？ 今日の我が國には、厚顔無恥といふほどの破廉恥漢は見當らない。みんな心懸けのいい、愉快な人々ばかりだ、満座の中で頰桁をひつばたかれるやうな公然の屈辱にも、恬として恥ぢないほどの人間は、搜し出してもせいせい二三人ぐらゐしかゐない。しかもさういふ連中までが、今では、どうのからの徳操を論じあつてゐる始末である。我等の主人公は『敏腕家』の『取込み家』とでもいつておけば、まあ穩やかであらう。やたらに取込むこと——これがすべての悪因となり、そこからして、世間で餘りかんばしく言はないやうなことも仕でかされるのである。成程かういつた性格には、どこか人を反撥するやうなところがあるから、日常生活ではさういふ人物とも水魚の交はりを結び、結構面白をかくし時を過ごしてゐるやうな讀者でも、一旦それが劇や詩の主人公となつて登場すると、忽ち白眼を向けるのである。だが、どんな性格をも輕蔑することなく、じつとそれに觀察眼をそそいで、裏の裏までそれを吟味検討することの出来る人は賢明である。人間の内心は實に變幻常なきもので、ちよつとつかりしてゐると、いつの間にかもう怖ろしい蛆蟲がわいて、そいつが忽ち人間の生命の液汁を遠慮會釋なく吸ひ取つてしまふ。また屢々、大きな情慾ばかりか、何かつまらないものに對するけちな慾望までが、立派な功績を立てるために生まれた人間の内心に根を伸ばして、神聖な、偉大なる義務を忘却させ、つまらないがらくたを神聖な偉大なるものと思ひこませ勝ちである。濱の眞砂のやうに數限りない人慾は、皆それぞれ趣きを異にしてをり、その高きと卑しきに拘ら



ず、どれも初めの中こそ人の心に従順であるが、やがてそれが人間に對して怖ろしい暴君となるのである。あらゆる情熱の中から、最も優れた情熱を自分のために選び出した人は幸ひである。限りなき彼の幸福は時々刻々に倍加して、彼はいよいよ深く、その涯なき樂園に入り浸ることが出来るのである。しかし、人間の心にまかせぬ情熱といふものもある。それは人がこの世に生まれる刹那、彼と共に生まれて来たもので、人間には到底それを振り捨てるだけの力がないのだ。それは最高の指揮者によつて操られるもので、その中には、生くる日の限り、絶えず人間に呼びかけて、決して聲をひそめることのない何ものかがある。かうした様々な人慾は、地上に於いて偉大なる役目を果すべき運命を擔つてゐる。それが暗澹たる形をもつて現はれようと、或はこの世を喜ばすやうな明るい現象となつて現はれようと、それはどちらでも同じことで、いづれも等しく人間には推し量ることの出来ない幸福のために呼び出されるのである。従つて、チチコフの内心に集くうて彼を曳きすりまはしてゐる慾望も、恐らく彼の與り知らぬところのもので、彼の冷酷な存在の中にも、やがては人間を天の睿智の前に降まづかせ、三拜九拜せしめるやうな何ものかが潜んでゐるのかも知れない。それではどうしてこのやうな人物が、いま江湖にまみえんとする物語の中へ拉し來られたかといふ理由も、まだ暫らくは秘密である。だが、かういふ人物に御不満でさへあれば、別に氣に懸けることはないけれど、どうも、かういふチチコフのやうな人物がとかく讀者に好かれるといふ確たる信念が胸にあればこそ心苦しいのである。作者がもし、主人公の魂に深く立ち入りませず、彼が人の眼を晦まして世間に隠してゐるものを魂の底から曳きすり出しませず、人間が誰にも打明けられない秘密の思想を發き立てもしな

いで、チチコフをあの市の連中なり、マニローフその他の手合ひなりの眼に映つたと同じやうな姿に描いたならば、きつと誰にも氣に入つて、面白い人物だと持て囃されるかもしれない。彼の顔や、その全貌が、いつか眼の前に生々として浮かびあがつて來なくても構はない。その代り、それを讀み終つても、讀者の魂は何の感動も受けず、すぐに又、あの全露西亞の慰みとなつてゐる骨牌卓子に向ふ氣にもなれるといふものだ。さうだ、我が善良なる讀者諸子は、赤裸々な人間の淺ましきなど、餘り見たくも思はれないだらう。「どうして？ 何のために、そんなことをしなければならぬのだ？」と、諸君は言はれるだらう。「我々はこの實社會に、唾棄すべき愚劣極まるものざらにあること位は、ちやんと心得てゐるぢやないか？ 何もわざわざ見せつけられなくても、そんな糞面白くもないことなら、我々はいやといふほど目撃してゐるのだ。それよりも、何かもつと美しい、心のときめくやうなものでも見せて貰ひたいねえ。我々は寧ろ自分といふものを忘れさせて欲しいんだから！」同じやうに、「おい、貴様は何だつてうちの財政状態がよくないなんてことを、一々おれに聞かせるんだい？」と、地主は管理人にむかつて言ふだらう！「そんなことは、わざわざお前に聞かなくつても、おれはちやんと知つてゐるよ。それより、何かもつと他の話が出来ないものかね、ああ？ そんなことは聞きたくもない、どうかそれは忘れさせてくれ——その方が結局おれは、仕合はせなんだから。」そして、何とか更生の役にも立つ筈の金が、いろんな憂晴らしの爲に浪費されてしまふのである。で、若しかすれば素晴らしい方策を生み出す、思ひがけない源泉となつたかもしれない智慧才覚が、徒らに惰眠を食つてゐるあひだに、一方では所領が見す見す競賣に附せられてしまふ——そこで



地主は窮迫のあまり、前にはあんなに怖ぢ恐れてゐた淺ましい境涯をいとはず、身を捨てて乞食の群れへと墮ちて行くのである。

なほ、謂ゆる愛國者の側から作者に非難が浴びせられることと思ふ。この愛國者たちは、ふだんは静かにめいめいの家に引きこもつて、まるで愛國とは関係のない仕事に携はり、他人の懐ろで自分の運命を振りひらきながら、せつせと金をためてござるが、一朝、彼等の考へで何か國辱になると思はれるやうな事態が出来し、痛烈に眞實を發きたてるやうな書物でも現はれると——得たり賢しと、まるで自分の巢に蠅がかかつたのを見つけた蜘蛛のやうに、四方八方から飛び出して来て、いきなり喚きたてる。「こんなことを世間へ發表してもいいのか？こんなことをあからさまに書きたててもいいのか？ここに書いてあるのは、みんな我が國のことぢやないか？こんなことをしても構はないといふのか？これを見て外國人が何といふだらう？自分のことを悪様にいはれるのを聞いて氣持がいいとでもいふのか？」彼等はきつと、我々が痛痒を感じないと思ふだらう」と。第一我々にはかういふ賢明なお咎めに對し、殊に外國人の思惑についての御懸念に對しては、正直なところ、何とも辯明のしやうがないのである。ただ一つ、かういふ寓話をもつて答へに代へておかう、露西亞のさる片田舎に、二人の男が住んでゐた。一人は疑乎とした一家の父で、その名をキーファ・モーキエギツチといつて、ごく柔和な性質で、一生をのんびんたらしと暮らしてしまつた男である。家庭のことには一切かまはず、彼は常日頃心を専ら思索的な方面へ傾注して、自から哲學と稱してゐる、次ぎのやうな問題に、いつも没頭してゐた。「例へば獸類だが」と、彼は部屋の中をブラブラ歩きまはりながら、

「ややくのだつた。「獸類といふ奴はみんな赤裸かで生まれてくる。一體どういふ譯で赤裸かなんだらう？ どうして鳥類のやうに卵から孵化しないのだらう？ まつたく、どうも、その……自然つてやつは、深く考へれば考へるほど、さつぱり分らなくなつてしまふ！」こんな風に、キーファ・モーキエギツチは思索に耽つてゐたのである。しかし、これは別に重要なことではない。もう一人の男は、血をわけた彼の息子で、モーキイ・キーフォギツチといつた。これは、露西亞で一般に猛者と呼ばれてゐる類ひの若者で、父親が獸類の生まれ方について夢中になつてゐる間に、彼の筋骨逞ましい二十歳の肉體は、盛んに羽翼を伸ばしてゐたのである。ちよつとでもこの男の手にかかつたが最後必らず、誰かが腕を折られるとか、鼻の頭に瘤を作られるとか、決してただでは済まされなかつた。家の中でも近所隣りでも、下女下男から飼犬の末にいたるまで、彼の姿を一目見るなり、みんな急いで逃げ出してしまつた。彼は自分の寢室にある寢臺まで、減茶々々に敲きこはしてしまつたほどである。モーキイ・キーフォギツチはそんな風な男ではあつたが、根は案外善良であつた。しかし、これもさして重要なことではない。「あの、旦那様、キーファ・モーキエギツチ様！」と、うちの召使ばかりか、よその下女下男までが、父親に訴へたものである。「若旦那のモーキイ・キーフォギツチは何てぢや方でございますか！ 若旦那のお蔭で、誰ひとり生きた心地もない有様ですがすよ。ほんとに亂暴な方つたらありませんから！」——「うん、どうもあいつは腕白でな」から、父親はいつもそれに答へたものである。「だが、どうも仕様がないうよ。今更あいつを折檻するといふ譯にもいかなからなあ。それなのに、亂暴で困る亂暴で困るといつて、わしばかりみんなが責めをのぢや。だが、あいつは見



榮坊でな、誰か他人のゐるところで叱れば屹度おとなしくなるのぢやが、それでは世間に聞こえるから、どうも困りものぢやて！ そんな事が町中へ知れようものなら、あれのことを手のつけられん悪たれぢやといつて罵るぢやろからなあ。まつたく、そんな風に思はれては、わしも辛からうぢやないか？ わしだとして父親ぢやないか？ わしが哲學に身を入れたり、あれやこれやで暇がないからといつて、それでわしが父親ぢやないか？ いんにや、どうしてどうして、わしぢやとて父親ぢやよ！ 誰がなんと吐かさうが、わしは父親ぢや！ モーキイ・キーフォギツチは、わしのこの胸の中にちやんと住まつてをるのぢや！ さう言ふとキーファ・モーキエギツチは、拳骨を固めてドンと一つ自分の胸を叩いて、すつかり彼は昂奮して了ふのであつた。「たとへあれが手のつけられん悪たれであるにもせよ、それをわしから世間へ漏らすやうなことは出来んのぢや、わしはあれを突つばなすやうな眞似は出来んのぢや！」彼はこのやうな父性愛を披瀝して、俾のモーキイ・キーフォギツチには相も變らず猛者ぶりを發揮させておいて、自分はまた例のお氣に入りの題目にかへつて、ファイとこんなやうな問題に頭をひねるのであつた。「さあて、象がもし卵で生まれるとしたら、その卵の殻はよつぽと分厚に出来てゐることぢやらうな。大砲でだつて打ちぬくことは出来まいて。さうすると、何かもつと新しい飛道具でも考へ出さにならまいなあ。」こんな風に、平和な片田舎に生まれた二人の住人は生涯を送つたのである。が、彼等がこの巻もそろそろ終りに近づいた頃、さうで小窓からでも覗くやうに、ひよつこりと不意に鼓へ顔を覗けた譯は、そんなじよそこの短氣な愛國者たちから受ける非難に、やんはり一矢を酬いんがために他ならない。尤もその愛國者たちも、今の

ところ、おとなしく何か哲學みたいなものに憂身をやつしたり、彼等が熱愛する祖國の富をちよるまかして私腹をこやしなから、自分たちが不正をはたらいてゐることは棚にあげて、ひたすら世間から不正をばたらいてゐるやうには言はれまいと、是努めてゐるのである。しかしながら、その非難の眞の理由は、愛國心からでもなければ、前例の父性愛からでもなく、もつと別なものがその下に匿れてゐるのである。別に言葉にござす必要はない！ 作家をおいて、誰が聖なる眞理を語る義務を負つてゐよう？ 諸君は物事を深く洞察する眼を怖れ、自分でも深刻にもものを観察することを躊躇して、何事も漫然と表面だけを眺めて喜んでゐられるのだ。諸君は肚の底からチチコフを笑はれさへするだらう。若しかすると、作者を褒めて、「だが、この男はなかなか味をやるぜ！ きつと面白い男に違ひないぞ！」などと言はれるかもしれない。そんなことを言つた後では、いよいよ自信たつぶりになつて、得意満面を笑みをたたへながら、「それあ、なるほど地方によつては、實に變挺な、滑稽きはまる人間もあるもので、それに、破廉恥漢だつてさらにあらうさ！」と、附け加へて言はれるだらう。だが、諸君のうち誰か、基督教徒らしい謙讓の念に充たされて、人前ではなく、一人しづかに胸に手をあてて自問自答するやうな時、「だが、おれの中にも、どこかにチチコフの片鱗がありはしないだらうか？」といふ、苦い疑問を起こして、それを心に深く刻みつけるやうな人はないだらうか？ と、ところが、そんな人はありつこないのだ！ たまたま、その人の知合ひで、大して位が高くもなければ低くもない男が傍らでも、通りすぎると、彼はすぐさま連れの皮を突つついて、抱腹絶倒せんばかりに吹きだしながら、「ほら、見給へ、あれはチチコフだよ、チチコフがあすこへやつて行くよ！」と言ふぐ



らゐが關の山だらう。その上、身分や年齢に適はしい節度も忘れて、まるで子供のやうに、その跡を追つて駈け出しながら、後ろから、からかふやうに、「やあ、チチコフだ！ チチコフだ！」と囁きたてることだらう。

だが我々は、自分の經歷が語られてゐる間ぢゆう寢こんでゐたチチコフが、疾づくに眼を覺まして、自分の名前がやたらに繰り返されるのを、若しかするともう耳にとめてゐるかも知れないことも忘れて、うつかり大きな聲で喋り立ててゐた。彼は短氣な男で、自分のことを少しでもぞんざいに言はれると、すぐ腹を立てるので。チチコフが腹を立てようと立てまいと、讀者にはいつかう痛くも痒くもなからうけれど、作者としては、どんなことがあつても、自分の主人公と喧嘩をしてはならないのだ。まだまだこれから先き長いこと、二人は互ひに手に手を取りあつて旅をしなければならぬから。後續の尾大な二篇——こいつが生やさしいものではないのだ。

「おい、こら？ どうしたんだ、貴様は？」と、チチコフはセリファンに向つて言つた。「ああん？…」

「なんだがすかね？」とセリファンが、間伸びのした聲で言つた。

「なんだがすかもないんだ！ この獄道めが！ なんちふ走らせ方をしてゐるんだ？ さあ、もつとビシビシ鞭をくれるつ！」

それもその筈で、セリファンはもうかなり前から、うつらうつらと半眼をとちながら、これもまた半ば居眠りをしながら足を運んでゐる馬どもの側腹へ、夢うつつで時たま手綱をしやくるやうにする

だけで、のろのろと馬車を走らせてゐたのである。ベトウルシカは又ベトウルシカで、いつの間にかやら帽子も何處かでおつ落してしまひ、後ろへふんぞり返つたまま、頭をチチコフの膝のあひだへ割りこませて来た。だからチチコフは、その横つ面をひつ殴いてくれなければならなかつた。セリファンは、やうやく正氣に返ると、例の連錢葦毛の背中に、ビシビシと三つ四つ鞭をくれた。するとそいつは急に跑足で駈け出した。それでみんなの馬の上で鞭を振りまはしながら、甲高い歌ふやうな聲で、「びくつくこたあねえぞう！」と喚いた。馬どもは元氣づいて半蓋馬車を軽々と曳きながら一散に駈け出した。セリファンはただもう鞭を振りまはして、「ハイよう！ ハイ！ ハイ！」と喚きつづけるばかりで、三頭馬車が、やや降り勾配に走つてゐる街道の、そここにやたらにある坂を、ガラガラと駈け上つたり、一氣に駈けおりたりするたんびに、馭者臺の上でゆらりゆらりと身を躍らせるのであつた。チチコフは革のクッションの上で軽く揺れ乍ら、ただニコニコと微笑つてゐた。彼も矢のやうに馬を飛ばせることが好きだつたからである。いつたい露西亞人に滅茶苦茶な疾驅の嫌ひな者があるだらうか？ 浮いた浮いたの放蕩が三度の飯よりも好きで、なんかといへば、「えい糞、どうにでもなれつ！」と不貞くされがちな露助の氣性に、どうしてそれが好かれずにあるものか？ 何かしら恍惚する様な不思議な魅力がひそんでゐるのに、どうしてそれを好かずにをられよう？ 恰かも眼に見えぬ力の翼にでも乗せられたやうに、自分も走れば、森羅萬象も走る——里程標が走れば、輓馬車の馭者臺に乗つた行きずりの商人も飛びすぎて行く。樅や松の鬱葱と茂つた兩側の森が、斧の音や鴉の鳴聲とともに飛びすぎて行けば、どこまで續くとも涯しれぬ街道も、後へ後へと飛んで行



く。殆んど應接に暇もなく、森羅萬象が次々と飛び去つて、じつとして動かないものといへば、ただ頭の上の空と、ふんはり浮かんだ雲と、雲間から覗く月の他にはないやうな、この目まぐるしい推移の中には、何か怖るべきものが潜んでゐる。お前、三頭馬車よ、鳥のやうな三頭馬車よ！ いったい誰がお前を發明したのだ！ 明らかにお前は、ひとり潑刺たる國民のあひだにのみ——この渺茫坦々として世界の半ばにまでまたがり、一々里程標など敷へてゐたら眼がかすんでしまひさうな、冗談半分なことが嫌ひな、國にのみ、生まれ出づる運命を擔つてゐたのに違ひない。しかもお前は、鐵の螺釘などを使つた複雑な交通機關ではなく、ヤロスラーウリの器用な百姓が、一挺の斧と鑿とでカンカンと手早く、間に合はせに作りあげただけに過ぎないのだ。馭者も、獨逸製の長靴などをはいた奴ではなく、蓬々と顎鬚をはやして、百姓手袋をはめただけで、なんとも譯の分らない物を尻に敷いてゐるが、そいつが腰を浮かして、鞭を振り振り、歌をうたひだすと——馬は疾風のやうに駆けだして、車の輻は消えて、まるで一枚の圓板のやうになつてしまふ、道がぐらぐらつと震動し、徒歩の人がおつ魂消て、アツと叫び聲をあげたかと思ふと——もう三頭馬車は矢のやうに、ずんずん先きへ駆け去つてしまふのだ！……。そら、もう遠くの方に、何か埃を立てて、空気を劈いてゆくものが見えるだけである。

ああ、露西亞よ、お前もあの、どうしても追いつくことの出来ない三頭馬車のやうに、ずんずん走つて行くのではないか？ お前の駆けて行く道からは煙のやうに埃がまひあがり、橋がとどろき、何もかもが後へ後へと取り残されてゆく！ まのあたりに、この不思議な神業を目撃した人は、これは

天から閃めいた稲妻ではないかと、茫然として立ち竦んでしまふ。この恐怖をもたらすやうな活動は、いつたい何を意味してゐるのか？ この、まだ世に知られぬ馬たちには、どんな不思議な力が宿つてゐるのか？ お前、馬よ、馬よ、——なんといふ素晴らしい馬たちだ！ お前たちの鬣には、嵐が宿つてゐるのか？ お前たちの全身は敏感に聴耳をたててゐるのか？ 天上からの懐かしい歌聲を聞きつけると、お前たちはさつと一齊に銅の胸を張つて、殆んど蹄も地に觸れないで、空気を切つて飛ぶ一本の直線と化し、神意を體して轟進する！……露西亞よ、お前は一體どこへ飛んで行くのか？ 聴かせてくれ。だが答へはない。リンリンといふ妙なる鈴の音が鳴りわたり、きれぎれに千切れた空気が轟々とはためいて風になる。露西亞は地上のありとあらゆるものを追ひ越して飛んで行く。横目でそれを眺めながら、諸々の他の國民と國家とは傍らへ寄つて彼女に道を譲るのである。



## 第二部

### 第一章

どうして、かう我が國の山間僻地から、いろんな有象無象をほじくり出して来て、我々の生活の身窄らしさや缺點ばかり書きたてるのだらう？　だが、これが抑々作者の持前で、自分自身の缺點に毒されて、我が國の山間僻地から有象無象をほじくり出して、我々の生活の身窄らしさや缺點ばかり書きたてるより他に能がないとしたら、どうも仕様がなではないか？　そこでまたしても我々は、この山間僻地へつれて來られてしまつたのである。が、その代り、何といふ山間何といふ僻地だらう！　まるで角樓や銃眼をもつた際限もない要塞の大壘壁でも見るやうに、丘陵が蜿蜒として千露里以上もつづいてゐる。これらの丘陵は、或る雨水に溝や穴を穿たれて縞の出來てゐる、絶壁のやうな擬石灰粘土質の斷崖となつたり、或は、木の切株から芽をふいた若いヒコバネ薬に蔽はれて、まるで小羊皮をかぶつたやうな、うつくしい圓味をおびた緑の隆起となつたり、さては、どうかした奇蹟で斧の刃をま



ぬがれた、鬱蒼たる森の茂みをなして、涯しなき平原の上に雄大な姿を浮かべてゐる。河は、時には兩岸の地形のまにまに、曲つたりくねつたりしてゐるが、時には氣儘に遠く牧場の中へと外れて、そこでうねうねと幾つも曲つて、太陽の反射でパツと火のやうに輝くかと思ふと、白樺や白楊や赤楊の茂みの中へ隠れたり、そこからまた、曲り目ごとに待伏せてゐる橋や水車や堰などと共に意氣揚々として姿を現はしたりする。

或る一箇所、丘陵の峻しい側面が一際こんもりと樹々の緑の捲毛に蔽はれてゐた。山肌の起伏の不同に従つて人工的にそれぞれ植樹されてゐるお蔭で、南北兩方面の植物が期せずして一堂に會した觀があつた。檜、樺、山梨、楓、犬櫻、茨、さては蛇麻草の蔓にからまれた針槐だのななかまど等が、互ひに成育を助けあつたり阻みあつたりしながら、丘陵の麓から頂きまで一面に匍ひのぼつてゐた。その上方の、黒々とした茂みの天邊あたりで、地主館の赤い屋根や、その後ろに隠れてゐる百姓小家の棟や鬼板や、地主館の上に設けられた、透し彫の露臺と大きな半圓形の窓のついた高樓などが、樹々の緑の梢といりまじつてゐた。かうして樹々や屋根の集まつてゐる上へひとときは高く、村の古風な教會がキラキラと光る金鍍金の五つの圓頂閣を持ちあげてゐた。各々その圓頂閣の頂きには透し彫を施した金色の十字架が、やはり透し彫を施した金色の鎖に支へられて立つてゐたが、遠目には、まるで紫磨黄金の光りを放つ金塊が、何の支へもなしに空中に浮かんでゐるやうに見えた。さうしたすべてのものが皆さかさまに、梢や屋根や十字架を下にして、いみじくも河の中へ映つてをり、そこではまた、不恰好な空ろの柳が、或るものは岸邊に、或るものは水中に立つて、だらりと水につ

けた枝や葉に、黄いろい睡蓮と共に、水面を浮遊する、ぬらぬらした藻をからませながら、宛かこ

の素晴らしい影像に見入つてゐるやうであつた。  
その眺めも非常によかつたが、上から下へ、邸の高樓から遠くを見晴らした眺めは更によかつた。どんな客にしろ訪問者にしろ、平氣でその露臺に立ちつくすことは出来なかつた。驚嘆のあまり息までつめて、「おや、これはまあ、何といふ見晴らしだらう！」と、ひたすら感嘆の聲を漏らしたものである。廣袤は涯しなくひろがつてゐた。林や水車場の散在する牧場の向ふには、幾筋かの緑の縞をなして森林が青ずんでをり、森林の向ふには、もう霧のかかり初めた空間をとほして砂地が黄ばんで見え、その先きにまた森林が連なつてゐるが、それはもう、まるで海か、すつと遠くたちこめた霞のやうに青ずんでゐる。それからまた砂地がつづいて、一段とほやけてはゐるが、それでもまだ黄いろく見えてゐる。はるか地平線の上には白堊のやうな山々が波状をなして連なり、曇り日ですら、さながら久遠の陽光に照り映えてゐるやうに、白々と輝いてゐた。その目映いばかりに白々とした山の、ところどころ石膏質を帯びた麓には、烟つたやうな暗藍色の斑點が明滅してゐる。それは遠方の村落であるが、もはや肉眼ではそれと見わけるとも出来ない。ただ寺の金色の擬寶珠屋根が太陽の光りにキラキラと閃めくのを見て、それが住民の多い大きな村だといふことが分つた。すべてが森閑たる静寂につつまれて、微かに聞こえたかと思ふとすぐに空中へ吸ひこまれてしまふあの雲雀の啼鳴すら、この静寂を掻き亂すことはない。要するに、露臺に立つた客は、ものの二時間もその眺めに見惚れた後で、「ああ、これは何といふ素敵な見晴らしだらう！」といふより他には、言葉も出ないのである。



さて、この村に住んでゐる領主といふのは誰だらう？ 第一この村へ乗りこむのに、こちらからは、まるで難攻不落の要塞へでも突貫するやうで、とても出来ない相談だから、反対側から乗りこんで行かねばならないが、そちら側から行けば、まばらにある柵の木が、距てなく抱擁でもするやうに、繁つた枝をひろげて懇ろに客を迎へながら邸の正面へと導いて行く。これが先刻後ろから頂きを見せた、くだんの地主館で、今やそれが、一方には屋の棟や、透し彫をした破風をあらはに見せた一連の百姓家を控へ、他方には金色の十字架と、空中にかかつた鎮の、金色の透し彫の飾りを輝かしてゐる寺院を控へて、すつかりまる見えになるのである。さて、この桃源境の持主とは、そも如何なる果報者であらうか？

トウレマラハンスキイ郡の地主で、名前はアンドレイ・イワーノギッチ・テンチエートニコフといひ、三十三歳の、しかもまだ獨身の幸福な若者である。

そもそも彼は何者で、どんな性質の、どんな持前の人間であるか？ 婦人の讀者方は、須らく隣人に訊き糺されるがよろしい。近頃ではもう、すつかり跡を絶つてしまつた、あの素敏つこくて喧嘩つばやい、退役の佐官あたりである隣人の一人は、彼のことを、「あいつは正真正銘の畜生さ！」と言つてのけた。十露里ほど離れた處に住んでゐる將軍は、「あれはなかなか賢い若者だが、どうも頭へ知識をつめこみすぎとる。わしが一肌ぬいでやつてもいいのぢやが、なにしろ彼得堡にはいろんな手藝があるし、その上……」といつて、あとは言葉を濁してしまつた。郡の警察署長は返答を外らして、「あ、さうだ、明日あの男のところへ滞納金を取り立てに行かなくつちやあ！」と言つた。彼の持村

○一人の百姓は、旦那はどんな人だと訊かれても、何の答へもしなかつた。して見ると、どうやら彼の評判は、あまり香ばしくないらしい。

公平にいつて、彼は決して悪い人間ではなく、ただのらくらしてゐるだけであつた。世間にはからいふのらくらしてゐる人間がざらにあるのだから、テンチエートニコフがのらくらしてゐるからとて、別に不都合はないではないか？ それは兎も角、ここへ彼の、他の連中の日常と一向かはらない日常生活の一頁を、行きあたりばつたりに掲げておくから、それからして彼の性格がどんなもので、また彼の生活が、彼を圍繞する美にどんなに一致してゐるかを、一つ讀者自身で判断して頂きたいものである。

彼は毎朝、大變おそく眼を覺ますと、半身を起こしたまま、長いこと眼をこすりながら寢臺の上に坐つてゐた。不幸にして彼の眼は小さかつたので、こするのにも並々ならぬ長時間を要した譯である、その間ぢゆう下男のミハイロは、洗面器とタオルを捧げて、扉口に待つてゐた。この可哀さうな下男のミハイロが一時間も二時間も待ちくたびれた擧句、ちよつと臺所へ行つて、また引つ返して來ても、旦那は矢張りまだ眼をこすりながら寢臺の上に坐つてゐるのだ。やつとのことで寢床から起きあがると、彼は顔を洗つて、部屋着をひっかけ、お茶と、珈琲と、ココア、まだおまけに搾りたての牛乳を飲むために客間へ出て行く。それを彼は、どれもこれも少しづつ啜りながら、矢鱈に麵麩屑をこぼしたり、ところ嫌はず無闇に煙管の灰を撒きちらす。かうして彼はお茶を飲むだけに二時間も坐つてゐた。しかもそれだけでは足りないで、冷めた茶碗を手に取ると、それを持つて内庭に面した窓



際へにじり寄る。と、その窓の下では、来る日も来る日も次ぎのやうな一幕が演じられてゐるのだ。

まづのつげに酒倉番のグリゴリーイが、家政婦のペルフィリーエヴナに向つて、「ちえつ、この煩せえ、碌でなしの女つちよ野郎め！ ちつとそのへらサ口でも慎んだらどうだい、いやな婆あめ！」といふやうな毒舌を浴びせかける。

「ふん、お前なんか、これでも喰らへだ！」と、その碌でなしのペルフィリーエヴナは、馬鹿握りを相手の鼻の先きへ突きつけながら喚き立てた——この女は、錠までおろして自分の手許にしまつてゐる乾葡萄だの求肥飴だのといつた、いろんな甘い物には目がなかつたけれど、することなすことが頗るがさつだつた。

「お前はあの執事にだつて絡まりやがるでねえか、ちえつ、納屋の牝鼠めが！」

「さうさ、執事の野郎もお前とおんなじやうな泥坊野郎だからな、お前たちのことを旦那様が御存じないと思つてるのかい！ 旦那様はそこにござらつしやつて、ちやあんと何もかも聞いてござらつしやるんだよ。」

「どこに旦那がござらつしやるんだい？」

「そら、窓のところに坐つて、何もかも見てござらつしやるでねえか。」

實際、主人は窓際に坐つて始終の様子を見てゐたのである。

この騒ぎに輪をかけて、母親に頭をひつ殿かれた下男の子供が火のついたやうにぎやあぎやあ泣きたてる、さうかと思ふとボルゾイの牝犬が、臺所からテラと顔を覗けた料理人に煮湯をぶつかけられ

て、尻を地面にこすりつけながら、きやんきやんと悲鳴をあげる始末で。一口にいへば何もかもが我慢のならないほどぎやあぎやあわんと喚きたててゐるのである。主人はそれを見ながら平氣で聞き流してゐた。が、いよいよそれが堪らなくなつて、何事にも手がつかなくなると、初めて人をやつて、騒ぐにしてももう少し靜かにしろと言はせた。

晝飯までの二時間は、大真面目で著述に没頭するため、自分の書齋へ閉ぢこもつた。その著述といふのは、社會的、政治的、宗教的、哲學的等、あらゆる見地から全露西亞を抱擁し、現代が我が國に課した困難な懸案と問題とを解決して、我が國の偉大なる將來を明瞭に規定せんとするものであつた。一言にしていへば、萬事、現代人が自から好んで己れに課す、あの方法と形式に従つてゐたのである。ところがこの龐大な計畫も、どちらかといへばただ腹案だけにとどまつてゐた。ペンばかり矢鱈に噛みくだかれて、紙の上にはいろんな樂書の繪が現はれるだけだ。やがてそれも傍らへ押しやつて、その代りに書物を取りあげると、もうそれを晝飯の時まで決して手放さない。スープやソースを啜つたり、焼肉や、時には饅頭さへばくつきながら本を眼からはなさないものだから、或る料理は冷めてしまひ、或る料理は手もつけずに下げられてしまふ。それについて、煙管を片手に珈琲を飲んだり、一人で將棋をさしたりする。それから夕飯までいつたい何をするのか——どうも、そいつは何とも申しあげかねる。が、どうやら、全然なにもしないやうである。

で、こんな具合に、廣い世間にただ獨りの三十三歳の若者は、部屋着にくるまつただけでネクタイ一つつけず、じつと坐つたまま、飽きもせず時を送つてゐた。彼は散歩もしなければ、出歩きもせ



中、二階へあがらうとも思はなければ、窓をあけて室内へ新鮮な空気を入れようともしなかつた。だから、この土地を訪ねた者が感嘆措く能はざる村の美しい景色も、肝腎の主人にとつては、まるで存在しないのも同然であつた。かういへば、てつきり讀者は、アンドレイ・イワーノビッチ・チンチェートニコフが、この露西亞には決して跡を絶たない、昔は怠け者とか、のらくら者とか、無精者とかいふ名前を頂戴してゐたが、今は何といふのか、實際わたしも知らない、あの一種の人間の部類に屬してゐることを悟られるだらう。かういふ性格は抑々生まれつきのものであるのか、それとも假借することなく人間を縛りつける痛ましい境遇の所産として、後天的に形づくられるものであらうか？ それに對する答へとしては、彼の少年時代の生立と學歴を物語るに若くはなからう。

すべての點から見ても、彼は熱れ有爲な人材になることを約束されてゐたやうであつた。利發で半ば瞑想的な性質の、どこか病弱らしい十二歳の少年として、彼はそのころ非常に秀れた人物を校長にいたたく學校へ入學した。青年の偶像であり、教師仲間の驚異的であつた。比類稀なるアレクサンドル・ベトロビッチは、人の本性を見抜く鋭い感覺を惠まれてゐた。どんなに彼が露西亞人の特質を知つてゐたことだらう！ どんなに彼が子供に理解を持つてゐたことだらう！ 又どんなによく子供を感奮させたことだらう！ 何か悪いことをしても、後で自から進んで彼の許へ白狀しに來ない悪戯つ兒は一人もなかつた。そればかりではない、嚴しい叱責を受けながらも、さうした悪戯つ兒は決してしよげもせず、昂然として校長室を退出するのである。その叱責の中には何かしら人を鼓舞するやうな、何かかう「前へ、前へ！ 願いたことなど氣にしないで早く立ちあがれ！」とでも言つてゐる

やうな聲が聞こえたものである。彼は生徒に向つて行儀をよくせよなどとは決して言はなかつた。彼はいつも、「私の要求するのは智能で、それ以外には何も要求しない。賢い人間になりたいと思ふ者は、悪戯などしてゐる暇がない。だから悪戯は自然に消滅せざるを得ない」と言つてゐた。果せるかな、悪戯は自然に跡を絶つたのである。賢くならうと努力しない生徒は、仲間から輕蔑された。年ばかり行きながら愚鈍で馬鹿な連中は、ずつと年下の者から無禮極まる綽名で呼ばれても、相手に指一本觸れることが出来なかつた。「それはあんまりですよ！」と多くの人が言つた。「それでは利口な子供が圖に乗つて、いよいよ横柄になりやしませんかね。」すると校長は、「いや、大丈夫です」と言つて、「私は出來の悪い生徒は長く引きとめて置けません。さういふ子供には普通科だけで澤山ですが、出來のよい生徒には高等科をやらせることにしてゐますからね。」成程さういへば、出來のよい生徒はみな高等科へ進んだものである。たいていの悪戯には精神的特質の開發の根源があると見て、彼は別にそれを阻止しなかつたばかりか、人の體内に隠れてゐる病源を確實に知るために發疹が醫者に大切であるやうに、自分には子供の悪戯が必要だとさへいつてゐた。

生徒といふ生徒がどんなに彼を慕つたことだらう？ 子供が自分の兩親に對する愛着も決してこれほどではあるまい。いや、前後の辨まへもなく夢中になりがちな、狂氣じみた青春の情火もまさかこれほど強くはあり得まい。死ぬが死ぬまで、ずつと晩年に至るまで恩義を忘れぬ教へ子たちは、もう遠の昔に故人となつたこの類ひ稀な教師の誕生日には、杯を擧げ、眼をつむつて恩師をしのんで涙がかきくれたものである。ほんの少しでも彼に激勵されると、もう凜々として勇氣が沸き、喜びに胸が



震へて、誰にだつて負けるものかといふ功名心が、鬱勃として沸いてくるのであつた。彼は出来のよくない生徒は長く引きとめておかなかつた。さういふ子供のためには短期の學級が設けられてゐた。それに反して、よく出来る生徒は二倍の課程を踏まなければならなかつた。さういふ選りぬきの生徒を收容する最終のクラスは、他の學校のそれとは全然趣きを異にしてゐた。このクラスに於いて彼は、他所では輕々に見過ごされてゐるところのものを専ら生徒に要求したのである。即ち、決して他人を嘲らす、どんな揶揄嘲弄にも耐へ、馬鹿は大目に見て、腹を立てたり、いきり立つたりせず、どんな場合にも仕返しをしようなどは考へないで冷靜水の如き心を毅然として常に保つことの出来る、最も高尚な智性の涵養を主眼としたのである。それで、一個の人間をよく強固な人物たらしめ得るやうな手段は、直ちにとつて實地に應用し、絶えず自からそれを生徒に試してみるのであつた。ああ、なんと彼は人生學に通じてゐたことだらう！

彼は教師をあまり多く使はないで、科目の大部分を自分自身で受持つてゐた。彼は氣取つた術語をつかつたり、大袈裟な學說や意見をひけらかすことなく、學問の精髓を授ける術を心得てゐたので、年端もゆかぬ子供にも、なるほど學問といふものは大事なものだといふことがよく腹へ入つた。彼の選擇した學問は、専ら人間を一人前の國民として仕上げるに必要なものばかりであつた。大部分の講義は、少年の前途には何が待つてゐるかといふやうな説話から成り立つてをり、彼が廣く青年の活舞臺を巧みに描き出して見せたため、子供たちはまだ學校の机にもたれてゐながら、氣持や考へでは、もういつばし勤務生活を送つてゐたのである。彼は何一つ包み隠さなかつた。人生の行路に横たはる

苦惱や障得を、また人間の前途に立ちふさがる試煉や誘惑を、少しも隠さず赤裸々に子供たちに話して聽かせた。恰かも彼は身を以つて貴賤貧富のあらゆる職業を経てきた人のやうに、よろづの物事に通じてゐた。はやくから著しく功名心が發達してゐたためか、それともこの非凡な教師の眼の中に、露西亞人にはお馴染で、その敏感な天性に不思議な奇蹟を齎らすところの、あの「前へ、前へ！」といふ言葉を少年に向つて叫びつづける或るものが宿つてゐたためか、何れにしても少年たちは、はやくから艱難のみ探し求めて、少しでも難儀な、障害の多い、より多く精神力の發揮を必要とするところで活動することをひたすら渴望してやまなかつた。首尾よくこの學級を卒業するのはごく少數であつたが、その代り志操堅固な百戰錬磨の強者のみであつた。勤務生活に入つてからも、彼等はどのやうな不安定な地位にもよく踏みとどまつた。これがもし他の者なら大多數が、それも彼等より遙かに利口な連中までが、その任に耐へ得ないで、つまらない蹉跌からすべてを棒に振つてしまふか、さもなければ、うつかりしてゐる中に收賄漢や詐欺師の手に乗せられてしまふのである。しかし、彼等はぐらつかかなかつた。人生を知り、人間を知り、あくまで叡智に恵まれた彼等は、不良な連中の上にも力で強い影響を及ぼした。

功名心に燃える少年の胸は、只管この高等科へ入るといふ考へだけで久しく鼓動したものである。我等のテンチエートニコフにとつて果してこの教師にまさるものがあり得たらうか？　ところが折りも折れ、ちやうど彼がその待望の選科へ編入されたばかりの時に、この非凡な教師はぽつくり死んでしまつたのである！　ああ、それがテンチエートニコフにとつてどんなに大きな打撃であつたらう！



どんなに怖るべき最初の喪失であつたらう！ どうやら彼にはそれが……。學校の様子はすつかり一變してしまつた。アレクサンドル・ベトロギッチに代つて、フョードル・イワーノギッチ某といふ人物が校長の椅子についた。直ちに彼は、變に外形的な秩序にばかり重きを置いて、大人にしか要求できないやうなことを子供に向つて要求し始めた。兒童の不羈奔放な態度が、彼には何か我儘のやうに思はれたのである。それで恰かも前校長の意志に逆らふやうに、自分は智能や學習には何の意味も認めない、ただ品行の良いことだけを眼目にする、そもその最初から公言したものである。ところが不思議なことに、フョードル・イワーノギッチが眼目にした生徒の操行は却つて良くなるなかつた。こそこそした悪戯が始まつた。晝間はおとなしく秩序整然としてゐるが、夜になるとどんちゃん騒ぎが持ちあがるのである。

授業の方も何だか變挺なものになつてしまつた。新しい見解を持ち、新しい視角と觀點をそなへた新顔の教員が招聘された。彼等は無闇矢鱈にいろんな新しい術語や新語を生徒たちに浴びせかけ、講義の中で論理的な理窟だの、新しい発見への追隨だの、各自の熱烈な傾注の情だのを示したが、しかし悲しい哉！ 授業そのものに生命が宿つてゐなかつた。彼等の口から出る生命のない講義は、屍臭芬々たるものであつた。一口にいへば、何もかもあべこべになつてしまつたのである。學校當局者や上長に對する尊敬の念は地を拂ひ、生徒は教師や講師を嘲弄し、校長をフエーディカだの白麵鮑だの、その他いろんな綽名で呼んだりし始めた。全く子供らしくない悪戯が行はれるやうになり、果ては多くの生徒を除名にしたり放校處分に附さなければならぬやうな事件まで持ちあがるに

至つた。ものの二年と経たないうちに、以前の學校の面影などはまるでなくなつてしまつた。

アンドレイ・イワーノギッチはおとなしい性質であつた。校長の家の眞向ひに如何はしい婦人を一人圍つてゐる仲間たちの夜中の亂痴氣騒ぎにも加はらねば、坊さんがお人好しなのにつけてこんでお寺で亂暴をはたらく徒黨にも與しなかつた。否々、彼はおぼろげながら靈魂は天に根ざしてゐることを感得してゐたのである。で、誘惑には負けなかつた。けれど快々として彼は樂しまなかつた。功名心には既に目覺めてゐながら、彼には活動の分野がなかつた。なまじ功名心など目覺めなかつた方がよい位だ。教壇で眞赤になつて熱をあげてゐる教授連の講義に耳を傾けながら彼は、無闇に昂奮などしない、平易な言葉で諄々として説き聽かせてくれた亡き先生のことを想ひ出してゐた。彼はどんな課目でも、どんな講座でも片つばしから聽講した！ 醫學でござれ、哲學でござれ、法律でござれ、また、教授が三年がかりでその序説と、獨逸の某々都市の自治體の發達とを、やつとのことで講義することが出来たといふ、おそろしく大掛りな文化史でござれ——何ひとつ聞きもらさなかつた！ しかしさうしたものは皆、或る不態な形をなして彼の頭の中に片影を留めたに過ぎなかつた。生まれつき聰明な彼は、どうもこんな教授法は間違つてゐるとは感じてゐたが、ではどうすればよいかといふ段になると、やはり何も分らなかつた。で、ともすればアレクサンドル・ベトロギッチのこのみ想ひ出されて、身も世もあらぬ悲しさに茫然とかきくれたものである。

しかし、青春には未來があるだけでも幸福である。卒業が近づくとつれて彼の胸は躍つた。「これはまだ人生ではない。ただ人生に對する準備にすぎないのだ。本當の人生は官廳勤務にあつてそこにこ



その功業が待つてゐるのだ」と、彼は獨言ちた。で、あらゆる訪客の驚嘆してやまないあの美しい村にも一顧だにくれず、兩親の墓に暇乞ひもせず、彼はすべての野心家の例にならつて一散に彼得堡へ飛び出したものである。彼得堡といへば、周知の如く、我が國の血氣に逸る若者たちが、官途に就き、立身出世して、あつばれ高位高官の地位を贏ち得るために、ただ何の色香もない氷のやうに冷酷な虚偽虚飾の社會的教養の殻を身につけるために、露西亞のあらゆる隅々から、わんさと集まつて來るところである。ところが、このアンドレイ・イワーノギッチの覇氣も、高等官四等の伯父オヌーフリイ・イワーノギッチに出鼻を挫かれてしまつた。伯父は、何は扱置き手蹟のすぐれてゐることが一番大切で、それなくしては大臣にも大官にもなれるものではないと斷言した。非常な骨折りと伯父の助力のお蔭で、それでもやつと彼は或る省の或る局に奉職することになつた。一國の運命を双肩に擔ふ帝國最高の太監が、この會審するのでも上いかと思はれるやうな、寄木張りの床にワニス塗りの卓子のすらりと並んだ、壯麗な明るい大廣間へ案内された時、騒々しくベンを立てながら一方へ首を傾げて頻りに書き物をしてゐる立派な紳士の群れを目撃した時、また彼自身が卓子の前に坐らされて、取敢ずどうやら故意と選ばれたらしい、つまらない内容の書類（何でも半年から訴訟のついでに三留の金子に關する文書であつた）を寫すやうにと宛がはれた時、經驗のないこの青年は實に變挺な氣持に震はれた。——彼には自分のまはりに坐つてゐる紳士連がまるで小學生のやうに思はれたのである！ 搦て加へて、中にはさも事務を執つてゐるやうな振りをして、審査中の夥しい書類の中へこつそり隠して愚劣な翻譯小説を讀んでゐたが、局長の姿が現はれるたんびに、ぎよつとして

震へあがるのだからいよいよ以つて學校生徒そつくりである。どうも彼には何もかもが變で、學校の課業の方が現在の執務より遙かに眞面目なやうに思はれ、勤務に對する準備の方が勤務そのものより餘程すぐれてゐるやうな氣がした！ 彼は學校時代のことを思ひ出して悲しくなつた。すると、不意にアレクサンドル・ペトローギッチの面影がまさまざと眼の前に浮かんで來て、彼は今にも泣き出しさうになつた。部屋がぐるぐると廻りだして、役人連や卓子がごつちやになつてしまつた。が、やうやく彼はその一時的な昏迷に打ち克つことが出來た。「いや、」と我れに返つて彼は心の中で言つた。「最初はどんなにくだらなく思はれても、兎に角やつて見よう！」そこで彼は心神を引緊めて、他人に做つて勤めて行かうと決心した。

人生いづこに悦樂のないところがあらう？ まして彼等は、外見こそ粗剛陰鬱ながら花の彼得堡に住んでゐるのである。街頭には零下三十度といふ嚴しい極寒がピシピシと凍みわたり、朔風の子、白魔の吹雪は歩道を吹き消し、人に眼つぶしを喰はせ、毛皮の襟や、人の口髭や、毛むくちやらな牛馬の鼻面に容赦なく白いものを振りかけながら吼えたけつてゐるが、巴巴の如く飛び交ふ雪をすかして、上の方のどこか四階あたりの小窓にさへ愛想よげに灯影が映してゐる。居心地のよい小部屋では、つつましやかなステアリン蠟燭の光りを受けて、サモワールの靜かにたぎる音を聞きながら、身も魂もほのぼのとするやうな四方山の話に花が咲き、神がこの露西亞に恵み給うた我等の天才詩人の明朗な詩集が播かれて、青年の若き胸は南國の空の下でも望まれないほど高潮した情熱に打ち顛へるのである。



テンチニートニコフもやがて勤務に慣れてきたが、しかしそれは初め彼が想像してゐたやうな生活の最大目的にはならないで、何やら第二義なものになつてしまつた。結局、時間の區切りぐらゐにしか役立たず、却つて勤務外の寸時が大切に思はれたのである。そろそろ四等官の伯父が甥の奴もどうやら見込みがあるなと思ひかけたところで、その甥が不意に期待を裏切つてしまつた。アンドレイ・イワーノギッチにはずいぶん友達もあつたが、その中に謂ゆるねぢけ者と呼ばれる種類の人間が二人あつた。それは眞に不公平なことばかりか、彼等の眼に不公平と見える事柄は、何によらず無關心に看過することが出来ないといつた、妙にいらいらとして落着きのない世中であつた。根は善良な人間なのだが、することがなすことが無茶で、自分に相當横着なことをしてゐながら、そのくせ他人に對しては一步も假借することの出来ない手合ひで、この二人が火のやうな辯舌と、社會に對する高尚ぶつた憤慨ぶりとでアンドレイ・イワーノギッチに強い感化を與へた。彼等はアンドレイ・イワーノギッチの胸に尖つた神経といらいらした氣持とを喚びさまして、前には彼が心にとめようとしなかつたやうな、いろんな些細なことにまで一々關心を持たせるやうにしたのである。彼には、その壯麗な大廣を占めてゐるいろんな課の中の或る課の課長たるフョードル・フョードロギッチ・レニーツインといふ人物が急に面白くなつた。そこで矢鱈に相手の缺點ばかり穿鑿しはじめた。彼にはこのレニーツインが、目上の人と話をする時にはまるで砂糖のやうな甘つたるい顔をするくせに、目下の者に向ふと忽ち苦蟲を噛みつぶしたやうな澁い顔をするし、又あらゆる小人の例に洩れず、祝日に挨拶を述べに來ない連中を一一おぼえておき、玄關番の訪客名簿に名前の載つてゐない連中には必らず復

讐をするやうに思はれた。それがためにアンドレイ・イワーノギッチはその課長に對して蟲唾の走るやうな嫌惡の情を感じた。彼は惡魔にでも唆かされたやうに、フョードル・フョードロギッチに對して何かちよつかいを入れてやらうと思つた。で、一種獨得な喜びをもつて機會をねらつてゐたが、つひにその望みを達したのである。なんでも或るとき、彼は連二無二その課長に喰つてかかつたため、その筋から謝罪をするか、さもなければ辭職せよといふ内命を受けた。彼はすぐさま辭表を呈出した。四等官の伯父が吃驚仰天して駈けつけるなり、「いやはや！飛んでもない、アンドレイ・イワーノギッチ！これはまた何としたことだ！いい鹽梅に折角ありつゝ出世口を、ただ課長が氣に喰はないからといつて、むざむざ棄ててしまふなんて！以つての外だよ！一體お前はどやういふ料簡なんだ！そんなことを一々氣に懸けてゐたら、役所勤めなんて誰にだつて出来るもんぢやない。さあ心を入れかへて、驕慢な自尊心は振りすてて課長と仲直りをして來てくれ！」と哀願するやうに言つた。

「問題はそこやありませんよ、伯父さん。」と甥が言つた。「僕は課長に謝罪するのは何でもありません。もともと僕が悪いんです。假にもあの人は課長でせう、それをあんな風に喰つてかかるといふ法はありませんからねえ。退職の理由はかうなんですよ。僕には別に勤めがありません。三百人の農奴と、不檢束に放任された領地と、それを管理してをる執事の馬鹿とです。僕の代りに別の男が役所で書類を寫す事になつても大して國家の損失にはなりません。三百人の農奴が租税を拂はなかつたら、それこそ國家の大損害ですからねえ。僕は、伯父さんはどうお考へになるか知りませんが――



一個の地主で、その：勤めたるや：。もしも僕が、自分に委ねられた三百人の人間の運命をよく守り、改善することに力を盡して、几帳面この上もない、眞面目でよく働く三百人の臣民を國家に供給することが出来たなら、どうして僕の御奉公が一課長たるレニーツイン輩のそれに劣るといへませう？」

四等官は吃驚して開いた口が塞がらなかつた。このやうな滔々たる辯舌は豫期しなかつたからである。少し考へてから、彼はこんな風に口を切つた。「ちやが、それにしても：どうしてそんな：田舎になど埋もれてをられるものか？一體、どんな社交界があるといふんだね、あんな：？ 兎に角、こちらでは、往來を歩いてゐても將軍や公爵に出づことは出来たんだ。また何處を歩いても：ちやんと：それ、瓦斯の明りが皎々として、文明開化の歐羅巴が眼の前にあるといふものぢや。それが田舎では、眼につくものといへば、どいつもこいつもどん百姓か土臭い女ばかりぢやないか。酔狂にもほどがある、何を好んであたら一生を、そんな無智驢味な生活に埋めてしまふ氣になつたんだね？」

しかし躍起になつた伯父の説法も甥にはなんの効果もなかつた。そろそろ田舎が、何かかう暢氣な避難所のやうにも、また思索と冥想をふんだんに味はせてくれるところのやうにも、また有益な活動の出来る唯一無二の領域であるやうにも思はれはじめたのである。彼はすでに農業に關する最新刊の書籍まで集めてゐた。結局こんな話があつてから二週間ばかりの後には、はやくも彼は幼年時代を送つた土地の近在へとさしかかり、來客や訪問者が嘆賞おく能はざるあの風光明媚な村から程遠からぬ

ところまでやつて來てゐた。新らしい感覚が彼の身内で羽搏きをした。これまで永いあひだ表へ顔を現はさなかつた往昔の印象が彼の心に甦つてきたのである。既にその邊のことは大方忘れ果ててゐたので、彼はまるで初めて來た旅人のやうな好奇の眼を瞪つて美しい景色に見とれた。と、その時、何故とは知れず彼の胸は俄かに波たちはじめた。道が狭い峡谷を通つて森々と生ひ繁つた大きな森の茂みへ入り、上にも下にも、足下にも頭上にも、三百年からの樹齡で、幹の太さが三抱へもある榎の巨木が、白楊の背よりも高く伸びた樅や榎や黒楊と入り混つてゐるのを目撃した時——「これは誰の森だ？」といふ彼の問ひに對して、「テンチエートニコフ様のものだ」と答へられた時、また道が森を通り抜けて、やまならしの林だの、川柳や猫柳の老木だの若木だのを傍へに、遙か向ふに蛇蜒たる高地を見はらす牧場の中を走り、同じ河に別々の場所に架つた二つの橋を渡つて、その河を或は右に、或は左に見送る時、また「この牧場や川沿の土地は誰のものだ？」といふ問ひに對して、「テンチエートニコフ様の」と答へられた時、やがて道が坂を登つて坦らかな高地にさしかかり、一方には燕麥や大麥小麥などのまだ刈り取つてない五穀畠が、亦一方には、さつき通つたところがすつかり、小さく遠景に融けこんで見渡された時、さては行手がだんだん小暗くなつて、緑の絨毯でも敷きつめたやうにすつと村までつづく野良の上にはまばらに生えてゐる大きく枝をひろげた木々の蔭へ次第に道がかくれ、透し彫のある百姓小屋や石造の地主館の赤屋根が見え隠れして、お寺の金色の屋根がキラリと閃めいた時、激しく波打ち初めた胸が、誰に訊くまでもなく何處へ着いたかを知つた時——積りに積つた感慨が遂に次ぎのやうな言葉となつて迸り出た。「ええ、おれはこれまで何といふ馬鹿だつたら



あり？ 運命がこのやうな地上の樂園の主に指定してくれたのに、あたはおれは死んだ書類のなすり役に身を落してゐたのぢやないか？ 教育も受け、頭腦もみがついて、百姓どもの福祉を増進したり、所領全體を改善したり、支配者であると同時に裁判官であり治安の擁護者であるところの多種多様な地主の義務を果たすために必要な知識をたくはへながら、その地位を無智な執事に委せておいて、一面識もなければ氣風も人柄も分らないやうな人間どものいざこざを缺席裁判でやみくもに片づける仕事を選んだり、自分の所領の實際の管理を他所に、これまで一度も足を踏み入れたことのない、従つてどうせ不合理な馬鹿げた間違ひばかりしか仕出かせないやうな、千里も先の地方の、紙上の架空的な管理を選ぶなんて！」

ところが、もう一つの光景が彼を待ち伏せてゐた。領主のお歸りだと聞いて、百姓たちが玄關先へ集まつて來たのだ。目もあやなる村人たちの、シユミーズや、キチカだのボライカだのといふ頭飾りや、百姓外套や、繪に描いたやうな髯もぢやの顔が彼を取り巻いた。「ああ、わしらの恩人様が！ わしらのこと思ひだして下されただ……」さういふ聲が起つて、彼の祖父や曾祖父のことを憶えてゐる老人や老婆が、手ばなしで泣きだした時には、彼も堪えあへず涙ぐんでしまつた。そして心の中で、「こんなにもおれが愛してもらへるとは！ どうしたことだらう？ これが一度だつて顔も見せず、彼等のために何一つしてやらなかつた報いだらうか？」と思つた。で彼はこれからは彼等と仕事や苦勞を共にしようといふ心に誓つた。

そこで彼は家政を引受けて自から采配を振ふことにした。百姓が地主のために働く日數をへらし、

百姓に自由な暇をふやして、賦役を減少してやつた。馬鹿な執事は解雇した。何から何まで自分で事にあたり、野良にも出れば、穀打場にも麥乾小屋にも姿を見せ、水車場にも顔を出せば船着場にも出張つて、傳馬船や平底船の荷積から出帆にまで立會ふ始末なので、つい誘はれて怠け者もそこそこと働きたすといふ有様であつた。けれど、それも長くはつづかなかつた。百姓といふやつはなかなか悪賢いもので、なるほど旦那は小まめに立ちまはつて、いろんなことを一手に引受けようとはしてゐるけれど、それでは一體どういふ風にするかといふ段になると、まだそれははつきり會得がゆかず、學者ぶつたことは言つても、いつから板についてゐないことを、すぐに見抜いてしまつた。結局、旦那と百姓とはお互ひに全く理解を缺いて、有體にいへば調子が合はず、足並をそろへることが出来なかつたのである。

そのうちにテンチェートニコフは、どうも自分の島では百姓たちの島のやうに物がよく出来ないと氣がついた。早目に種子を播かせても發芽がすつとおくれる。しかも百姓たちはどうやら耕作にも念を入れてゐるやうだ。その場についてゐた彼は、皆がよく働くからといつてウオツカを一杯づつ振舞つたほどだ。百姓たちのところではもう疾うにライ麥が穂を出し、燕麥の實がはじけて、稷の株がぐんぐん大きくなつてゐるのに、自分のところでは、やつと莖がふくらみかけたばかりで、花穂もまだ出来てゐない始末だ。つまるところ、いろんな特典を興へてもらひながら百姓どもが主人を誤魔化してゐたことに氣がついた。それで相手を詰つてみたけれど、こんな返答を受けるが落ちであつた。「どうして、はあ、旦那様、わしらが邸の利益を思はねえことがありますだ！ 旦那様もわし



らが耕したり種子を播いたりしてゐた時、よく働くと仰つしやつて、ウオッカを一杯づつ頂かせて下さつたでせう。」さう言はれては返す言葉もなかつた。

「では、それが今、どうしてかう出来が悪くなつたのだね？」と旦那は糺明した。

「さあ、どうでがすかねえ？ きつと、それあ下に根つきり蟲がついたのでがすよ。それにひどい夏でがしたからね、てんで雨ちふものが降らなかつたもの。」

それにしても、百姓たちの作物には根切蟲もつかず、雨も變な具合に、百姓たちにだけ都合よく、摘にでもなつて降つたと見えて、邸の畠へは一雫も落ちなかつたとは訝しな話だと彼は思つた。

それにも増して、村の女房連の捌きがまた厄介であつた。彼女らは絶えず賦役の過重を訴へて、少しでも強制労働を逃れよう逃れようとした。まつたく奇怪な話である！ 彼は麻布だの漿果だの菌だの胡桃だのといつた買物を全く免除し、かうでもしてやつたらその暇を家事に向けて、縫物をしたり、亭主に小まましな服装をさせたり、野菜畠の一枚もよけいに作るだらうと思つて、他の仕事も半減してやつたものだ。ところが、案外な結果になつてしまつた！ ぐうたらな安逸と掴みあひと、無駄話と、すつたもんだの唾みあひとが矢鱈に女房連のあひだに起こつたため、宿六どもは悲鳴をあげて、「旦那様、どうかうちのじやじや馬を取りしづめて下せえ！ まるで羅刹のやうに暴れくさつて、生きた空もありましねえだよ！」と、絶えず彼のところへ尻を持ちこむ始末である。

●彼は心を鬼にして一つ手厳しくしてくれようかとも思ふのだが、何がさて手厳しくなど出来る筈はない。女房の方は女房の方で、いかにも穢ならしい、一體どこで拾ひ集めて來たかと思はれるやうな、ひどい穢褻つきれを軀に引つけてやつて來ては、さも病氣で弱つてゐるやうに、せいせい言つて見せたものである。「歸つてくれ！ せめてわしの眼につかないところへ行つてくれ！ まあ何とかなるよ！」さう言つて氣の毒なテンチエートニコフが見てゐると、門を出て行つた病人は、すぐその後で蕪のことか何かで隣りの女と掴みあひを始め、丈夫な男にも出来さうもない勢ひで相手の脇腹をどやしつけたものだ。

彼はまた百姓たちのあひだに一つ學校を設けて見ようと思ひたつたが、その結果がお話にならないナンセンスに終つたため、すつかり面目を失つて、馬鹿なことを考へたものだと後悔した。人を裁いたり紛擾を調停するに當つても、例の教授連から教はつたやうな難かしい法律の知識では何の役にも立たなかつた。一方が嘘をつけば一方が出鱈目をいつてゐる始末で、何のことやらさつぱり分つたものではない！ 結局、法律の知識や哲學の書物よりは、單に人間を知るといふことが遙かに必要だと悟つた。そして自分には何かしら缺けてゐるとは氣がついたけれども、さてそれが何であるかは見當もつかなかつた。とどのつまりは、よく有勝ちな結果になつて、百姓には旦那が理解されず、旦那は百姓に認識を缺くといふ譯で、百姓は主人に楯をつき、主人は百姓を曲解するといふ有様になつた。結局、それやこれやで主人の熱意も著しく冷却してしまつた。作業に立會つても、いつかう身が入らなかつた。草刈りの鎌がサクサクと靜かに音をたててゐるやうが、禾堆が積みあげられてゐるやうが、荷積がされてゐるやうが、間近で百姓仕事か圓滑に進んでゐるやうが、彼の眼はぼんやり遠くを眺めてゐた。遠方で作業が行はれてゐる時には彼の眼は手近に對象物を見つめるか、何處か脇の方の川の曲り



角に向けられる、その岸を嘴と足の赤い鷺——勿論、人ではなく鳥である——が歩いてゐる。彼の眼は物珍らしさうに、その鷺が川岸で魚を一びき捉まへて、さてそれを呑みこんだものか呑みこむまいものかと思案でもするやうに十文字にそれを嘴にくはへたまま、それと同時に、まだ魚にありつけないもう一羽の鷺が、既に魚を捕へた方の鷺をまじまじと見つめながら遠くに仄白く浮かんでゐるのを川沿にじつと眺めてゐる様子に見入つてゐた。でなければ、まったく眼をとちて廣大無邊な大空へ頭をもたげながら、野の香氣を胸いっぱい吸ひこんで、空からも地上からも、到るところから沸きおこる鳥の聲が、互ひに調子をととのへた一つの混聲合唱となつて響きわたるのを恍惚として聴き入つたものである。ライ麦の中では鷺が囀り、草の中では水鶏がたたき、頭の上を紅鷺が飛びまはりながら頻りに囀り、ぱつと立ちあがつた沼鳴が頓狂な聲で鳴き、雲雀は陽光に姿を没しながら顫音をこぼし、鶴は蒼空たかく三角形の隊列で飛びながら、チューバのやうな鳴聲を立てる。あたり全體が音になつて響きわたる……。造物主よ！御身の世界は、俗塵によこれた街道筋や都會から程遠い僻地や片田舎では、まだなんと素晴らしいことだらう！だが、それも彼には退屈になつて來た。間もなく野良へ出ることもふつつりやめ、部屋に閉ぢこもつて、執事の報告を聞くことさへ拒んだ。

初めの間は隣人の中でも、軀ぢゆらに煙草のやにの浸みとほつた退職の驃騎兵中尉だの、せいぜい實際のパンフレットや新聞から掻き集めた一知半解の知識で臆面もなく獨斷を下す中途退學の大學生だのがやつて來た。が、それも彼にはうるさくなつた。彼等の話が何となく淺薄なやうに思はれだし、馴々しく相手の膝を叩いたりする歐羅巴風のあけすけな態度や、いやにべこべこしたり、出しや

ばつたりするのが、何れもあまりに露骨で見えすいてゐるやうに思はれ出した。彼はさういふ連中とは絶交しようとして吐をきめ、それをかなり辛辣にやつてのけたのである。丁度どんなことでも淺薄な話さへさせておけばとても愉快な、もうそろそろ今では影をひそめつつあるが、みが大佐の標本で、同時にしりの新思想かぶれの先驅者たる、ワルワール・ニコラーエギツチ・ウィッシュネボクローモフといふ男が、政治や、哲學や、文學や、道徳や、剩つさへ英吉利の財政状態についてまで、存分にまくしたてようとしてやつて來た時、テンチェートニコフは居留守をつかつて不在だと言はせておきながら、不謹慎にも小窓から姿を見せたのである。客と主人とはばつたり顔を見合はせてしまった。いふまでもなく一方は齒をくひしりながら、「畜生つ！」と唸つた。こちらも口惜しまぎれに、「豚め」といふやうな言葉で應酬した。これで二人の交際はお終ひになつてしまつた。それ以來、彼のところへは誰ひとり來なくなつた。

結局、それを喜んで、彼は専ら露西亞に關する大著述の腹案に没頭した。彼がどんな風にしてその著述の腹案をねつてゐたかは、既に讀者の御覽になつたとほりである。條理を無視した奇妙な手順が定められてゐた。とはいへその夢を破られて、彼がはつと眼を覺ますやうな瞬間もない譯ではなかつた。郵便で新聞や雑誌が届けられて、既に官界に於いて華々しい成功を贏ち得たり、または學問その他百般の問題に對して目覺しい貢獻をなした舊友の名前が、活字になつて載つてゐるのがふと眼にくやうな時、人知れぬ淋しい悲哀が心をついて、自分の無活動に對するほろ苦い、物悲しく佻しい無言の悔恨に、そぞろ胸を嘯まれるのであつた。さういふ時、彼には自分の生活が厭はしく穢ららしい



ものに思はれた。まざまざと彼の眼の前へ過ぎ去つた學生時代が甦つて、アレクサンドル・ベトロ  
ギッチの面影が忽然として生けるが如く現はれた……。彼の兩眼からはハラハラと涙の玉がこぼれた  
……。

抑この慟哭は何を語るものだらう？ 彼の惱める魂がそれによつて、秘められた傷ましい惱み—  
—つひに一身を確立することも出来ず、自身のうちに早くから芽ばえてゐた内面的な高尚な人格を完  
成し得なかつたこと、少年時代から不遇と闘ふ試煉を缺いてゐたため、萬難に逢つていよいよ心身を  
鍛へ、ますます品性を陶冶するといふ卓越した境地に到達し得なかつたこと、豊富に持つてゐた偉大  
な感受性も、焼きすぎた金屬のやうに融解してしまつて、最後の仕上げを完うし得なかつたこと、ま  
た、あの非凡な教師が、彼にとつてはあまりに早く世を去つて、絶え間なき狐疑逡巡のために動搖す  
る力や、反撥力のない優柔な意志を鞭撻したり、あらゆる階級の露西亞人がその身分と職業を問は  
ず、到るところで渴望してゐる、あの「前へ、前へ！」といふ激勵の言葉を、目覺しい叫びを以つて  
魂に呼びかけてくれる人が、今や廣い世界に一人もゐないこと——さういつた嘆きを表白したのであ  
らうか？

我々の露西亞魂から生まれた祖國の言葉で、あの「前へ、前へ！」といふ全能の掛け聲を我々にか  
けることの出来る人はそも何處にゐるだらう？ 我々の天性のあらゆる力と素質と、あらゆる深さと  
を知つて、魔法のやうな合圖ひとつで我々を高い生活へ向はせることの出来るのは何人だらう！ 恩  
義を知る露西亞人が、どんな涙と、どんな愛を以つて、その人に酬いたことだらう！ しかし、星り

つり時かはれども、舊態依然として露西亞は、未熟な青年者流の恥づべき懶惰と不條理な行動にとり  
まかれてゐるばかりで、その全能の言葉を發し得る人物を神は與へ給はぬのである！

或る事情が將にテンチエートニコフの心を覺醒させ、今少しでその性格に變革を齎らさうとした。  
ちよつと戀愛事件に似たことが起こつたのである。が、結局それも空しき結果に終つた。彼の所領か  
ら十露里ばかり離れた隣村に一人の將軍が住んでゐたが、この人は、前にも述べたやうに、テンチ  
ートニコフのことを餘りよく言つてゐなかつた。その將軍はいかにも將軍らしい生活を送り、客好き  
で、隣人が敬意を表するために自分を訪問してゐれることは喜んだが、自から答禮に出かけるやうな  
ことはせず、嗚れ聲で話し、書物を讀み、ちよつと類のない變つた娘を一人持つてゐた。彼女は何か  
から生活そのもののやうに生々としてゐた。

娘の名はウーリニカといつた。彼女はちよつと風變りな育て方をされた。露西亞語を一言も知らな  
い英吉利人の保母が彼女を教育した。彼女は稚くして母を喪つた。父には娘の面倒をみる暇がな  
かつた。そのくせ無闇に可愛がつて、甘やかし放題に育てた。我儘一杯に成長した子供の常として、彼  
女は至つて我意が強かつた。不意に赫つとなつて彼女が美しい額に險惡な豎皺をよせたり、急きこん  
で父と諍ひをしたりするのを見ると、誰でも彼女を大變なやんちゃ娘と思ふだらう。が、彼女がい  
りたつのは、何か不公平な話を耳にするか、誰かが過酷な取扱ひを受けたことを聞いた時に限られて  
ゐた。彼女は自分自身のために諍ひをしたり辯解したりすることは決してなかつた。その怒りも當の  
相手が不遇にあるのを見ると、急ち解けてしまふのである。一言無心を乞はれでもすると、相手の誰



彼を問はず、後先きの考へもなく、持合せの金の財産ぐるみボンと投げ出してしまふのだ。彼女には何處かひたむきなところがあつた。彼女が物を言ふ時には、顔の表情から、聲の調子、手の動かし方まで、何もかもが彼女の氣持に追隨して變化するやうであつた。着物の襲までが宛かも同じ方向へ靡くやうに思はれて、彼女自身も、今にも自分の言葉を追つて飛んで行きさうな氣配を見せたものである。彼女には何ら腹藏するところがなかつた。自分の思ふことは人前を憚らず平氣でぶちまけたから、彼女が一旦いはうとした限りそれを阻止することは斷じて出来なかつた。また彼女獨得の、人を魅するやうな一種特別な歩き方にはどこまでも大膽な、豁達自在の趣きがあつたので、誰も思はず道を譲らずにはゐられなかつた。彼女の前では、どんな腹黒い人間でも妙にどきまぎして、物も碌々いへなかつた。最も口巧者な臆面のない男でも、彼女に對しては自由に口がきけず、すつかりまごついでしまふ。そのくせ内氣なはにかみやが、一生のうち誰ともかうまで打解けて話したことはないと思はれるくらゐ寛ろいで彼女と話してしまふ。そして會話の初つ鼻から、彼にはどうも彼女が以前にどこかで知合ひであつたやうに思はれ、その顔貌も確かにどこかで見たやうな氣がするのだ。それは遠い遠い少年の日に、どこか親戚の家で愉しい夜會が催されて、子供の群れが嚙々として遊戯に耽つてゐた折りのことのやうに思はれた。そしてその後ながい間、人間の分別くさい年齢が物憂いものに思はれるのだつた。

彼女とテンチエートニコフの場合にも丁度それと同じことが起こつた。名狀し難い新しい情緒が彼の魂を充たした。退屈な彼の生活が一瞬間パツと光り輝いたのである。

將軍は初めテンチエートニコフを大變歡迎して懇ろにもてなしたが、どうも二人の間はしつくり折合はなかつた。二人の會話はいつも議論に終つて、どちらにも一種不快な感じを残した。それといふのも、將軍は抗辯や反駁をうけるのが大嫌ひだつたのに、一方テンチエートニコフがまたひどく神經質な男だつたからである。無論、彼が娘のためにかなり父親に讓歩してゐたことはいふまでもない。で、將軍の親戚にあたる二人の婦人が將軍の邸へお客にやつて来るまでは、彼等のあひだの平和も保たれてゐた。お客といふのは、ポルドゥイレフ伯爵夫人と、ユジャキン公爵の娘にあたる老嬢とで、どちらも先帝の御代には宮中で女官を勤めてゐた人たちで、今でも宮廷と多少の繋がりを持つてゐるため、従つて將軍もこの二人には少しばかりべこべこしてゐたのである。この婦人客が到着したその日から、テンチエートニコフには、將軍が自分に對してめつきり冷淡になり、自分を無視するか、さもなければ口のきけない動物でも扱ふやうな態度をとりだしたやうに思はれた。將軍は彼に向つて、「おい君」とか、「いいかい」とか、「ねえ、おい」とか、時には「お前」というやうな、かなりぞんざいな言葉を使つた。たうとうそれでテンチエートニコフもむつとした。彼は齒を食ひしぱり、沸きたつ胸をおさへながら、それでもじつと怵へて、「將軍、あなたの御好意を感謝いたします。あなたが（お前）といふやうな言葉を使つて多大の友情をお示し下さるので、私の方からもあなたに（ねえ君）とでも申しあげなければならぬところです。しかし、から年齢がちがひましては、そんな馴々しいお交際も出来かねますよ」と馬鹿町寧に物柔らかな調子で言つたが、さすがに彼の顔は紅潮でむらになり、肚の中は煮えくりかへつてゐた。將軍は面喰らつてしまつた。言葉と考へをまとめなが



ら、彼は、自分はそんなつもりで「お前」といふ言葉を使つた譯ではない。老人には、時と場合によつては若い者に向つて「お前」といふことも許されてゐるなどと、稍しどろもどろになつて辯解した。(彼は自分の官等については何も言はなかつた。)

いふまでもなく、それ以來二人は仲違ひをしてしまひ、折角の戀も序の口でお終ひになつてしまつた。一瞬間テンチエートニコフの前に輝いた光りも消え失せて、その後に来た黄昏はひとしほ暗かつた。何もかもが、この章の初めで讀者の御覽になつたとほりの、ごろごろ愈けてばかりゐて何一つしない生活に變つてしまつた。家の中もごたごたと醜態をさらけ出してゐた。箒が塵埃と一緒にまる一日ちゆう部屋の眞中にとろがつてゐた。股引が客間にまでほつたらかしてある始末。長椅子の前の洒落た卓子の上には、まるでお客に御馳走でも出したやうに脂染みたズボン吊りが載つかつてゐるといふ爲體で、あまりにも彼の生活がだらしく無精なものになつたため、終ひには召使どもが彼を尊敬しなくなつたばかりか、雌鷄までが彼を馬鹿にして、嘴で突つつきかねない有様であつた。ペンを手にして、何時間も彼は紙の上に、菱の實や、家や、百姓小屋や、荷馬車や、三頭馬車などの繪を、ただ漫然と書いてゐたりした。が、時には本人の知らないあひだに、すつかり夢中になつたペンが、きやしやな輪廓に、はきはきした、人を射るやうな眼差をそなへ、前髪を上へかきあげた可愛らしい顔を、ひとりで描いてゐることがあつた。それが恐らくどんな美術家にも描けさうにない、他ならぬ彼女の肖像であることを發見して、我ながら吃驚したものである。で、いよいよ彼は憂鬱になり、この世にはもう幸福などといふものはないと信じて、その後は一層面白くない内氣な人間になつてしまつた。

アンドレイ・イワーノギッチ・テンチエートニコフはかういふ心理状態にあつた。ちやうど彼が、例によつて例の如く、ぼんやり外を眺めるために窓際に腰をおろしたとき、不思議なことに、いつものグリゴリーやベルフィーリエヅナの聲は聞こえないで、何やら外がざわめいて、そはそはしてゐるのに氣がついた。血洗ひの小僧と掃除婦とが駈けよつて門を開けた。と、門の中へ三頭立の馬が、ちやうど凱旋門についてゐる彫刻か繪とそつくり、鼻面を一回は右へ向け、一回は左へ向け、一回は正面を向いて駈けこんで来た。その馬の頭越しに、だぶだぶのフロックを着て手巾を帯がはりに締めた馭者と從僕とが馭者臺に坐つてゐるのが見える。その後ろには、縁無帽にマントを着用した一人の紳士が、虹色の襟巻をまいて乗つてゐた。馬車が玄關の前に横づけになると、はつきりそれが、彈機つきの輕快な半蓋馬車であることが分つた。外見の非常にきちんとした紳士が、まるで軍人のやうな敏捷さで、ひらりと入口の階段へ飛び降りた。

アンドレイ・イワーノギッチはぎよつとした。彼は相手を、その筋の役人だと思つたのである。茲でちよつと述べておかなければならないが、青年時代に彼は或るくだらない事件にかかりあつたことがある。その頃、いろんなパンフレット類を矢鱈に讀んでゐる驃騎兵あがりの二人の哲學者と、大學を中途で退學した美學科生と、破産した賭博者とが、老耄れの共済組合員で、これもまた賭博者であるが辯口の達者な、或るいかさま師の主宰で、一種の慈善團體の設立を計畫した。この結社は、西はティムス河の流域から東はカムチャッカにいたるまでの、あらゆる人類に恒久的福祉を齎らすとい



よ、おそろしく廣汎な目的をもつて組織されたものであつた。多額な基本金が必要とあつて、太つ腹な會員から非常に莫大な寄附金が集められた。その金が一體どうなつてしまつたかは、主宰者の他には誰にも分らない。この團體へ彼を引つ張りこんだのは、例のねぢけ者の部類に屬する二人の友人で、もともとは善良な人間であつたが、科學だの、文明だの、人類に對する未來の惠澤だのを祝福する名目で、盛んに杯を舉げ舉げする中に、たうとう本物の醉漢よぼろになつてしまつたのである。テンチェートニコフは間もなくハツと氣がついて、この仲間から身を退いた。が、既にその團體は貴族にとつては餘りかんばしくない或る別な行爲に手を伸ばしてゐたため、後には刑事件を引き起こしてしまつた……。そんな譯で、その團體からは脱退して、一切の關係を絶つてはゐたけれど、それでもテンチェートニコフがまだすつかり安心しきつてゐられなかつたのも強ち不思議ではない。何となく彼は良心を咎められてゐたのである。で今も、さつと扉の開いたのを見て、思はずきよつとした。

しかしその客がいかにも恭しく、首をやや横へ傾けながら、おそろしく氣持のいいお辭儀をして、簡單ではあるが極めて明瞭な言葉で、自分はもう久しい間、或る用件と好奇心とに促がされて露西亞ちゆうを遍歴してゐる者だと名乗り、我が國はいろんな産業が盛んで土壤の種類がさまざまであることはさておき、實に素晴らしい物象に富んでゐると言ひ、この村の繪のやうな景色にはすつかり心を惹きつけられてしまつたが、どんなに景氣がよくても、春の出水と悪路のために思ひがけなく馬車が破損して、鍛冶屋と職工の手間を要するやうな事態にさへ立ち至らなかつたら、こんなお門違ひな訪問をして、お騒がせするのではなかつた、しかし自分の馬車にこんな故障が起ころなかつたとしても、御主人に親しく敬意を表する喜びを回避することは出来なかつたであらうと述べるに及んで、テンチェートニコフの怖れは忽ち消滅してしまつた。

これだけの口上を終ると客は、いかにも人の心を蕩かすやうな氣持のいい身振りで、眞珠貝の鈕をはめたキッドのしやれた半長靴を穿いた片で足摺りをして、かなりでつぶり肥つた軀からだのくせに、まるで護談毬のやうに身輕に、ちよつと後ろへ跳びさがつた。

すつかり安心したアンドレイ・イワーノギッチは、これはきつと研究に熱心な博物學の教授か何かで、珍らしい植物化石のやうなものでも採集する目的で露西亞ちゆうを歩きまはつてゐる人に違ひないと斷定した。そこでさつそく彼は、及ばずながら何でも御用だてするから、自分の家の職人を、車大工でも鍛冶屋でも自由に使つて欲しいと言ひ、どうか御自分の家同様、ゆつくり寛ろいで頂きたいと懇望して、客を大型のヴォルテール椅子に掛けさせると、やをら相手から自然科學の話でも聴かうものと身構へをした。

ところが、客は寧ろ己れの精神上の問題について語つた。彼は自分の一生を、海上に漂ひながら背反つねなき風に飄弄される小舟に譬へて、轉々として職はかへなければならず、正義のためにはいろんな辛い思ひも耐へ忍んだが、敵方から命までつけ狙はれるやうな際疾い目に逢つたことも度々であると述べて、尙その上に、寧ろ彼が實際家であることを示すやうな、いろんな話をした。ひとくさり話を終つたところで、彼は白いバチスト麻のハンカチを取り出して、アンドレイ・イワーノギッチがうひぞこれまで聞いたこともないやうな、大きな音をたてて涙をかんだ。よくオーケストラの演奏中



などに、チューバがかういふ猛烈な音をたて始めると、まるでそれはオーケストラの中ではなく、ちとらの耳の中で我鳴りたててゐるやうな気がする。丁度それと同じやうな音が、眠つたやうな邸内の部屋々々を驚かして響き渡つた。直ぐそれに次いで、バチスト麻のハンカチを巧みに振つた拍子にオーデコロンの薫りがブーンとあたりを擴がつた。

讀者は恐らくこの客が、永らく閑却されてゐた我等の尊敬すべきパーヴェル・イワーノギッチ・チコフに他ならないことを疾づくにお氣づきのことと思ふ。彼はちよつと老けてゐた。どうやらこの年月が太平無事には過ぎなかつたものと見える。着てゐるフロックも少し古びたやうに思はれ、例の半蓋馬車や馭者や従僕や馬や馬具までが、さんさんに酷使されて疲れはててゐるやうに見える。どうやら財政の方もあまり羨ましい状態ではなさうである。が、彼の顔つきや禮儀にかなつた作法ものごしには、何の變りもなかつた。立居振舞にかけては前よりも一層調子がよくなつた位で、安樂椅子に腰をおろしながらも、一段と巧者に脚を前で十字に組むやうにしたものである。言葉の調子には一入やはらかみが加はり、用語や表現に一層用心ぶかい節度が守られて、身を持つる上に一段と手堅さが増し、萬づに一層の如才なさが加はつてゐた。カラーや胸當は雪よりも白く清潔で、旅の途中であるにも拘らず、彼のフロックには埃ひとつついてゐない、——そのまま真直ぐに命名日の祝ひに招かれてもいい位だ。兩の頬や頤には綺麗に剃刀が當てられて、その氣持のいいふつくらした圓味には、盲人でない限り、つくづく見惚れずにはゐられなかつた。

がらりと邸内の様子が一變した。これまでずつと鎧屏をおろして、物の文目も分らなかつた家の半

分が、にはかに日の目を拜んで明るくなつたのである。新らしく光りを受けた部屋々々には、いゝんなものが竝べられて、間もなく面目を一新した。寢室に當てられた部屋には夜の身じまひに必要な調度を持ちこまれ、書齋にきめられた部屋へは……いや、それより先きにこの部屋には三つの卓子があつたことを知つておかなければならない——一つは書き物卓子で長椅子の前にあり、次ぎのは骨牌卓子で窓と窓との間の委見の前にあり、三つめのは隅置卓子で、寢室へ通じる扉口と人の住まない廣間へ通じる扉口との間の隅に置いてある。今度その廣間は控室に使はれることになつたが、いつもは廢物の家具などの置場になつてゐて、ここ一年ばかりのあひだ誰ひとりそこへ足を踏み入れた者もなかつたのである。この隅置卓子の上には旅行鞆から取り出した衣類がのせられた。即ちフロック用のズボンだの、真新しのズボンだの、鼠色のズボンだの、天鵞絨と縞子との各々二着づつの胴著だの、フロックコートだのである。それを皆、一つ一つ、上へ上へとピラミッド形に積み重ねて、その上から絹のハンカチが蔽つてある。扉口と窓との間の別の隅には、長靴がすらりと竝べてある——一足のはあまり新らしくないが、他の一足は真新しだ、エナメル塗りの半長靴もあれば、寢室用の上靴もある。それにも矢張り人目を憚るやうに絹のハンカチが掛けてあるので、一向そんなものがあるやうにも思はれない。書き物卓子の上には手廻しよく、例の手箱だの、オーデコロンの壘だの、カレンダーだの、どちらも第二巻の小説本が二冊だの——といったものが實にきちんと竝べられてゐる。清潔な下着類は、前から寢室にあつた箆笥の中へ片づけられ、洗濯をしなければならぬ下着類は一包みにまとめて寢臺の下へ突つこまれた。空になつた旅行鞆も矢張り寢臺の下へ押し込まれた。盜賊を威すた



めに道中のお供をしてゐる長剣も、寢間へ持ちこまれて、寢臺の手近の釘に掛けられた。何もかもがおそろしく綺麗さつぱりと整頓された。どこに一つ、紙きれや羽毛のやうなものも落ちてゐなければ、塵ひとつ見あたらない。何だか、あたりの雰圍氣までが高尙になつて、いつもちやんちゃんと下着を取換へ、日曜ごとに風呂へ行つて濡れた海綿で軀をこすことにしてゐる、健康で生々した男の、氣持のいい口ひがあたり立ちこめた。下男のベトールシカも例の體臭でいつとき控室の空氣を濁しかけたが、當然の處置として、さつそく臺所へ移された。

初めのうち、アンドレイ・イワーノギッチは、客のために自由を束縛されたり、無理やり生活様式を變へさせられたり、折角いい鹽梅に運んでゐる日程をぶち毀されたりして、自分の自主獨立が犯されはすまいかと懸念したが、結局それも取越苦勞に過ぎなかつた。我等のパーヴェル・イワーノギッチはどのやうにでも巧く調子を合はせることが出来るといふ、變轉自在の異常な順應性を發揮した。彼は主人の哲學的な悠長さに賛意を表して、それでこそ百歳の長壽を約束するものだと言つた。また隱遁生活についても、それこそ人間に偉大なる思想を養はせる所以であるなどと、勝手なことを言つて旨く撥を合はせた。圖書室を一瞥すると、全般的に書籍といふものを稱揚して、人間を無爲安逸から救ふ武器だなどと言つた。言葉数は少ないけれど、言ふことにそつがなかつた。また動作に於いては一層剴切な舉措を示した。ちやうど頃合ひに顔を出し、ちやうど頃合ひに座をたつた。主人が口をききたくなさうな時には、決して餘計なことを質問して相手を困らせなかつた。唯々として將棋の相手もすれば、諾々として沈黙を守りもした。相手がぼかーりぼかりと煙管から煙の輪を吹いてゐる

やうな時には、こちらは煙管を嗜まない代りにその場にふさはしい手すさびを工夫したものである。例へば衣囊から黒金象眼の嗅煙草入を取り出して、左手の二本の指でしつかり挟み、それを右手の人差指でくるくると、まるで地球が地軸を中心に廻轉するやうに廻したり、さもなければ口笛を吹きながら、ただぼんぼんとそれを指で敲いたりしてゐるのである。要するに主人の邪魔になるやうなことは決してしなかつた。「おれは初めて一緒に暮らすことの出来る人間に出合つたといふものだ。」と、チンチエートニコフは心に呟やいた。「どうも一體にかういふ心掛のいい人間は稀だ。なるほど世間には、頭がいいとか、教養があるとか、善良だとかいふ人間は幾らでもあるけれど、いつ見ても心にむらがなく生涯を共に暮らしても喧嘩をする必要のない人間が、さう世間にざらにあるかどうか、そいつはちよつとおれには分らない。が、この男こそは、おれが見たさういふ人間の第一人者だ。」チンチエートニコフは自分の客をこんな風に見たのである。

チチコフはまたチチコフで、かういふ物靜かでおとなしい主人の邸に暫らくでも逗留することになつたのがひどく嬉しかつた。ジブシイのやうな生活にも少々飽きが來てゐた。この美しい村で、田園や早春の景色を眺めながら、たとへ一ヶ月でも休養することは、痔疾の豫防だけにでも確かに有効だつた。

こんないい安息の場所を他に見つけることは困難である。長いあひだ寒さに抑へられてゐた春が、にはかにその絢爛の装ひを展開しはじめ、到るところに生命の躍動が感じられた。棘のところどころにある空地は早くも淺みどりを帯びて、若草のすがすがしいエメラルドのあひだに黄いろい蒲公英が



點々と花をもたけ、紫がかつた茜いろの翁草がたをやかに首をかしげてゐる。蝶子やいろんな昆蟲の群れ、沼澤地に姿を現はし、次いで水蜘蛛が我れ劣らじと水の上を走りだす、それにつれてあらゆる種類の鳥が四方八方から枯葎の中へ集まつて來た。何もかもが近々と身を寄せて、互ひに相手を眺めあふのである。急に地上が賑やかになり、森は眠りから醒め、牧場は騒々しく聲をたてはじめる。村では圓舞がはじまつた。廣大無邊な遊樂の巷が展けたのである。緑の色の鮮やかさ！ 空気のすがすがしさ！ 園で唄ふ鳥の啼聲！ 榮園である、萬象の狂喜と亂舞である！ まるで婚禮でもあるやうに、村は舉つて唄ひどよめいてゐる。

チチコフはすねぶん歩きまはつた。漫る歩きや散歩によいところが到るところにあつた。時には、廣々と下に擴がつてゐる盆地を見渡すことの出来る、平らな高臺の上へ歩を進めたが、その盆地には此處彼處に、出水の名残りの大きな湖水がまだ残つてをり、その水面にはまだ葉をつけない森が島のやうに點々として黒ずんでゐた。また時には密林や、木の生繁つた谷間へ足を踏み入れた。そこには、ために天日も暗くなるばかり縦横に飛びかはしてガアガア鳴きたてる鴉の巢を夥しくしよはされた木が、ぎつしりかたまつてゐた。すつかり乾いた地面を通つて、船着場へ行つてみることも出来た。初荷の豌豆や大麥や小麥を積みこんだ船が、今しも纜を解くところで、同時に、一方ではその川の水が、やうやく仕事を始めたばかりの粉磨場の水車に耳を聳するばかりの音をたててぶつかつてゐた。また春先の野良仕事を見に出かけて、新らしく耕やされた畠が緑の中に黒い縞をつくり、種蒔く人が胸に掛けた篩を時々かるく叩きながら、種子を餘分には一粒も外方へこぼさないで、手づかみ

でまんべんに蒔いてゆくのを眺めたりした。

チチコフは到るところへ顔を出した。彼は執事も意見を闘かはせば、百姓や粉屋とも討論した。彼はありとあらゆることを、あれはどうだ、これはどうだと、一から十まで穿鑿して、どんな風にも所領が經營されてゐるとか、穀物はどれほど賣却されるとか、春と秋とに磨粉の賃金はどれ位とれるとか、また百姓はめいめいどういふ名前で、誰と誰とが親戚で、どこで牝牛を買つたか、豚を何で養なつてゐるとか、さういふことを残らず探知した、つまり何ひとつ聞き漏らさなかつたのである。また百姓がどのくらゐ死んでゐるかを調べてみたが、それに大した數ではなかつた。彼は利口な男だから、アンドレイ・イワーノギッチの所領が餘りうまく經營されてゐないことを忽ち見破つた。いろんな手落ちや、怠慢や、横領の跡が到るところに窺はれ、泥酔者もなかなか少なくなかつた！ そこで彼は、(テンチエートニコフという男は、何といふ馬鹿だらう！ こんな素晴らしい領地をこんな風に投遣りにしておくなんて！ やりやう一つで、年收五萬留ぐらゐは平氣であげられるのに！)と思つた。

かうして散歩をしてゐる間に、彼は度々、自分もいつかはこんな身分になりたいものだ——勿論、今すぐという譯ではないが、例の肝腎な一件がうまく成功して、まともな金子をいよいよ手に握つた曉には——おれもかういふ所領の、暢氣な持主になりたいものだと思つた。勿論、さういふ時、彼の胸にはすぐに、商家か、又は他の富裕な階級の出で、多少は音楽の素養もある、色白で瑞々しい若い女房の姿がまざまざと浮かび上るのであつた。またチチコフという姓を永久に傳へる義務を



負ふ若い世繼の姿も想像にのぼつた——元氣な男の子と可愛らしい女の子が一人づつか、それとも男坊主が二人に、娘つ子の二人や三人はあつても構はない。それでこそ自分といふものが、決して影や幻のやうにこの世を過ぎ去つたのではなく、ちやんと實際に生き且つ存在してゐたことを世人に認めさせ得る所以であり、祖國に對しても何ら疚しからぬ譯である。そこで彼は、もう少し官等に箔がつくのも悪くない——さづしめ五等官にでもなれば、まづ押しも押されぬ立派なものだ：：などと蟲のいい妄想まで描きはじめたものである。散歩の間などには、よくいろんな考へが人の頭に浮かんでくるもので——屢々それが人間を現在の退屈な境地から連れ出して、ちよいちよい引つぱつたり、からかつたりして、いやが上にも空想をつのらせる、それがまた、到底そんなことは實現するものではないと、自分でちやんと承知してゐながら當人にはとても愉快なのである！ 村はパーウェル・イワーノギッチの召使たちにもやはり氣に入つた。彼等も主人と同様にその村に馴染んだ。ペトゥルシカは酒倉番のグリゴリーと直ぐ好い仲になつてしまつた。尤も、初めのうちはどちらも、いやに勿論ぶつて、堪らないほど佛頂面を向け合つてゐたものだ。ペトゥルシカがいろんな土地を見て来たといふ見聞の廣さでグリゴリーを煙に巻くと、グリゴリーの方は、ペトゥルシカがまだ行つたこともない彼得堡の話を持ち出して、相手を即座にやりこめた。それならといつて、こちらが自分の行つたことのある場所の遠さを持ち出して、勢力を挽回しようとするれば、グリゴリーは、どんな地圖を調べたつて決して見つかつこない地名を擧げて、そこまで行くには三萬露里の餘もあると應酬した。だから、パーウェル・イワーノギッチの下男はすつかり面喰らつて、開いた口もふさがらず、

邸ちゆうの召使に忽ち笑ひものにされた。が、それでも結局二人は、いとも親密な間柄になつたのである。村端に、百姓たちから小父さん小父さんと呼ばれてゐる禿頭のピーメンが、アターリカといふ名前でも呼ぶた居酒屋を開いてゐた。その居酒屋に二六時中二人の姿が見られた。二人はすつかりそこのお馴染になつた——下々でよくいふ、居酒屋の常連になつたのである。

セリファンにはセリファンでまた別の楽しみがあつた。夕方ともなれば、村では娘たちが唄をうたひながら、解けつほぐれつ春の圓舞を踊つた。今ではもう大きい村ではさつぱり見かけなくなつた、あのすらりとして血統の正しい純粹な露西亞娘の姿に彼はすつかり現つを抜かして、幾時間も我れを忘れてぼんやり立ちつくしたものである。どの娘が一番美しいのか、ちよつと口では言はれない——どれもこれも頸や胸が眞白で、みんなばつちりして潤んだやうな眼を持ち、歩く姿は孔雀のやうで、編髪を腰の邊まで垂れてゐる。さうした娘たちの白い手を両手につないで一緒に踊りながら緩やかに動く時、または他の若者たちと組になつて、娘たちの方へどつと一列に押し寄せてゆくと、娘たちの方からも矢張り一列になつてこちらへ押し寄せながら、「主さん、わしらに花髻お見せ！」と、笑ひさざめきながら、聲を張りあげてうたひ出す——静かな黄昏があたりをつつみ、遠く河向ふまで響いて行つた歌聲が、物悲しい飴となつてこちらへ戻つてくる——さういふ時、彼は自分で自分の氣持が分らなかつた。それからといふものは、寝ても覺めても、朝に夕べに、絶えず彼には、自分が白い手を両手に握つて、圓舞を踊つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

チチロフの馬どもにも矢張り新しい住ひが氣に入つた。鞍馬や『議員』はもとより、あの横着な



連錢葦毛までが、テンチェートニコフの家に逗留することを少しも退屈だとは思はなかつた。素晴らしい燕麥はあてがはれるし、厩舎の設備が圖抜けてよく出来てゐた。各々別々の仕切りへは入れられてゐたけれど、籬のあひだから互ひに仲間を見ることが出来、もしどれか一頭が、一番遠くにゐる相棒に何か嘶いてみるやうな氣紛れでも起こしたとすれば、相手はすぐそれに應じて嘶き返すことが出来た。

要するに誰も彼もが、まるで自分の家にでもゐるやうに、すつかり落ちついてしまつたのである。ところでパーウェル・イワーノギッチは、彼が隈なくこの廣い露西亞を遍歴してゐる用向き——つまり死んだ農奴の一件については、縦へまるきりの馬鹿を相手に取引する場合でも、極めて慎重に周到の用意をめぐらしたものである。しかもテンチェートニコフは、兎にも角にも本を讀んでゐるし、哲學的な思索にも耽り、何故？ どうして？ と萬事にかけて一々くどく、その理由を究めたがる男だ。「いや、これは寧ろ、別な方面に端緒を見つけた方がよさうだ。」チチコフはさう考へた。彼は時々、住込みの召使たちと無駄口を叩きながら、その間に、彼等の主人が前にはよく隣り村の將軍の家へ出入してゐたこと、その將軍には娘が一人あつて、どうやら主人はその娘に思召しがあり、娘の方でもこちらの主人を憎からず思つてゐたらしいが……その後、何か面白くないことがあつて、ふつり遠ざかつてしまつた、といふやうなことを嘆ぎだした。それに彼自身も、アンドレイ・イワーノギッチが始終ペンや鉛筆で描きちらす誰かの顔が、どれもこれも皆同じ顔であることに氣がついた。或る日のこと、晝飯のあとで、彼はいつものやうに銀の嗅煙草入をくるくると指でまはしながら、

「アンドレイ・イワーノギッチ、あなたのところには、ちやんと何から何まで揃つてゐますが、ただ一つだけ足りないものがありますねえ」と、言つた。

「と仰つしやるのは何んですか？」と主人は、煙の輪を吐き出しながら、訊きかへした。

「生涯のお伴ですよ。」とチチコフが言つた。

アンドレイ・イワーノギッチは何とも答へなかつた。話はそれで跡切れてしまつた。

チチコフはその位のことでは僻易せず、次ぎの機會を選んで、今度は夕飯の前に四方山の話をしなから、出しぬけに「ねえ、アンドレイ・イワーノギッチ、ほんとにあなたは御結婚なすつたらいいでせう。」と言つた。

それに對してテンチェートニコフは、まるでそんな話をするのは不愉快だといはんばかりに、一口も返事をしなかつた。

それでもチチコフは僻易れなかつた。三たび機會をつかんだ彼は、夕飯の後でまたこんな風に切りだした。「段々と御事情を拜察してみますのに、どうも矢張りあなたは、御結婚なすつた方がいいと思ひますね。このままですと憂鬱症におかかになりますよ。」

チチコフの言葉に今度はそれほど説得力があつたのか、それともテンチェートニコフがこの日に限つて蟲のゐどころがよくて、打明け話をする氣になつたのか、彼はほつと一つ溜息をついて、煙管の煙をぶらりと上へ吐き出しながら、「何事にも人間は運がよくなくちや駄目ですなえ、パーウェル・イワーノギッチ」と前置をして、さて自分と將軍との交友關係から絶交に至るまでの一部始終を、あ



りのままに話して聞かせた。

つおさにすべての経緯を聞いてみれば、そんなことになつたのも、ただ「お前」といふひと言がそもその原因だと分り、さすがのチチコフも呆れて物がいへなかつた。少時のあひだはテンチエートニコフの顔をまじまじと眺めてゐるばかりで、一體この男はまるきりの馬鹿なのか、それとも少しどろかしてゐるのか、頓と相手の本體をつかむことが出来なかつた。が、やうやくのことに――

「これはしたり、アンドレイ・イワーノギッチ！ あなたとしたことが！」と、相手の両手を取りながら彼は言つた。「それがどうして侮辱になるんです？ その際（お前）といはれたからとて別に腹を立てるにも當らないぢやありませんか？」

「なるほど言葉そのものには別に腹を立てるいはれはありませんがね、」とテンチエートニコフが答へた。「ただその言葉に含まれた意味に、またそれが口外される時の語調に侮辱が感じられるのです！

（お前！）――それはかういふ意味なんです――（心得ておくがいい、お前はくだらないやくざ者だが、さうかといつて他に碌な話相手もないから仕方なしに家へ寄せつけてゐるのだぞ。だが今は、公爵令嬢ともあるユジャキナが來られたから、お前も自分の身の程をわきまへて、恭しく下座に立つてゐるがいい。）これがつまりその意味なんですよ！」かう言ひながら、温順で柔和なアンドレイ・イワーノギッチもキラキラと眼を光らせた。その聲には傷つけられた感情の苛立ちがこもつてゐた。

「假にそんな意味であつたにしても、別になんでもないことぢやありませんか。」と、チチコフが言つた。

「なんですつて？ こんな不當な仕打ちを受けてまで、僕におめおめとあの將軍の御機嫌を取りに行けどでも仰つしやるんですか？」

「何を不當な仕打ちだと仰つしやるんですか？ 別に不當な仕打ちでも何でもありませんよ。」とチチコフは落着き拂つて言つた。

「どうして不當でないのです？」と、テンチエートニコフは意外な面持で訊ねた。

「それはえて將軍などといふものの癖で、別に底意があつてのことぢやありませんよ。あの手合ひは誰彼なしに（お前お前）と呼びすてにするんです。しかし、なにしろ相手は武勳赫赫たる尊敬すべき人物ですから、それ位のこととは仕方がないぢやありませんか。」

「それとこれとは別問題です。」と、テンチエートニコフが言つた。「あれがもし將軍でなくただの老人で、傲慢でも不遜でもない貧乏人だつたら、私は（お前）と言はれても許してやります、それどころか却つて町重に應待しますよ。」

（この男はよつぽどどうかしてゐる）と、チチコフは肚の中で呟やいた。（襤褸をさげた素寒貧になら許せるが、將軍には許せないといふ！）――「よろしい！」と、彼は聲に出して言つた。「では假に將軍があなたを侮辱したとしておきませう、ところがあなたの方の間にはちやんともうお互ひに償ひがついてゐる譯です。それなのに自分の大事な戀を抛つてまで、いつ迄も唾みあつてゐるなんて――失禮ながら、それは無茶ですよ……。一旦これと目星をつけた限りは、遮二無二それに向つて突進しなくつちや嘘ですよ。人が唾を吐けばとて何とも仕様がありませんさ！ 人間はしじゅう唾を吐きま



す——もともと、さういふ風に出来てゐるのだから上方がありません。今どき唾を吐かない人間なんて、世界ぢゆう捜しまはつても見つかりつこありませんからね。」

その言葉にすつかり面喰らつたテンチェートニコフは、「このチチコフといふ男も變りものだなあ！」と、途方に暮れたやうに、心の中で呟やいた。

「だが、このテンチェートニコフつて男はよつほど變り者だよ！」と、一方ではチチコフが考へた。「アンドレイ、イワーノギッチ！ 私はあなたに兄弟同士のやうにざつくばらんにお話しますがね。あなたはまだ経験がお浅い。どうです、この一件は手前にお委せ下さいませんか。ひとつ閣下の邸へお邪魔しまして、今度のこととは偏へにあなたのお誤解から、あなたのお若いことや、世間や人間をよく御存じないことから起こつたのだと、私からよく將軍に釋明いたしませう。」

「僕はあの人の前に詔らふ考へはありませんよ。」とテンチェートニコフは、少し憤然として言つた。「それに、そんな権限をあなたにお委せする譯にはまわりませんよ。」

「私も人に詔らふことは出来ない性質でしてね。」と、チチコフも憤然として言つた。「私も人間ですから、他の過失は或は犯すかも知れませんが、卑劣な事だけは——斷じて……。いや御免なさい、アンドレイ・イワーノギッチ、これも眞實お爲を思へばこそで、まさか、あなたがそんな風な侮辱の意味に私の言葉をお取りにならうとは思ひませんでしたからね。」かうした言葉には飽くまで威嚴の情がこもつてゐた。

「いや、勘忍して下さい、私が悪かつたのです！」と、すつかり感動したテンチェートニコフは相手の両手を掴みながら、あわてて言つた。「私は毛頭あなたを辱めるつもりではなかつたのです。誓つて申しますが、あなたの御親切なお心遣ひを疎かには思ひません！ ですが、この話は止めにしませう。こんな話はもう二度と再び繰り返さないことにいたしませうよ！」

「さういふことでしたら、私は一つ將軍のところへ行つてまゐりませう。」

「どうしてですか？」とテンチェートニコフは、合點のゆかぬ面持で相手の顔を見つめながら訊ねた。

「敬意を表するためにですよ。」

「このチチコフつて男も妙な人間だなあ！」とテンチェートニコフは思つた。

「このテンチェートニコフつて男も變な人間だなあ！」とチチコフも思つた。

「ぢやあ、アンドレイ・イワーノギッチ、私はあすの朝、十時ころあちらへまゐることにいたしませう。人に敬意を表するのは早いに越したことはありませんからね。手前の半蓋馬車はまだよく直つてゐないやうですから、輕馬車カウチヤースカを一つ拜借できないでせうか。さうすれば私は、明朝十時ころには先方へ着くことが出来ますからね。」

「何ですか、一々そんな難かしいことを仰つしやつて？ あなたはこの家の主人も同然ですよ。馬車だつて、なんだつて御自由にお使ひ下さい。」

こんな會話はなしをしたあとで、二人は挨拶を交はして、それぞれ寢室へ引きあげたが、お互ひにどちらも相手の風變りな氣質についていろいろと考へてみないではゐられなかつた。



しかし、不思議なことには、翌る朝チチコフのために馬車の用意が出来て、新らしいフロックに白い襟飾と白い胴着をつけた彼が、殆んど軍人のやうな軽快さでひらりと軽馬車に飛び乗りざま、將軍に敬意を表するために出發した時、テンチエートニコフは長いあひだ経験しなかつた妙な胸騒ぎを覺えた。今までは錆びついて眠つてゐたやうな彼の全思想系統が、俄かに一變して、それはそはと活動を開始したのである。これまで暢氣に惰眠を貪ほつてゐた怠け者のあらゆる感覚が、不意に神経的な苛立たしさに襲はれた。彼は長椅子に腰かけてみたり、窓際へ立寄つてみたり、さうかと思ふと、書物を取りあげてみたり、何か考へをまとめようとしてみたりした——が、それは空しき望みで！どんな思案も頭へは浮かばなかつた。今度は何も考へまいと努める——が、それも空しき努力で！思想に似たやうな切れ切れのものが、思想の端くれか尻尾みたいなものが彼の頭へ忍びこんで、四方八方から小突きまはすのである。「どうも變な氣持だ！」さう呟やいて彼は窓へ近寄つた——鬱蒼たる森を貫いて走つてゐる街道を眺めると、その端れには馬車の立てた土埃がまだ鎮まりきらないで煙のやりに立ち迷つてゐた。が、テンチエートニコフのことはさておき、チチコフの後をつけてみよう。

## 第二章

駿馬は半時間とほんの少しで、もうチチコフを十露里さきへはこんでゐた。最初は鬱蒼たる森をくぐり抜け、次いですがすがしい耕地に青みそめた穀物の中を通りすぎて、やがて山の端にかかると、刻一刻と眺望がひらけ、更に、やうやく芽ぐみそめたばかりの菩提樹の廣い並木道を進んで行くと、いつの間にかやらの真中へはこびこまれてゐた。そこで菩提樹の並木道が右へ曲ると、根本を貫でかつた白楊の並木道に變つて、そのまま真直ぐに、鐵鑄格子の門に達してをり、その門をとほして、八基のコリント式の圓柱に支へられた、絢爛な彫刻のある將軍邸の豪華な破風が覗いてゐる。どこにもかきこにも油性塗料の匂がぶんぶんとして、すべてに新粧が施され、少しも老朽に委されるところがない。前庭はまるで寄木の床のやうに綺麗に掃き清めてある。チチコフは憤みぶかく馬車を降りると、將軍へ取りつぎを頼んだが、すぐに將軍の書齋へ通された。將軍は先づ威風堂々たる外観によつて相手を驚かした。彼は綿の入つた豪華な紫いろの襦子の寛衣をまといつてゐた。あけすけな眼差、凛々しい顔、白毛まじりの大きな頬髯と口髭、髪を短かく刈込んだ後頭部、縦に裂目の入つた三重襷の、太い、謂ゆる三段項——要するにこれは、かの有名な十二年の役を華やかに飾つた、武者繪の中からでも抜けだして來たやうな將軍の一人であつた。我々凡俗と同様に、このペトリッシュチエフ將軍



は様々の美點と様々の缺點とを兼ね具へてゐた。露西亞人にはよくある例で、この二つが錯綜して見事に彼の人格を形づくつてゐた。いざといふ場合の度量と勇氣と威の知れぬ鷹揚さと縦横の機智、かういふものに、斑氣だの、名譽心だの、自尊心だの、また露西亞人がなすこともなく手をつかねて坐つてゐる場合、何か切羽つまつた事情でも起こらない限り決して免れられぬ、あの卑け小こくさい根性だの、といつたものがつきまとつてゐたのである。彼は勤務上で自分を追ひ越して昇級したやうな連中を毛嫌ひして、散々にさういふ中をこきおろし、辛辣な皮肉を浴びせたものである。中でも最もひどくやつつけられたのは、彼が頭腦に於いても才幹に於いても、遙かに自分より劣つてゐるものと考へてゐたのに、彼を追ひ越して、今はもう二つの縣の總督になつてゐる以前の同僚であつた。それがまた故意とのやうに、どちらも彼の所領のある縣であつたから、結局その相手の支配を受けるやうな立場になつた。その腹癒に彼はことごとくに相手をくさし、あらゆる指令にけちをつけ、その處置や行動をことごとく愚の骨頂だと罵つた。彼には萬事につけて何處か變なところがあつた。自分が熱心に擁護してゐる教育の方面にしてからがさうであつた。また他人の知らないやうなことを知るのが好きで、何か自分の知らないことを知つてゐるやうな人間は毛嫌ひした。つまり自分の智慧をひけらかすことが好きだつたのだ。半ば外國風の教養を受けてゐながら、それでゐて矢張り露西亞式な且那バインを氣取りたがりもするのだ。いふまでもなく、かうした性格の不整ふせいと眼に見えて大きい矛盾とが災ひして、勤務中にも當然いゝんな面白くない問題を惹き起こし、そんなことから遂に役を退くやうなことにもなつたのであるが、すべてを反對派の責任に歸して、自分自身を責めるだけの雅量みやうりやうを缺いてゐた

ことは決して推察に難くない、退職後といへども彼は従前どほりの威風堂々たる態度で押しとほした。燕尾服をつけてゐるやうが、フロックを着てゐるやうが、乃至は寛衣かんいにくるまつてゐるやうが、彼の態度には少しも變りがなかつた。彼には、その音聲からちよつとした動作どうさに至るまで、飽くまで横柄で高飛車なところがあつたから、目下の者は、たとへ敬意は感じないでも、少なくとも畏怖の念に驅られたものである。

チチコフはその敬意と畏怖とを同時に感じた。彼はさも恭まごしげに首を横へちよつと傾げ、茶碗を載せた盆でも捧げるやうな恰好に兩手をサツと擴げて、驚くばかり巧者に上體を屈めながら、「手前は閣下の前に伺候いたしますことを義務と心得ました。戰場に於いて祖國を救はれた方々の武勇に對して、豫て敬意を抱いてをりましたので、親しく閣下の前に伺候いたしますことを義務と心得たのでございます」と、挨拶を述べた。

こんな風に持ちかけられては、將軍もどうやら悪い氣持はしなかつたらしい。彼はひどく機嫌のいい合點々々あはれをしながら、「お近づきになれて大變満足ぢや。さあ、お掛け下され、ときに何處どこにお勤めぢやつたかな？」

「はい、手前の勤務經歷は、」とチチコフは、安樂椅子の端に、それもちよつと斜めに腰をおろして、片手で椅子の腕をつかみながら言つた。「まづ、支金庫から始まりましたので、閣下。それからといふものは、もう、いろいろなところに勤めてまゐりました。上級裁判所にもをりますれば、さる建築委員會にもをりましたし、税關にもをりました。手前の半生はまるでもう、波にもまれる小舟も偶然で



ございましたよ、閣下。手前はもう生まれる前から忍耐といふものに取りまかれ、忍耐といふものに育まれて参つたと申してもよい位で、手前そのものが一個の忍耐の権化でございます。それに手前の生命までもつけ狙ふ敵にどのくらゐ苦杯をなめさせられましたことやら、それはもう、繪にも言葉にも、申さば筆紙のよく盡くすところではないのでございます。さやうな譯で、おひおひ年も傾いてまゐりましたので、せめて餘生を送る安住の地を見つけようとしてゐるのでございます。ちやうど閣下のつい御近所に暫らく逗留いたしてをりますので……」

「ほう、いつたい誰のところか？」

「デンチエート・ニコフのところでございますよ。閣下。」

將軍は顔をしかめた。

「閣下、彼は當然の敬意を拂はなかつたことを非常に後悔してをりますので……」

「何にね？」

「閣下の御勳功に對してでございます。彼は言ふべき言葉も知らないほどでございます。……から申してをります——『なんとかして、せめてお赦しがなかつたら……』と申しまして、『私も祖國を救はれた方々の價値判断を誤まつてゐる譯ではないから。』と、さう申してゐるのでございますよ。」「それはまた異なることを、あの男は一體どうしたといふのぢやね？ わしは別に腹を立ててゐる譯でもないのに。」と、顔色を柔らげて將軍が言つた。「内心わしは、あの男に眞實ほれこんでゐたのぢや。そして今に素晴らしい有用の材になるとも信じてゐたのぢや。」

「閣下、ほんとに御名言でございます。彼はまづたく有用な人物です。非常に文才に恵まれて、なかなか筆も立ちます。」

「しかし書きをるものは、どうも感心できんぢやて——何かつまらん詩のやうなものでも書くのぢやらう？」

「いや、閣下、決してつまらんものではないでございます……極めて有益なものを……何でもその……歴史を書いてゐるのでございますよ、閣下。」

「歴史を？ それや何の歴史ぢやね？」

「はい、歴史で……」と、茲でチチコフはちよつと言葉につまつたが、眼の前に將軍が坐つてゐたためか、それともただ話に勿體をつけようと思つてか、彼はから附け加へた。「將軍の歴史でございますよ、閣下。」

「將軍の？ といふと一體どんな將軍のぢやね？」

「一般の將軍がたでございますよ、閣下、全體をひつくるめまして。つまり、嚴密に申しますれば、我が國の諸將星の傳記でございますなあ。」

チチコフはすつかり混亂して、まごついてしまひ、忌々しさにベツと唾でも吐きかねない氣持になりながら、（ちえつ、なんといふ拙いことを言つたものだ！）と心の中で呟やいた。

「いや、どうもあんたの仰つしやることがよくのみこめんが……。一體それはどういふことになるんだね、或る時代の歴史なのか、それとも一人々々の傳記なのかね？ それにまた、將軍全體を取扱ふ



のか、それとも十二年の役に参戦した將軍だけに限るのかね？」

「さう、それなんでございますよ、閣下、十二年の役に御参戦になつた將軍がたの歴史なんでございます！」彼はかう言ひきつたものの、肚の中では、「何が何だか、殺されたつて分りやしない！」と思つた。

「それなら、どうしてわしのところへやつて來ないのぢやらう？　いろんな面白い材料が幾らでも集められるのに。」

「閣下を怖れて、後込みしてゐるのでございますよ。」

「何を馬鹿な！　ただ、つまらん言葉の行違ひがあつただけでな……。わしは決してそんな人間ぢやないよ。なんなら、わしの方から出かけて行つてもいい。」

「そんなことをおさせするのですか、自分で屹度こちらへ伺ひますよ。」さう言ふとチコフは、ほつとして、すつかり勇氣を取戻し、「やれやれ、よかつた！　將軍の歴史なんて出鱈目をいつたのが、かう旨くゆかうとは！　それも苦しまぎれに、ふと口をすべらしたのだに！」と思つた。

さらさらといふ絹づれの音が書齋へ聞こえて來た。彫刻のついた嵌込み戸棚に似た出入口の胡桃材の扉がさつと開くと、その開いた扉を背にして、一人の女が眞鍮の把手を握つたまま、生々した姿を現はした。たとへ暗がりの部屋へ、後ろから強いランプの光りに照らされた透し繪が不意にパツと現はれたとしても、この女の突然の出現ほどには人の眼を驚かさなかつただらう。明らかに彼女は、將軍に何か言ふつもりで入つて來たのであるが、見知らぬ客の姿を眼にして……。あたかも彼女と共に

太陽の光りが映しこんだやうに、將軍の七難かしい書齋までが朗らかに笑ひだしたやうであつた。チコフには自分の眼前に立つてゐるのが果して何者であるか、咄嗟には見當もつかなかつた。この女はこの國の生まれともはつきり斷言することが難かしかつた。このやうに清楚で氣高い顔立といふものは、ひとり古代の希臘彫刻の中でもなければ、ちよつと見つきりさうになかつた。彼女は輕快で箭のやうにすんなりしてゐたから、誰より遙かに背が高く見えた。が、それは見る者の錯覺であつた。彼女は決して背が高い方ではなかつた。さういふ錯覺の生じるのは、彼女の肢體の各部が互ひにびつたりと非常によく調和してゐたからである。衣裳も軀によく釣合つて、まるで腕利の裁縫師が、彼女に最も似つかはしい衣裳について寄り寄り相談をして仕立てたのではないかと思はれる位であつた。が、これも矢張り見る者の眼の錯覺であつた。彼女は着物もどうやら自分の手で仕立ててゐるらしく、碌に裁ちもしない無地の布地にしくしくと二三ヶ所針を通しただけのものであつたが、それだけでもう見事に襲や折目が出來て立派な衣裳となり、それがしつくり彼女の軀に似合つてゐたから、そのままの姿を繪に描いても、その前へ出てはどんな流行の装ひをこらした令嬢がたも、まるで地鼠か、襪樓市場の商品としか見えないだらう。またその擬ひものの衣裳の襲そのままに、彼女を大理石の像に刻んでも、人はそれを名作の複製と見違へることだらう。ただ一つ、あまりほつそり瘦せてゐるのが玉に瑕であつた。

「うちの駄々つ娘ぢや、一つ會つてやつて下さい！」と、將軍はチコフの方を向いて言つた。「ぢやが、あんたの苗字も名前もまだ承らないやうぢやが。」



「何ひとつ勇名を轟かしたといふでもない人間の名前など、申しあげるにも及ぶまいと存じますが。」と、チチコフは首を横へ傾けながら、謙遜して言った。

「ぢやが、やはり承つておかんでは……。」

「パーウェル・イワーノギッチと申しますので、閣下。」とチチコフは、まるで軍人のやうに巧者に會釋をして、護謨毬のやうに輕快に一歩うしろに飛び退りながら答へた。

「ウーリェカ！」と、娘の方へ振り返りながら將軍が言った。「今な、このパーウェル・イワーノギッチが大へん面白い珍聞をきかせて下さつたところぢやよ。あの隣り村のテンチエートニコフも決してわたしたちが思つてゐたやうな馬鹿者ではないわい。なかなか氣のきいた仕事をしてゐるさうぢや。十二年の役の將軍の歴史を書いてゐるとよ。」

「だつて、あの方を馬鹿だなんて、誰あれも思つてやしませんでしたわ！」と、彼女は一氣に言つてのけた。「ただ、お父さまの信用していらつしやる、あの淺薄で下素なヴィシネボクローモフさんその他には！」

「どうしてあの男を下素だといふのだ？ なるほど少し淺薄なところはあつるがな。」と、將軍が言つた。

「淺薄なだけぢやありませんわ、あれは下等で穢らはしい人ですわ。あんなに兄弟をいぢめたり、妹を家から追ひ出したりするやうな人ですもの、下等な人間にきまつてゐるわ。」

「だが、それはただ人の噂だけぢやよ。」

「根も葉もないことであんな噂が立つもんですか。お父さま、あたしお父さまのやうに御立派な精神と、ほんとに稀な心を持つていらつしやる方が、お父さまとは天と地ほどもかけ離れてゐるやうな人を、それも、悪い人だと御自身でちゃんと御存じの辭に、うちへ出入りさせていらつしやる譯がさつぱり分りませんわ。」

「そうら、ね、この通りぢや。」と、將軍は苦笑しながらチチコフに言つた。「こんな風に始終これと口喧嘩をするのでな。」さう言つてから又、口を尖らせてゐる娘の方へ向き直つて言葉をつづけた。

「そんなことを言つても、お前！ あの男を追ひ出す譯にもいかんぢやないか？」

「何も追ひ出せなんて申しませんわ！ でも、あんなに目をかけてあげることもないでせう？ あんなに可愛がりになることはないぢやありませんか？」

茲でチチコフは、自分も一言口をはさむのが義務だと思つた。

「誰でも、可愛がられたいと希つてゐるのでございますよ、お嬢さま。」と、チチコフは言つた。「どうもそれは仕方がありませんよ。家畜だつて撫でて貰ふことは好きですからね。さあ撫でて下さい！ といはんばかりに、小舎から鼻面を差しだしてゐるぢやありませんか？」

將軍はわつと笑ひだした。「うん、まったく鼻面を差しだしてゐるを——さあ撫でてくれ！ といはんばかりに……はつ、はつ、はつ！ しかもその面だけぢやなく、軀ぢゆうを煤で眞黒にしてゐる辭に、謂ゆる鼓舞ぢふやつをせがみをるのぢや。はつ、はつ、はつ、はつ！」そして將軍の胸體は高笑ひに波らちはじめた。會つてはどつしりした肩章を載せてゐた肩が、今でもそんなものを載つけてゐる



やうに、ブルブルとふるへたものである。

チチコフも矢張り、笑ひ聲をたてたが、將軍に對する敬意から、口をすぼめて、へつ、へつ、へつ、と笑つた。そして彼の胴體も矢張り笑ひのために波うつたけれど、その肩は一度もどつしりした肩章を載せたことがないので、將軍のやうには震へなかつた。

「いや、泥坊をする、公金は盗む、それでゐて人間といふ悪黨は、おまけに褒美までせがみをるのぢや！ どういたしまして、お褒めにでも預からなくちや働けませんとね……。はつ、はつ、はつ、はつ、はつ！」

上品な、愛くるしい娘の顔に惱ましげな感情が現はれた。「まあ、お父さま！ どうしてそんなにお笑ひになれるのか、あたしには譯が分りませんわ！ さういふ破廉恥なことを平氣でするやうな人のことを思ふと、あたし憂鬱になるばかりですわ。白晝公然と詐欺やペテンが行はれてゐながら、さういふ悪人が世間から侮辱の眼をもつて罰せられもしないのを見ると、あたしほんとに自分で自分が分らなくなつてしまひますわ、一時に赫あつとなつて、胸までむかついてきますのよ。あたしさう思ふわ、さう思ふわ……」さう言つて彼女は今にも泣きだしさうになつた。

「だが、どうかさう、わしたちに當りちらさないでおくれ。」と將軍は言つた。「別にそれはわしたちの罪ではないのぢやから。ね、さうぢやらうがな？」と一言チチコフに向つて口を挿んでから、「さあ、わしに接吻して、部屋へ歸るがいい。わしもこれから着換へをして、午餐に出るからな。無論あんたも」と、彼はチチコフの顔をまともに見ながら言つた。「午餐をつきあつて下さるでせうな？」

「ですが、ただ手前ごときが閣下の……。」

「いや、なに、無禮講といふことにしてさ！ お蔭でまだどうにか、食事ぐらゐは御馳走できるからな。ほんの玉茶汁だけぢやけれど。」

チチコフはさつと兩手を泳ぐやうにひろげると同時に、さも感に堪へぬといはんばかりに恭しく首をぐつとさげたので、しばらくの間は部屋の中の調度がつかり彼の視野から姿を消して、ただ自分の穿いてゐる半長靴の爪先だけしか見えなかつた。暫らくさういふ慙慙な姿勢を保つてゐてから、彼がやつと頭を上げた時には、もうウーリニカの姿はそこになかつた。彼女は姿を消してしまつて、その代りに、濃い口髭と頬髭とを生やした大男の従僕が、銀の洗面器と水差とを持つて立つてゐた。

「ひとつ御免を蒙つて、ここで着換へをさせて貰はうかな。」

「いいえ、お着換へは愚か、なんなりと閣下のお好きなことを遊ばして頂きたいものでございます。」そこで將軍は寛衣を片肌ぬぎ、襦袢の袖をたくしあげると、いかにも偉丈夫らしい兩腕を現はして、まるで風のやうに飛沫をとばしたり、ブルブル鼻を鳴らしたりしながら顔を洗ひはじめた。石鹼の水が四方八方へ飛び散つた。

「なるほど好きなんぢやよ、好きなんぢやよ、まつたくおだてて貰ふことが好きなんぢやよ。」さう言ひながら、顎をどしどしと八方から擦りつづけた……。「まあ、さういふ奴は、せいぜい撫でてやるさ！ おだてて貰はにや盗みだつてしをらぬからなあ！ はつ、はつ、はつ、はつ！」

チチコフは何ともいへない好い氣持になつた。と、不意に、天来の思ひつきが彼の胸に湧いた。(さ

my dog



うだ、この將軍はなかなか愉快な人間で、お人好しなんだ。ひとつ話を持ちかけて見るかな！」さう思ふと彼は、ちやうど従僕が洗面器を持つて出て行つたのを機會に、こんな風に切りだした。「閣下！あなたは誰に對してもほんとに御親切で、それに、よくお氣がおつきになりますから、折入つてお願ひがあるのでございますが。」

「どんなことだね？」——茲でチチコフはあたりを見廻した。

「實は、閣下、手前には老耄れの伯父が一人ございまして、その伯父は三百人の農奴を持つてをりますし、二千の……、ところで手前の他には相続人がないのでございます。もう寄る年波で自分では所領の支配も出来ない癖に、さうかといつて、手前に譲らうともしないのでございます。しかも誠に奇妙な理由を楯に取つてゐるのでございます！『わしは、あの甥のことはよく知らないが』と、かう申すのでございますよ。『ひよつとすると、あいつは放蕩者かも知れない。まあ、あいつが確かな人間だといふ證據をわしに見せるがいい。まづ、見事あいつが自分で三百人の農奴の持主になつたら、わしの三百人の農奴も奴にくれてやらう』と、かうなうでございませうよ。」

「ふむ、さうすると何だね、その伯父さんちふのはよくよくの馬鹿なんぢやねー！」

「馬鹿なら馬鹿でも構ひません、それは伯父だけの問題ですからね。ところが、手前の立場でございませうよ、閣下！老人には女中頭が取りいつてをりまして、それがまた子持ときてゐるのでございます。うつつかりしてゐると、何もかもそいつらのものになつてしまひますので。」

「その馬鹿な老人は、よくよく考へて了つたのぢやな。」と、將軍が言つた。「だが、一體どうしたら

御援助が出来るのか、頼とわしには分らんねえ。」さう言ひながら將軍は、怪訝さうにチチコフの顔を眺めた。

「そこで一つ思ひついたことがあるのでございますよ。閣下がもし、御領内で死んだ農奴を残らず、生きてゐるものとして正規の賣買登記を済まして手前にお譲り下さいませうならば、手前はその證書を老人に見せてやります。さうすれば、伯父も遺産を手前に譲つてくれることになると思ひますので。」これを聞くと將軍は、つひぞ人間がそんな聲で笑つたことがあるだらうかと思はれるやうな大聲をあげて笑ひ出した。彼は安樂椅子に腰かけたまま、腹をかかへて笑ひころげた。頭を後ろへ仰反らし、殆んど息もつまるほど笑ひつづけた。家内ぢゆうが吃驚仰天した。従僕があわてて入つて来た。娘が驚いて駆けつけた。

「お父さま、どうなすつたの？」さう言つて彼女は、おどおどしながら、途方に暮れたやうに父親の顔を見つめた。

しかし將軍は長いこと一口も物をいふことが出来なかつた。

「いや、なんでもないよ、お前！氣にかけることぢやないよ。部屋へおかへり。わしたちもすぐ午飯に行くからな。さあ、落着いたがいいよ。はつ、はつ、はつ、はつ！」

それから、數回せいぜい喘ぐと、將軍の哄笑は新規の力をもつてどつと破裂し、玄關から一番奥の部屋にまで響きわたつた。

チチコフはぎごちない氣持であつた。



「伯父さんこそ、いい面の皮ちやて！ その伯父さんはうまいと一杯くはされる譯ぢやな！ はつ、はつ、はつ！ 生きた奴の代りに死人でごまかされるのか！ はつ、はつ！」

（また始めやがつた！）とチチコフは肚の中で思つた。（よつほどのこの先生はくすぐつたがり屋だよ！ 腹の皮がよく裂けないものだ！）

「はつ、はつ、はつ！」と、將軍は笑ひながら語をついだ。「何といふ頼馬ぢや！ 思ひつくにも事をかいて、そんな馬鹿な條件を持ち出すなんて——『まづ空手空拳で三百人の農奴を手に入れる、さうすればおれの三百人もくれてやる』か！ まつたく伯父さんは頼馬ぢやよ！」

「頼馬でございますとも、閣下。」

「いや、それにしても、その老人に死んだ農奴を御馳走しようといふ君の悪企みにも恐れいるぞ！ はつ、はつ、はつ！ 君が伯父さんの前へその賣買證書を差した時の様子が見られるものなら、わしは何を犠牲にしても惜しくないよ。で、その伯父さんといふのは何者だね？ 一體どんな人だね？ よほどの老人かね？」

「もう八十歳からになりますので。」

「それでもまだ働くことが出来て、達者なのかね？ なるほど女中頭と同棲してをるやうではまだよほど達者なんぢやらうな？……」

「何が達者なものですか！ よぼよぼでございますよ、閣下！」

「何といふ馬鹿ぢや！ まつたく馬鹿ぢやらう？」

「馬鹿でございますとも、閣下。」

「それでも、まだ外へ出かけたりするのかね？ 人中へも顔を出すのかね？ 足腰がまだ立つといふのかね？」

「まあ足腰は立ちますが、それも危つかしいものでございます。」

「何といふ馬鹿ぢや！ それでも、達者なんだね？ 齒はまだあるのかね？」

「全部で二本きりでございます、閣下。」

「何といふ頼馬ぢや！ いや、君、腹を立てちやいけないよ……。たとへ君の伯父さんにしても、それあ、よつほどの頼馬ぢやて。」

「頼馬でございますとも、閣下。手前も身内のことでございますから、どうもそんなことを認めるのは辛いのでございますが、何とも致し方がございませんので。」

チチコフは嘘をついたのである。そんなことを認める位は辛くも何ともなかつたのである。況んや彼に伯父などといふものが果してあつたかどうか怪しいのだから尙更である。

「さういふ譯でございますから、閣下、一つ手前にお譲り願へませんでせうか、その……」

「死んだ農奴を譲れつていふのかね？ うん、さういふ思ひつきのためなら、わしは土地も家もついで譲つてあげるよ！ 墓場もろとも持つて行つて貰ふよ！ はつ、はつ、はつ！ その老人こそいい面の皮ぢや！ はつ、はつ、はつ！ 伯父さんめ一杯くはされるんだな！ はつ、はつ、はつ、はつ！」  
そして將軍の哄笑が再び將軍邸の部屋々に反響した。



完成せる『死せる魂』第二部の朗讀をゴリゴリからし  
つき、チチコフの斡旋で將軍とテンチエートニ  
出たく婚約がとのひ、その婚約のも、  
するまでの経緯が、最も精彩  
コフは和解し、ウーリニカとテンチエートの戀も復活して目  
立したことを將軍の親戚ちゆうへ傳へるため、使者となつてチチコフが出發  
富んだ描寫で敘述されてゐたとのことである。(譯者)

### 第三章

「コシカレヨフ大佐がほんとに狂人だとすれば、却つて好都合といふものだ」と、再び廣々とした田野の眞中へ出て、ただ天の穹窿とその一方に浮かんでゐる二つの斷雲の他には何一つ眼を遮るものなくなつた時、チチコフは呟やいた。

「こら、セリファン お前はコシカレヨフ大佐のところへ行く道をよく聞き糺しておいたらうな？」

「まあ、つもつても見て下せえよ、パーウエル・イワーノギッチ、わつしはもう馬車の支度でてんてこ舞ひをしてをりましたもの、そんな暇はありつこねえちやござえませんか。でも、ベトールシカが馭者によく訊いておいたはずでござえますだよ。」

「この馬鹿野郎！ ベトールシカなんか當てにならないと、あれほど言つてあるぢやないか。ベトールシカは間抜けで、木偶の坊だよ。おほかた今だつてあいつは酔つ拂つてゐやがるんだ。」

「なんにも、ハア、別に難かしいことあねえでせう！」と、ベトールシカが上體を半ばねぢまげで流汗をくれながら言つた。「丘を降りたら、草地について行くちふだけのことつて、なんの雜作もねえでがすよ。」

「貴様といふ奴は、焼酎をあふるより他に能はないのか？ ふん、なるほど大した男前だて！ さう



さ、その男振りでは歐羅巴もおつ魂消るといふもんだ！」かう言つてからチチコフは、自分の頸をちよつと撫でて見て考へた。「それにしても、教養のある人士と粗野な下男階級の容貌とでは、ずいぶん差異があるものだ！」

その間に馬車は降りはじめた。またしても草地と、ところどころ白揚の茂みに點綴された廣々とした平地が眼の前に展開した。

乗り心地のよい輕馬車は、輕快な彈機の上で靜かに揺れながら、あるかなきかのだらだら坂を暫らくは用心ぶかく降りつづけたが、やがて草地の中へ出ると、水車小屋の傍を通つたり、ガラガラと輕い音を立てて橋を渡つたり、低地の柔らかい凹凸した土の上でちよつと揺れたりした。が、それから先きは動搖を知らせる土塊ひとつない坦々たる道で！馬車を驅つてゐるとは思へない好い氣持である。

楊柳の茂みや、か細い赤楊や、銀のやうなポプラが、その枝で、馭者臺に乗つてゐるセリファンやベトゥルシカを叩きながら、急速に傍らを飛び過ぎて行く。ベトゥルシカは絶え間なくそれに帽子を取られた。氣の荒い下男はそのたんびに馭者臺から飛びおりて、馬鹿な眞似をする樹木や、そんなものを植ゑておく主人に劍突をくはせるが、その癖、もうこれが最後で、二度とそんなことはないだらうと思つて、帽子を頭にしばりつけるは愚か、手で押へようと思つて、間もなくそれらの樹木に白樺が、それから樅が仲間入りをした。樹々の根本には草叢があつて、紫の菖蒲や黄いろい野生の鬱金香が咲いてゐた。が、不意に四方八方から、鏡が反射するやうな光りが木の枝や切株をと

ほしてキラキラと閃めきたした。樹木がだんだん疎らになり、光りの反射がますます大きくなつた：。と、一行の眼前に湖が現はれた——さしわたし四露里ばかりもある水の原だ。湖ごしの對岸には村があつて、灰色の丸太づくりの百姓家が點在してゐる。水中でわいわいと叫ぶ聲がする。二十人ばかりの人間が、或る者は腰まで、或る者は肩まで、又或る者は頭まで水につかりながら、向ふ岸へ網を曳いてゐるのだ。不圖その時、樁事が持ちあがつた。どうかした勢みに魚と一緒に一人の男が網に絡まつてしまつたのであるが、それは背丈と横幅とが同じ位まるまるした、西瓜か樽にそつくりの男であつた。その男は無我夢中の状態に陥つて、あらんかぎりの聲で絶叫してゐた。「デニスの間抜けめ、それをコジマへ渡すんだ！コジマ、貴様はデニスの手からその端つこを取るんだ！そんなに押しつけちや駄目ぢやないか、のつぼのフォマつ！あの、うびのフォマのゐるところへ行くんのだ！えい、畜生ども！網が破れつちまふといふのに！」この西瓜先生はどうやら自分の身の危険はいつかう氣に懸けてゐないらしい。あれだけ肥滿してゐては溺れようにも溺れる心配はなく、水中へもぐらうとしていくら鰓筋斗をうつたところで、水が彼を水面から下へ沈める筈はなかつたのだ。そればかりか、人間が二人やら背中へ乗つかつたところで、彼は二人を乗つけたまま、まるで頑固な膀胱の浮囊みたいに水面に浮かんでゐて、ただ二人の重みで僅かに呻き聲をたてたり、鼻からブクブク水泡を吹くぐらゐが關の山だらう。だが、彼は網が破れて魚の逃げ出すことを無性に心配してゐたのである。で、定めの人數以外に、岸に立つてゐた數人の男までが、網に繩を掛けて、えんやらえんやら曳いてゐるところであつた。



「乾度あの人が旦那の、コシカレコフ大佐でがすぜ。」と、セリファンが言った。

「どうして？」

「それでも御覽なせえまし、あの人の軀は他の奴らより色が白うがすし、いかにも旦那衆らしく、でつぶりした恰幅でがすからね。」

その間に、網に絡まつた旦那は、もう大分岸へ曳きよせられてゐた。足がやうやく水底にとどきさうだと気がついて、彼はそこに突つ立つたが、それと同時に、堰を降つてくる軽馬車と、それに乗つてゐるチチコフの姿に眼を留めた。

「晝飯はありましたかあい？」と、その旦那は捕まへた魚と一緒に、まるで夏どきレースの手套をはめた淑女のお手々といつた恰好で、軀ちゆうすつかり網につつまれたまま、陸の方へ歩みよりながら、片手で眼の上に小手を翳して日光を遮り、片手で、沐浴からあがつたメデイチのヴィーナスの像よろしく下の方を隠しながら、叫んだ。

「いや、まだです。」さう言ひながらチチコフは、帽子を持ちあげて馬車の上から續けさまにお辭儀をした。

「やあ、そいつは有難いすなあー！」

「どうしてですか？」チチコフは帽子を頭の上へ持ちあげたまま、妙な挨拶だといはんばかりに訊き返した。

「どうしてだか、今御覽に入れますさあ！ちびのフォマ、貴様は網をうつちやつといひ、桶の中から

蝶鮫を持ちあげるんだ！間拔けのクジマ、貴様も行って手を貸してやれ！」

二人の漁師は桶の中から何か怪物の頭を持ちあげた。「どうですか、素晴らしい殿様でがせう！川から御入來になつたんですよ！」とまん丸つこい旦那が喚き立てた。「どうか邸へ行つて下さい！馭者、野菜島を通つてすんすん降りて行くんだよ！こら、のつぼのフォマの間拔けめ、走つて行って圍ひを取りな！あいつが御案内しますよ。わしも後からすぐに……」

脚のひよろ長いフォマは、襦袢一枚きりの姿で馬車の先頭に立つて跣足のまま村を走り抜けたが、村には曳網だの投網だの梁籠だのが、どの家にも懸けてあつた。この百姓はみんな漁師だつたからだ。フォマが野菜島の圍ひを引き倒したので、馬車は野菜島の中を通つて木造のお寺の傍の廣場へと出た。お寺の後ろの少し先きに地主館の屋根が見えてゐた。

（コシカレコフといふ男はちよつと變つてゐるわい）と、チチコフは肚の中で考へた。

「そら、わしもやつて來ましたよ。」さういふ聲が横から聞こえた。チチコフは振り返つた。見れば、もうちやんと着物を著た旦那が自分の傍く乗りつけてゐるのだ。草色の南京木綿のフロックに黄いろいズボンといふ扮装で、頸はネクタイなしの、キュービット式だ！横向きに弾機附馬車に乗つて一人で馬車全體を占領してゐる。チチコフが何か言葉をかけようとしたけれど、その肥大漢はもうそこにゐなかつた。弾機附馬車はいつの間にか再び魚を曳きあげてゐる場所へ引返してゐた。またしても、のつぼのフォマにちびのフォマつ！クジマにデニスつ！などといふ聲が響きわたつた。ところが、チチコフが邸の車寄く馬車を乗りつけると、おつ魂消たことに肥大漢の旦那がもう玄關へ出迎へ



て、彼を抱擁したのである。どうしてそんなに疾く立ちまはれたものか——さつぱり合點が行かなかつた。二人は露西亞の古い習慣に従つて、首を交叉するやうにして三度接吻した。この主人は舊い型の人物であつた。

「手前は貴下に閣下からの御挨拶をお傳へするために参上したのでございます。」と、チチコフが口を切つた。

「えつ、閣下といはれますと？」

「あなたの御親戚に當るアレクサンドル・ドミートリエギツチ將軍からでございますよ。」

「そのアレクサンドル・ドミートリエギツチといふのは、いつたい誰ですか？」

「ベトリッシチェフ將軍ですよ。」とチチコフは、ちよつと怪訝な面持で答へた。

「いつかう存じませんなあ。」と、相手も怪訝さうに言つた。

チチコフはいよいよ驚いてしまつた。

「これはまた異なことを？……それにしても、少なくとも手前はコシカレョフ大佐殿に御意を得てゐることと存じますか？」

「いや、それはお間違ひですよ。あなたがおいでになつたのは彼の家ではなく、手前のところなんです。これはビョートル・ベトロギーツチ・ベトゥーフの邸です！手前がそのベトゥーフで、ビョートル・ベトロギーツチなんです！」と、主人はすかさず答へた。

チチコフはアツと驚いて了つた。「見る、これはどうしたといふんだ？」さう言つて彼はセリフ

ンとベトゥールシカの方へ向きなほつたが、彼等も一人は馭者臺に坐り、一人は馬車の戸口に突つ立つたまま、二人とも矢張りぼかんと口をあけて、眼ばかりまるくしてゐるのであつた。「いつたいどうしたといふんだ、馬鹿者め！コシカレョフ大佐のところへと吩咐かつてをりながら……こちら様はビョートル・ベトロギーツチ・ベトゥーフさんのお邸ぢやないか……」

「いや、お前がたは旨くやつてくれたんだよ！さあ、臺所へ行くがいいよ、ウォツカを一杯御馳走するからな。」と、ビョートル・ベトロギーツチ・ベトゥーフが言つた。「馬を外づして、さつそく下男部屋へ行くんだよ。」

「面目次第もございません。——飛んだ間違ひを仕出かしまして……。」とチチコフは詫言をいつた。

「いや、間違ひぢやありませんよ。先づどんな料理が出るか、それを試してみたら、果して間違ひであつたかどうか、仰つしやつて下さるがよろしい。さあ、どうぞお入り下さい。」さう言つてベトゥーフは、チチコフの腕をとつて奥へ案内した。奥から二人の青年が出て来て彼等を迎へたが、どちらも夏のフロックを著てゐて、まるで柳の鞭のやうに細つそりした青年で、たつぶり一アルシンは父親より背が高かつた。

「わしの俵どもでしてな、どちらも高等中學へやつてありますが、いま休暇で歸つてをりまうので……ニコラーシャ、お前はちよつとお客様のお相手をしてゐてくれ。それからアレクサーシャ、お前はわしについて來な。」さう言ふと主人は姿を消してしまつた。

チチコフはニコラーシャの觀察に没頭した。どうやらこのニコラーシャは、行々はやくぎになる兆



しを十分そなえてゐるやうであつた。彼はチチコフに向つて初手から、縣立の高等中學校などでは勉強する甲斐が少しもないとか、こんな田舎に暮らしてゐてもしやうがないから、自分は兄弟と一緒に彼得堡へ出かけたかと思つてゐるなどと言つた。

（成程なあ）とチチコフは思つた。（結局、喫茶店へ入りびたつたり、並木街をうろつくことを覺えるくらゐが落ちだらうさ……）それから聲に出して、「時に、如何ですか、お父さんの御領地はどんな状態なんですか？」と訊ねた。

「抵當にはいつてゐますよ、」と、再び客間へ姿を現はした親爺自身がそれに答へた。「抵當にね。」（こいつはいけないぞ）とチチコフは思つた。（この調子では、間もなく所領といふものは一つもなくなつてしまふぞ。こゝや急がなくつちやならない。）——「しかし、それは情しいことをなすつたもので、」と彼は、いかにも同情するやうな面持で言つた。「抵當にお入れになるなんて、ちと早計でしたねえ。」

「いや、そんなことはありませんよ。」とペトウーフは平氣で、「その方が利益だといひますからね。みんな競つて抵當に入れますわい。わしも人に負けることもないと思ひましてね。それに始終、田舎にばかりすつこんでゐましたから、今度は一つ莫斯科へ出て暮らしてやらうと思ひますので。件どもも切りにさうしてくれと強請まましてな、やつぱり都會の教育を受けたいといふ肚ですわい。」

（馬鹿だよ、この男も！）とチチコフは心に思ふのだつた。（すつかり身代をうつてまで、子供を極道者に仕立てあげようとしてゐるのだ。結構な領地で、百姓たちも何不足なく暮らしてをれば、この

一家だつて相當にやつてゐることは一目でわかる。ところが、都會へ出て料亭や劇場で磨きをかけた日には、何もかもが煙になつてしまふのだ。田吾作らしく田舎におとなしくしてをればいいのに。）

「あなたが何を考へていらつしやるか、ちやんとわしには分つてゐますよ。」とペトウーフが言つた。「ちやあ何ですか？」とチチコフは、やや狼狽氣味に訊ねた。

「あなたは屹度、（馬鹿な奴だよ、このペトウーフつて奴はほんとに馬鹿だよ。晝飯に招んでおきながら、今だに食事もしやがらん）と思つていらつしやるんでせう。いや、もう直ぐ用意が出来ますよ。比丘尼が髪を結ぶよりも早く用意してお目にかけますよ。」

「お父さん！ ペラトン・ミハールイッチがやつて來ましたよ！」と、窓のそとを眺めながらアレクサーシャが言つた。

「さうだ、栗毛の馬に乗つて！」と、窓枠へ軀を屈めながらニコラーシャが相槌をうつた。「何處へ、何處へ？」と窓へ近寄りながらペトウーフが喚いた。

「ブラトン・ミハールイロギツチつて誰方なんですか？」とチチコフは、アレクサーシャに訊ねた。「手前どもの隣人としてな、ブラトン・ミハールイロギツチ・ブラトローフといつて、實に上品な素晴らしい人物ですよ。」と、ペトウーフが引取つて答へた。

その間に當のブラトローフが部屋へ入つて來た、成程すらりとした美男子で、ピカピカと光る明るい亞麻色の頭髮を房々と波打たせてゐた。その後ろから、眞鍮の頸圈をガラヤガチャ言はせながら、ヤルプといふ名前の、いかつい面構への猛犬がついて入つて來た。



「晝飯は済んだかね？」と、主人が訊いた。

「済みましたよ。」

「ぢやあ、いつたい何のためにやつて来たんだね、わしを嘲笑ひにでもやつて来たといふのかね？ 晝飯を済まして来た人が、わしに何の用がありますい？」

客は苦笑ひをして、「ぢやあ、僕が何にも食つてゐないことを白状してお慰みにしようか。なにしろ食欲がちつともないんでね」と言つた。

「ところが、大變な獲物があつてね、是非あなたにも見せたかつたねえ！ 素敵もない蝶鮫の御入來でさ！ それに見事な鮓に見事な鯉のお供つて譯で！」

「聞いただけでもうんざりしますよ。どうしてあなたはいつともさう陽氣でゐられるんだね？」

「何でまた、ふさいでなきやならん譯がありますね？ 滅相な！」と主人が言つた。

「ふさいでなきやならん譯つて？——それあ、退屈だからさ。」

「そもそも少食すぎるからだよ、それだけの話さ。まあ、せいせいうんと食つてみるんだねえ。退屈するなんて、それあ最近に發明されたことで、以前は誰も退屈なんてする者はなかつたからね。」

「その御託宜はもう澤山ですよ！ まるで退屈なんて一度もしたことがないといつた口振りですねえ？」

「まつたくだもの！ 退屈なんてした憶えもなければ、第一そんな暇がありませんからね。朝まづ眼を醒ますと——さつそく料理番がやつて來ませう、晝飯の差圖をしなきやならない。やれお茶たの、

やれ執事たの、やれ漁に行くたので、忽ち晝飯になつてしまふ。晝飯がすんで、やれ一と煎と思ふ暇

もなく、また料理番を呼んで、夕飯の差圖をしなきやなりません。そこへまた料理番がやつて來る——

あすの晝飯の差圖といつた鹽梅でな……。退屈などしてゐる暇がいつたい何處にありますい？」

この會話のやりとりの間ちゆう、チチコフはしげしげと客の様子を眺めながら、相手の稀に見る美貌や、きりりとした繪のやうな姿や、また汚濁の跡をとどめぬ青春の瑞々しさや、吹出物ひとつない純潔無垢な顔の美しさに驚かされた。情熱や悲哀はもとより、不安や動搖に似たやうなものすら、この男の處女のやうな顔に一抹の暗翳を投げることも、一筋の皺を刻むことも遠慮してゐた、さればとて、それがために生氣が躍動してゐる譯でもなかつた。時たま皮肉な微笑に輝くことはあつても、その顔は妙に始終ねむさうである。

「横合ひから甚だ失禮ですが、」と、チチコフが口を出した。「お見かけしたところ、あなたのやうな御立派な方がくさくさしていらつしやるとは、どうも手前にも腑に落ちませんなあ。尤も金子が自由にならないとか、悪い敵でもあるといふのなら別ですがね、世間にはまます人の生命まで狙ふ奴がありますから……。」

「それあもう、」と、美男の客がそれを遮つた。「生活に變化さへ生じるなら、時には何か心配ごとでもあつてくれた方がいいと思ひますよ。せめて腹でも立てさせてくれる人があつたらと思ふんですがね、それさへないんです。いやもう退屈でくさるばかりですよ。」

「それでは、御所領の土地でも十分おありにならないとか、農奴の数が少ないとでも？」



「いや、どういたしまして。私は兄と二人で一萬デシャチンからの土地と、千人以上の農奴を持つてゐますよ。」

「をかしいですねえ、手前にはどうも會得めませんよ。では、もしや凶作とか悪疫にでも見舞はれなすつたんで？ 男の百姓がうんと斃れたとでも仰つしやるんで？」

「ところがその正反對で、萬事がすこぶる好都合に行つてをりますし、それに私の兄は素晴らしい手腕の領主でしてね。」

「それでゐて、くさくさしてをられるなんて！ 手前にはとんと壯へ入りませんねえ。」さう言つて、チチコフは肩をすくめた。

「さあ、ではそのふさぎの蟲を一つ追つばらつてやりませうや。」と主人が言つた。「アレクサーシヤ、大急ぎで臺所へ駈けて行つて、料理番に直ぐ肉饅頭を出すやうに言ひなさい。それから、のらくらのエメリヤンと泥坊のアントーシカは何處にゐるんだ？ どうして前菜を出さないのだ？」

ところが、その時バツと扉が開いた。のらくらのエメリヤンと泥坊のアントーシカとがナブキンを持つて現はれると、忽ち食卓の用意が出来て、先づ盆に載せた色とりどりの浸酒の燻が六本出た。その盆や玻璃燻のまはりに、見る見る食欲をそそるいろんな摘みもの皿がまるで頸節のやうに並べられた。召使たちは次ぎ次ぎと何か蓋物に入つた料理を運びながら、きびきびと立ちまはつた。その蓋物の中からは沸々とバクのたぎる音が聞こえてゐた。のらくらのエメリヤンと泥坊のアントーシカとは、なかなかどうして、痺いところへ手がとどくやうに立ち働いた。のらくらだの泥坊だのといふ紳

名は、單に彼等を鼓舞激動するために附けられたものである。主人も決して口汚く罵ることの好きな人間ではなく、根は至つて好人物であつた。が、露助といふやつは、どうもかういふピリツと薬味のきいた言葉を使はずには濟まされないので。それは胃の腑を刺戟するための一杯のウオツカと同様に、露西亞人には必要なのだ。どう仕様があらう？ さういふ性分で、何によらずあつさりしたことが嫌ひなのだから。

前菜につづいて午餐になつた。ここへ來ると好人物の主人が、すつかり暴君に變つてしまつた。誰かの皿に肉が一切れしかないと見てとると、「連理の枝、比翼の鳥といつてな、人でも鳥でも配偶なしでは世渡りが出来ませんよ」と言つて、彼はすぐさま別の肉片を取つて相手の皿へ載せた。相手の皿に二切れあれば、「二つといふ數はよくありませんよ！ 神様だつて三位一體がお好きでせう。」さう言ひながら、すかさず三切れめを轉がしこむ。お客が三切れ食べをはると、「何處に三つ輪の荷馬車といふのがありますか？ 誰が三隅の小屋なんてものを建てますかね？」と言ふ。四切れの場合にもちやんとそれに適した洒落があり、五切れの場合にも同様である。チチコフは大きな切れをかれこれ十二ばかり平らげてから、「へうん、主人もまさかこれ以上しつこいことば言はないだらう」と思つた。ところが案に相違して、主人は今度は何も言はずに、串焼きにした犢の鞍下の部分を、腎臓と一緒にドサリとばかり彼の皿へ盛りこんだもので、そのまた犢が並大抵の代物ではないのだ！ 「こいつは二年越し牛乳で育てましてね、」と主人が言つた。「まるで息子のやうに面倒を見たものですぜー！」



「もうとてもいただかれませんか。」とチチコフが言った。

「まあ一口やつてみてから、『とても食へない』と仰つしやるがよろしい。」

「もうお腹へ入りませんよ、入れる餘地がありませんもの。」

「ね、諺にもいひませう——教會が一杯で席がなくても、市長がやつて来れば席が見つかるつてね。それも、林檎一つ落つことす隙もない雑沓の中にですぜ。まあ一口やつて御覽なさい——この一切れがつまりその市長なんですよ。」

チチコフは食べて見た——成程そいつは市長と同じで、とても入りつこないと思つたのに、胃の腑の中にはちやんと空席が見つかつたものだ。

「ふん、こんな人間が彼得堡だの莫斯科だのへ行つたらどうなるだらう？　こんな御馳走せめをしてゐた日には、三年と経たないうちに元も子もすつてしまふだらうに！」つまり、かう思つたチチコフは、現在すでにさうなつてゐて、こんな御馳走せめなどはしなくても、三年どころか三月で何もかもがファイになりかけてゐることを知らなかつたのである。

主人は引つ切りなしに、次ぎから次ぎへと酒を注いだ。客があげない杯は、アレクサーシャとニコラーシャに飲みほさせたが、二人はぐいぐいと平氣で杯を重ねたもので、彼等が都會へ着いた曉に、人知の如何なる部面へ注意を向けるかといふことは今からもう明白であつた。客たちはそんな調子には行かなかつた。彼等はえんやらやつとの思ひで露臺へ軀を運び、辛うじて安樂椅子に腰をおろした始末である。主人は座褥の大きさが四人分もあるやうな専用の大安樂椅子に腰をおろすなり、すぐに

ぐつすり眠つてしまつた。彼のでつぶり肥つた五體は忽ち鍛冶屋の轆たぐひに轉化して、たらしなく開いた口と大きな鼻の孔からは、どんな新進作家の頭にもちよつとやそつとには浮かびさうにないやうなおそろしい音が漏れはじめた。太鼓のやうな音もすれば、フリートのやうな響きも混り、さうかと思ふと妙に斷續的な、犬の遠吠のやうな唸り聲も聞こえた。

「どうです、えらい嘶子方ちやありませんか！」と、ブラトノフが言つた。チチコフも笑ひ出した。

「無論、あんな風は無茶な大食をしてをれば、何もくさくさとふさぎの蟲などに取つつかれる心配はない筈ですよ！　すぐに寢込んでしまふのですもの。ね、さうじやありませんか？」

「さうですねえ。しかしですよ、こんなことを申しては甚だ失禮ですけど、どうして又さうくさくさなすつていらつしやるのか、頓とのみこめませんよ。退屈をまぎらす方法は幾らでもあるちやありませんか。」

「ちやあ、どんな方法がありますか？」

「お若い方には何だつて出来るちやありませんか！　ダンスをするとか、何か器樂をやつて見るとか……それとも、結婚をなさるのもいいちやありませんか。」

「誰と結婚するのです？」

「では、この界限には年頃の綺麗で金持の娘さんがないとても仰つしやるのですか？」

「ええ、ありませんねえ。」



「ぢやあ、他所がお捜しになつたらいいでせう、あちこちへお出かけになつて。」かう言ひかけた時、チチコフの頭の中にフト素晴らしい考へが閃めいた。「さうさう、素晴らしい方法がありますよ！」さう言つて彼は、プラトノフの顔をじつと見つめた。

「どんな方法なんです？」

「旅行をするんですよ。」

「旅行といつて、いつたい何處へ行くんですか？」

「もしお暇でしたら、一つ私と一緒に出かけになりませんか？」かう言つてチチコフは、プラトノフを見やりながら肚の中では、「こいつは旨いことになるぞ。さうすれば旅費は割勘にしても、馬車の修繕費はそつくりこの男に負擔せることが出来るからなあ」と考へた。

「で、あなたは何處へいらつしやるのですか？」

「さしあたり、自分の用事といふよりは、他人の用事で旅をしてゐるのです。つまり私の極く近しい友人で、まあ恩人ともいへるペトリリッシュチェフ將軍に頼まれて、親戚まはりをしてゐるのです。無論、その親戚まはりには親戚まはりとして、一つには、いはば自分自身のためもありましてね。それと申しますのも、廣く世間の様子や、人の世の浮き沈みを見て歩くのは、誰が何と言つても、ちやうど生きた書物と同じで、まあ第二の學問なんですからねえ。」かう言ひ乍らチチコフは、同時に心の中では、「實際、こいつは旨く行きさうだぞ。旅費を全部この男に負擔せたいいいし、おまけにこの男の馬で出かけることにして、おれの馬は叔さんの村に當分あづけておくことだつて出来るん

だから」と思案をめぐらしてゐた。

（少しくらゐ旅に出て、い管はないさ！）と、プラトノフはプラトノフで心に思つた。（家にゐても別にすることがあるぢやなし、さうでなくても家政は萬事兄貴が引受けてゐるんだもの。して見れば、何ひとつ差支への起こる心配はない。ほんたうに旅に出て悪い譯はないさ！）——では、如何でせう、と、彼は聲を出して訊ねた。「僕の兄のところは二日はかり逗留して頂けないでせうか？でない、兄が僕を出してくれないかも知れませんが。」

「それもあり、願つてもない仕合せで、二日どころか、三日でも御厄介になりませうよ。」

「ぢやあ、話はきまりました！ 御一緒に出かけることにませう！」と、プラトノフは元氣づいて言つた。

二人は約束の手打ちをした。「出かけませう！」

「何處へ！ 何處へ行くんです？」と、主人が眼を醒まして、きよろきよろと二人を眺めながら喚き出した。「いや、いけませんよ、御兩人！ 馬車の輪はもう外づさせておきましたし、あなたの馬は、プラトン・ミハールイッチ、十五露里も先きへ追ひやつてしまつてありますよ。いや、あなた方は今晩は泊つて、あす早目に晝飯を食つてから、何處へでも勝手に出かけなさるがいいんで。」

ペトラーフにかかつては手も足も出なかつた。結局、否認なしに居残らされてしまつた。その代り二人は素晴らしい春の夕べを享樂することが出来た。主人は客のために川遊びを催した。十二人の漕手が二十四艇の櫂をそろへて、唄をうたひながら、鏡のやうな滑らかな湖面に舟を進めた。舟は、水



から、兩岸の急勾配をなした、見渡すかぎり際限もない川へ入つて、岸から岸へ横に張り渡された、魚漁のための綱を絶えずくぐつた。流れは小波ひとつ立てず、ただ聲もなく次ぎから次ぎへと景色が移りかはり、相次いで現はれる木立はさまざま樹木のたたずまひで一行の眼を楽しませた。漕手たちが二十四艇の櫂を一齊につかんで、不意にそれをさつと上へ持ちあげると、端艇はひとり、微動だにせぬ鏡のやうな水面を、するすると軽快な鳥のやうにすべつて行く。舵子から三番目の、肩幅のひろい音頭取りの若者が、きれいに澄んだ朗々たる聲を張りあげて、まるで小夜鳴鳥の咽喉を思はせるやうな節まはして唄の冒頭の一節をうたふと、五人がそれにつれて合唱し、六人がそのあとをつけたり——そして露西亞そのもののやうに涯しない唄は嬋々としてあたりにはひろがった。ベトウーフもぞくぞくしながら、合唱隊の聲が弱ると、それに力を添へるやうに胸間聲を張りあげ、チチコフもまた自分が露西亞人であることを今更のやうに痛感した。が、プラトーフだけは、「こんな物悲しい唄のどことが好いのだらう？　こんなものを聞いてみると心がますます憂鬱になるぢやないか」と思つた。

一行が歸路についたのはもう黄昏時であつた。もう空の色も映らぬ水面を盲ら滅法に懼がたいた。闇の中から一行は、ここかしこに篝火の焼えてゐる岸へ着いた。そこでは漁師たちがビチビチした鱸を料理して、大五徳にかけた鍋で魚汁を煮てゐた。何もかもがもう皆家へ歸つてゐた。村の家畜や家禽はもう疾づくに追ひやられて、そのために立つた埃ももう鎮まつてゐた。それを追ひ立てた牧夫たちは、いつも貰ふ一壺の牛乳を待ちながら、魚汁の御相伴にあづからうものと、門際にじつと

立つてゐた。薄暮の中に人々の立ち騒ぐ微かな物音と、どこか他所の村から聞こえてくる犬の啼き聲がした。月が昇つて、暗くなりかけた四邊を照らしはじめた。と、隈なく萬象が光りを浴びた。素晴らしい畫面である！　しかし、それを嘆賞する者は誰ひとりなかつた。かういふ時にはいつも先頭に立つて、互ひに追ひつ追はれつ慥悍な駒を驅るニコラーシャとアレクサーシャも、今は、都から來た士官候補生に吹きこまれた莫斯科や、喫茶店や、劇場のことばかり考へてゐた。また彼等の父はどうして客に鱈腹くはせたものかと案をねつてゐた。プラトーフは欠伸ばかりしてゐた。結局チチコフが一番昂奮してゐた。「ええ、ほんとに！　何時かはおれもこんな村を手に入れたいものだ！」そして美しい細君や幼いチチコフ二世どもの姿がまさまさと臉に浮かぶのであつた。

が、夕飯にも亦一同は鱈腹つめこんだ。パーウェル・イワーノギッチは就寢のために案内された部屋へ入ると、寢床の上へごろりと横になつて、ちよつとお腹をさすりながら、「まるでこりや太鼓みたいだ！」と、呟やいた。「もうどんな市長だつてはいれつこないぞ。」と、ところで、どういふ廻りあはせか、彼が案内された部屋は主人の書齋と壁一重となりで、その壁がまた薄つべらなため、隣室の話聲が一々手に取るやうに聞こえた。主人は料理番を呼んで、あすの朝食が早いことに事よせて、純然たる書齋の料理を言ひつけてゐるのであつたが、その素敵もない註文といつたら！　これを聞いたら死人でも食欲を起ささうな、素晴らしいものであつた。

「それから魚肉饅頭の四角いやつを拵らへてくれ。」と主人は、舌舐めずりするやうな音をさせて、スーつと息を吸ひ乍ら言つた。「一つの角へは蝶鮫の頬と軟骨を入れてくれ。もう一つの角へは蕎麥



粥と、それから葱をまぜた草だの、甘い牛乳だの、脳髓だの、それからまだ……それら、いふんなものがあるだらう。……それでな、いいかい、片側は狐色に焦がして、反対側はうつすりと軽く焼くんだぞ。それから、底へはな……。全體をじつくりと、中までよく焼いて、つまり、その何たよ、全體がふんはりとして——ぼろぼろとぼれるやうな風ではなく、口へ入れると音もなく、淡雪みたいに溶けてしまふといつた鹽梅にだよ。——ベトツーフはさう言ひながら、舌を鳴らして、唇を甜めするらしい様子だつた。

「えい、畜生！ さつぱり寝られやしない。」さう呟やいてチチコフは、何も聞こえないやうにと頭からすつぽり上掛けをひつ被つた。が、やはり上掛けを通して次ぎのやうな言葉が聞こえて来た。

「それから、蝶鮫のぐるりには甜菜を花形に切つたのや、しらすや、椎茸や、それから、それ、蕪だの、人參だの、豌豆だの、まあ、さういつた風ないろんなものでな、出来るだけ澤山にあしらひをつけるんだぞ。それから豚の胃囊は、よくふやけるやうに今から氷を入れておくんだぞ。

まだその他にベトツーフはいろんな料理を言ひつけた。が、ただ「うつすりと焦げ色をつけるんだぞ、狐色に焼くんぞ、よく蒸すんだぞ！」などといふ聲が聞こえるだけであつた。なんでも七面鳥をどうのかうのと言つてゐる聲を聞きながら、やうやくチチコフは眠りに落ちた。

翌る日も客はまた、しこたま詰めこまれたものだから、プラトノフはとて馬になど乗つて歸られない始末であつた。で彼の乗馬は、ベトツーフの家の馬丁をつけて送りかへされた。二人は輕馬車に乗りこんだ。例の顔のいかつい犬も氣願さうに馬車の後について歩きたした。——こいつも矢張り食ひたきたのである。

「何にしてもこれはあんまりです。」と、邸の外へ出た時チチコフが言つた。

「第一、あの男は退屈ひとつしないのだから、まつたく癪にさりますよ！」

「ふん、おれたつて君みたいに年に七萬留からの収入があつたら」と、チチコフは心に思つた。(退屈なんて素振りにだつて見せやしないぞ。例の徵稅代辦人のムラーゾフつて男はどうだい——口でいふのは容易いものの、一千萬といへば……どえらい身代だからなあ！)

「どうでせう、ちよつと寄り道をしてもお差支へないでせうか？ 姉と姉婿に暇乞ひをして行きたいと思ふんですが。」

「喜んでお供いたしますよ。」とチチコフが答へた。

「その義兄は、まづこの界限きつての地主なんです。義兄はね、あなた、七八年前までは二萬留しか収入のなかつた所領から、今では二十萬留からの収入をあげてゐるんですからね。」

「成程、それあ確かに珍らしい御人物ですねえ！ そんな方とお近附になるのは至極愉快ですよ。どうしてどうして！ へはばもう……。時にその方の御苗字は何と仰つしやるんですか？」

「コスタンジ ヨーグロといひます。」

「御名前と御父稱も、伺つておきたいのですが。」

「コスタンチン・フロードロギッチといふんですよ。」

「コスタンチン・フロードロギッチ・コスタンジ ヨーグロさんですね。その方とお近附になるのは



非常に愉快です。さういふ方を知るとは教訓になりますからね。」

ブラトノフはセリファンの介添役を引受けた。それもその筈で、この先生は辛うじて馭者臺にしがみついてゐる有様だつたからである。ペトゥルシカに至つては、二度も眞逆様に馬車からころげ落ちたので、到頭しまひには、荒縄で馭者臺に縛りつけておかなければならぬ爲體であつた。「何といふ畜生だらう！」チチコフはたださう繰り返すより他はなかつた。

「ね、御覽なさい、ここからが義兄の地所なんです。」とブラトノフが言つた。「がらりと様子が違ふでせう。」

成程さういへば、原一面に實生の苗木が植わつてゐて、すくすくとまるで矢のやうに揃つてゐる。その次ぎには前のより丈の高い、やはり若木の林がつづき、その次ぎにはまた更に生長した植林がつづくといふ鹽梅に、だんだん丈が高くなつてゆく。次ぎにはまた一面に苗木に蔽はれた原つばが現はれて、再び前と同じやうに、若木の林となり、成木の林となつて行くのである。一行は城壁でもくぐるやうに、さういふ林を三度くぐり抜けた。これは皆、ざつと八年から十年ぐらゐの間に生長したものですが、他の人のやり方なら二十年かかつてこれだけにはなりますまいよ。」と、ブラトノフが言つた。

「こんな風にするのはどうしてですか？」

「それは義兄に訊いて下さい。あれは一角の地質學者ですからね、理由のないことは決していたしませんよ。土壤のことに精通してゐるだけでなく、何の隣りへは何をおかねばならないとか、どんな

穀類の傍へはどんな木を植ゑなければならぬといふやうなことをちやんと心得てゐるので。義兄のところでは何によらず同時に三つも四つもの働きをしてゐるのですよ。森にしても同じで、森が森として役に立つ外に、それがあたりの畠に如何ほどの濕氣を與へるとか、落葉が如何ほどの肥料になるとか、また如何ほどの蔭を提供するといつた具合に役立つのです……。近隣が早魃に苦しむやうな場合にも、義兄のところでは一向そんなことには困りませんし、隣り近所が不作の場合にも、義兄のところでは一向そんな心配もないのです。残念ながら、僕はどうもさういふことはよく知りませんので、十分にお話することが出来ませんが、義兄はいろんな事を知つてゐるのですよ……。魔法使だなんて言はれてゐましてね。實にいろいろさまさまなやり方をしてゐますよ……。が、しかし僕には矢張り退屈ですなあ……。

「いや、こいつはまったく驚くべき人物だぞ」と、チチコフは思つた。「それにしても、この若造は一向うはつづらのことしか知らないで、詳しい話の聴けないのは甚だ残念だ。」

つひに村が現はれた。まるで何處かの町のやうに、三つの丘に無数の百姓小屋が散在して、その各々の丘の頂きには一つづつ教會堂がたつてをり、村は到るところ、巨大な禾堆や穀塚で區切られてゐた。(なるほど、)とチチコフは思つた。(これは、確かにピカーの領主が住んでゐる村だ。)百姓小屋は皆がつしりしてゐるし、往還はよく踏みならされてをり、荷馬軍が置いてあるのを見ても、いかにも丈夫に出来てゐて、まだ眞新らしく、出つくはす百姓の顔附も何となく利口さうなら、牛や羊も粒選りの種類で、百姓に飼はれてゐる豚までが貴族ぶつた面構へをしてゐる。して見れば、確かにこの



村の百姓どもは、唄の文句にもあるとほり、(鋤鉄で銀を掻きあつめてゐる)のに違ひない。ここには別に、いろんな趣向を凝らした英吉利風の庭園だの芝生だのといふものはなかつたけれど、昔ながらに、納屋や作事場がずらりと列をなして地主館の間際までつづいてゐたから、領主は周囲の出来事を何から何まで手に取るやうに見ることが出来た。邸の高い屋の棟には高々と望樓が聳えてゐたが、それは何も見えや飾りではなく、遠くの野良で働く労働者を見張るために設けられたものである。一行を玄關へ出迎へた召使たちにしても、酔拂ひのベトウールシカなどは似ても似つかぬキビキビした連中ばかりで、燕尾服などはつけないで、紺のホームスパンの哥薩克上衣を着てゐた。

この家の女主人が自から玄關まで駆け出して來た。彼女は、牛乳に血を混ぜたやうに瑞々しく、安息日のやうに美しく、弟のブラトノフと瓜二つであつたが、但し弟のやうに倦怠した様がなく、饒舌で快活な點だけが違つてゐた。

「あら、いらつしやい！ 本當によく來て下さつたのねえ。コンスタンチンは今ゐないのよ。でも、ちき歸つて來ますわ。」

「何處へ行つたんです？」

「何か仲買人たちと村で用事があるんですつて。と彼女は、二人を部屋へ案内しながら喋りつづけた。

チチコフは好奇の眼を光らせて、二十萬留の年收をあげるといふこの非凡な人物の住ひをじろじろ眺めながら、あたかも貝の抜け殻を見て、中に残つてゐる痕跡から、その中にゐた牡蠣や蝸牛の大き

さを推定するやうに、この住ひの様子から主人の氣風なり持前を探索しようと思つたのである。が、如何なる推定をも下すことは出来なかつた。部屋といふ部屋がみな質素で、寧ろがらんとした様子を見せてをり、壁畫もなければ、油繪もなく、ブロンズや花はもとより、陶器を載せた飾り棚一つなければ、書物一冊見あたらなかつた。要するに、この家の主人の主要や生活が、四つの壁にかこまれた室内では全く行はれず、常に彼は田野にあつて、いろんな計畫にしても、煖爐の前でボカボカと火にあたりながら、のびのびと安樂椅子に凭りかかつて、奢侈逸樂のあひだに前以つて立案されるのではなく、仕事に携はつてゐる現場で頭に浮かび、浮かんた現場ですぐ實行に移されるのだといふことが明らかであつた。ただ一つ室内でチチコフの眼についたのは、女手のよく行きとどいてゐることで、卓子や椅子に清潔な菩提樹の板をならべて、その上にいろんな花の花瓣がのせて乾かしてある……。「姉さん、何だつてこんな芥をならべておくんです？」とブラトノフが言つた。

「芥つてことがありますか！」と、女主人が言つた。「これは熱病に一番よく效く薬ですよ。去年も、うちではこれを使つて熱病にかかつた百姓をみんな癒してやりましたよ。こちらのは浸酒の材料ですし、こちらのはジャムにするんです。あなたたちはね、ふうんジャムかい、ふうん鹽漬かいつて、いつもせせら笑つてる癖に、食べる段になると、こりや美味しいつて褒めるんですよ。」

ブラトノフはピアノの傍へ近寄つて樂譜を一つ二つはぐつた。

「なあんだ！ おそろしく古臭いものはかりぢやないか！」と、彼は言つた。「姉さんは、これでよくも羞かしくありませんねえ？」



「まあ、勘忍して頂戴、でもあたし、もうずいぶん前から音楽などに憂身をやつしてゐる暇がないんですもの。もう八つにもなる娘があつて、いろいろ教へなきやならないでせう。暢氣に音楽などやつてゐる暇をつくるには、あの娘を外國人の家庭教師にまかせなきやなりませんからね。いいえ、勘忍して頂戴、あたし、そんなことをする氣にはなれませんわ。」

「姉さんもずいぶん世帯じみてしまひましたねえ！」さう言つて弟は窓際へ近寄つた。「あつ、歸つて來ましたよ！ 義兄さんが、今そこへやつて來ますよ！」と、ブラトリーノフが叫んだ。

チチコフも急いで窓際へ近寄つた。駱駝のフロックコートを着た、四十がらみの、顔の淺黒い、きびきびした男が玄關へ近づいて來るところだつた。形振はいつかう構はない性質らしい。天鵝絨まがひの縁無帽を被つてゐる。その男を中にはさんで、二人の下層階級の男が帽子を手にながら、左右に附添つてやつて來る。歩きながら二人は、主人と何事かしきりに折衝してゐる様子である。一人の方はただの百姓で、もう一人の方はどうやら外來のインチキ仲買人といつた風體で、紺いろの短外套を着てゐる。三人は玄關の前に立ちどまつたので、彼等の話が部屋の中まではつきり聞こえた。だつた。

「お前たちはかうしたらいいよ、まづお前たちの主人から自由を買ふのだ。その金子はわしが立替へておいてもいいよ。後でそれだけの仕事をして、返済してもらへばいいからね。」

「いんにや、コンスタンチン・フォードロギッチさま、今更、身受けなんどしても、つまりましねえだよ。どりか、このまま引取つて下せえまし。旦那にさへついてゐりやあ、いんな智慧分別がつきますたであら。もう、旦那みてえに賢い人は、世界ぢゆう探したつて見つかりつとありましねえだも

の。何せわし共は、今ぢや自分で自分を支へることもてんで出來ねえぢふ、情けねえ身の上でがしてな。當節ぢやあ、酒屋の野郎にしてからが、えらくきつい浸酒を賣り出しをつて、ちよつくら一杯ひっかけようものなら、あとで水の五升も飲まにやなんねえくれえ、腹が焼けただれつちまひますだもの、正氣にけえつた時分には、もう有金をすつかりはたいてをるちふ始末でがすよ。何せ、よくねえ誘惑がずらに殖えましたでな。これあ、何でがすよ、悪魔めがこの世をひつ掻きまはしてゐるのでがすよ、てつきり！ 何によらず、ただもう、百姓を迷はしたり誑らかしたりするやうなものばかりで、やれ煙草だ、やれ何だと、いろんなものが矢鱈に殖えましてな……。どうも仕様がねえでがすよ、コンスタンチン・フォードロギッチさま！ 人間の淺ましさに、我慢をするちふことが出來まねえんで。」

「いや、ところがそこなんだよ。なかなかどうして、わしのところにしてからが、やつぱり窮屈なものだよ。それあ成程、初めから牛も馬も、何もかもまとめて一度に宛がふには宛がふけれど、その代りわしは百姓どもに、他所では見られぬやうな嚴格なきまりを要求するのだ。わしのところで働くといふことが第一の掟で、それがわしのための仕事だらうと、百姓自身のための仕事だらうとを問はず、わしは何人にもごろごろ愈けてゐることを許さないのだ。わし自身も去勢牛のやうに働く、だから、うちの百姓どももせつせと働いてゐるよ。抑よくだらない考へが頭に浮かぶのも、せつせと働かないからだつてことを、わしは經驗でよく知つてゐる。だからまあ、お前たちも、集會でも開いて、よく考へて、みんなで相談してみることだよ。」



「ええ、わしどもはもう、これについちやあ、とつくり相談したのでがすよ。コンスタンチン・フ  
ードロギッチさま。年寄どもの意見にしたらからがかうですが、『かれこれ言ふがものはねえだよ！  
お前さまのこのお百姓はハアみんな金持ちや、それもその筈で、お坊さままでがみんなお慈悲ぶか  
い人ですがすもの。それに引きかへ、おらがの村ぢやあ、なけなしの坊さままで取られてしまつて、葬  
ひ一つ出せねえ始末ぢや』とね。」

「それにしても。一應かへつて談合してみた方がいいよ。」

「ぢや、さうしますべえ。」

「ところで、そこんところでございますが、コンスタンチン・フードロギッチさま、一つ御不承を  
願つて……少し値段を引いて頂く譯にはまゐりませんでせうか。」と、反対側に従つてゐた、紺の  
短外套を着た外來の仲買人が言つた。

「わしは先刻も言つたとほり、さういふすつたもんだの駆引が大嫌ひなんだ。ちやうど借金の返済期  
日に迫られて相手が困つてゐるところをつけこんで、お前たちが襲撃するやうな地主とは少々わけが  
違ふよ。お前たちの手はちやんと知つてゐるぞ。誰が、いつ、どこへ、金子を拂ふことになつてゐる  
かといふ、目録までお前たちは持つてゐるのだ。だから、いつかう不思議でも何でもないさ。そんな  
連中の弱身につけこめば、半値にだつて値切り倒すことが出来る譯だからなあ。だがわしには、お前  
の金子なんぞどうだつていいんだ。品物は二年でも三年でもねかせておいたつて構はないよ。別に抵  
當銀行へ利子を拂はねばならんやうな借金もないからね。」

「それあもう仰つしやるとほりでございますよ、コンスタンチン・フードロギッチさま、いや、手  
前にしましても何でございます、その、これから先きも未始終ご最眞に預かりたいと思へばこそで  
ございまして、決して慾得づくでこんなことを申しあげるのはございせんので……それではこの三  
千留だけは手附金としてお納めおき願ひませう。」さう言つて仲買人は、懐ろから一束の脂染みた銀  
行紙幣を取り出した。コスタンジ・ローグロは無雑作にそれを受取ると、勘定もしないでフロツクの後  
ろポケットへねちこんだ。

「ふん！」と、チチコフは心に思つた。(まるで手巾なみの扱ひだよ!) そのコスタンジ・ローグロが  
やがて客間の入口へ姿を現はした。

チチコフは、その浅黒い顔と、ところどころ若白髪をまじへた剛さうな黒い頭髪と、生々とした眼  
附と、どこか痛癖の強さうな、いかにも激情的な南國人らしい風采とに、一層驚かされた。彼は純粹  
の露西亞人ではなかつた。當人自身も自分の祖先が何處から出たものやら全然知らなかつた。系圖な  
どといふものは一家を經營してゆく上には無用の長物で、何ら取るに足らないものとして、彼はいつ  
から心に懸けてゐなかつた。どこまでも自分は露西亞人であると思ひこみ、露西亞語以外の言葉は知  
らなかつた。

ブラトノフを紹介した。二人は接吻を交はした。

「義兄さん、僕は氣鬱を癒すために、一つ方々の縣下を旅行してみようと思ふんですよ、」と、ブラ  
トノフは自分の計畫を打明けた。「このパーウエル・イワノギッチが一緒に行かないかと言つて



下さるのでね。」

「それあ結構ですねえ。」と、コスタンジョーグロは答へた。「して、どちらの方面へ？」と、慇懃にチチコフの方へ向直りながら、彼は言葉をつづけた。「これからおいでになる御豫定なんで？」

「實を申しますと、」とチチコフは、例の調子で慇懃に首をちよつと横へ傾げながら、同時に片手で安樂椅子の腕をさすりながら答へたものだ。「目下のところ手前は、私用といふよりは寧ろ他人の用事で旅をしてゐるのでございます。手前の極く近い友人で、また恩人とも申すべきベトリッynchエフ將軍に頼まれました、親戚まはりをしてゐるのでございます。勿論、親戚まはりには親戚まはりとして、一面からはいはば自分のためでもございましてね。痔疾によいことなどは取り立てて申しあげるまでもなく、廣く世間を眺めたり、人の浮き沈みを見て廻りまするのは、いはば生きた書物でもあり、學問でもございませうからね。」

「さうですねえ、方々の土地柄を見て歩くのも結構なことですよ。」

「よく仰つしやつて下さいました。まつたく悪いことではありませんからね。ちよつと見られないやうな事物を眼にすることも出来ますし、おいそれとは會はれないやうな人物にも會へます。さういふ人士と談話を交へますのは、取りも直さず、金貨を手に入れるのも同然でございまして、例へば、現に只今も、さういふ好機會に直面してゐる次第でございまして……。どうか一つお願いいたします。手前の尊敬してやまないコスタンチン・フォードロギッチ、どうか是非お教へ下さいませ。眞理をお示し下さいまして、手前の渴望を遂げて頂きたいのでございます。あなたのいみじき御教訓をば、

手前は天與の賜<sup>たまは</sup>のやうに期待してゐるのでございます。」

「ですが、そりや何をですか？……何をいつたいお教へしろと仰つしやるのですか？」とコスタンジョーグロは、ちよつと鼻白んで訊き返した。「私などの知つてゐるのは、いつかう埒もないことばかりですのに。」

「ええ、識見でございますよ、あなた、識見なんぞでございますよ……つまり、骨の折れる舵で一村の農政を取りさばいて行く智慧才覚でございますよ。確實な収入をさめて、空想ではない實際の財産を獲得し、それによつて國民としての義務をつくし、同胞の尊敬を贏ち得る智能なんぞでございますよ。」

「さうですねえ、」とコスタンジョーグロは、やや考へるものやうに相手を見やりながら言つた。

「さういふことでしたら、手前どもに一日御逗留になつては如何です。及ばずながら管理方を残らずお目にかけて遂一お話をたしませう。別に難かしい智慧も才覚もいらぬことを、すぐ御了解になりますよ。」

「さうでございますわ、是非お泊りになつて下さいませよ。」と女主人も相槌を打つた、それから弟に向つて、かう言ひ足した。「あんたもゆつくりしていらつしやいよ。別に急ぐこともないんでせう？」

「僕はどちらでも構ひませんがね、パーウェル・イワーノギッチの御都合は如何です？」

「それあもう手前とて、御厄介になることに何の異存もございませんがね……ただ一つその、先刻も申しあげましたベトリッynchエフ將軍の親戚に、コシカレョフ大佐とかいふ人がありまして……。」



「ですが、その人は狂人ですよ。」

「さうさう、狂人ださうですねえ。別に手前は、そんな人を訪問したくはございませんけれど、手前の極く近しい友人で、いはば恩人のベトリッシュチェフ將軍が……。」

「さういふ譯でしたら、どうでせう？」と、コスタンジョーグロが言つた。「いつそ一走り行つておいでになつたら、あの男の村ならここから十露里とはありませんよ。手前どもには、いつでも輕走馬車の用意が出来てをりますからね、——これからすぐお出かけになつては如何です。お茶の時刻までには充分お歸りになれますよ。」

「成程それはいい思ひつきです」とチチコフは、帽子を掴んで立ちあがりながら叫んだ。

輕走馬車が提供されて、チチコフは半時間ばかりで大佐のへ送りこまれた。その村は建築中の建物やら改築中の建物やらで全體がごたごたして、通りといふ通りに石灰や煉瓦や丸太が山と積まれてあつた。何だかまるで官廳のやうな造りの家も建つてゐた。その一軒には『農具倉庫』、次ぎのには『計理本部』、その先きには『農事委員會』、そのまた向ふには『村民普通教育學校』と、それぞれ金看板が掲げてあつた。要するに、何でもござれといつた鹽梅にいかめしい施設ばかり並んでゐる！

チチコフは、大佐がベンを口にくはへながら、前立のある事務卓に向つてゐるところへ入つて行つた。大佐は極めて愛想よくチチコフを迎へた。一見この男は至極善良で懇切丁寧な人間らしく、自分の所領を現在の繁榮に導くまでには彼が如何に苦心したかを語り、百姓どもに文化的な奢侈や、藝術とか美術が人間に齎らすところの、高尚な趣味の存在を了解せしめることの如何に困難であるかを、

さもけなさうに訴へて、彼が千八百十四年に聯隊と共に駐屯してゐた遺跡では、水車屋の跡でさへ立派にピアノを弾いてゐたのに、自分の村では今日に至るまで百姓女にコルセットを着用させることが出来ないと言つてこぼした。しかし、等が無智驢昧なるがために如何に頭迷であらうとも、自分は飽くまで所志を貫徹して、今に村の百姓どもが、犁の柄を片手に、フランクリンの避雷針に關する本だの、ヴィルギーリーの『田園詩』だの、土壤の化學的研究だのを讀むやうにして見せるなどと言つた。

「それあ、さぞ旨くゆくだらうて」と、チチコフは思つた。(おれなんざあ、今だに『ラワリエール伯爵夫人』すら讀みあげてゐない始末ぢやないか。大體そんな暇がないからなあ。)

大佐はなほいろいろと、人民に福祉を齎らす方法について語つた。何より彼は衣服に重大な關心を持つてゐるらしく、せめて露西亞の百姓の半數が歌羅巴風のズボンを穿くやうにさへなれば、學問も向上し、貿易も進展して、露西亞に黄金時代が到來するにきまつてゐると、太鼓判を捺したものである。

チチコフはまじまじと相手の顔を見つめながら、じつと耳を貸してゐたが、しまひには肚の中で、(こんな男に何も遠慮することはあるまい)と考へたので、早速、これこれの理由で、しかじかの農奴が入用だから、賣買登記と所定の手續を踏んで讓渡してもらひたいと申込んだ。

「お言葉の様子から察しますに、と大佐は、いつから動ずる色もなく答へた。「それはつまり請願の筋合ひなんですわ、さうでせう？」



「仰つしやるとほりで。」

「さういふことでしたら、一つ書面に認ためて差出して下さい。さうすれば圖書受附係で受理いたします。受附係で記號を入れてから拙者の手許へ送つてよこすのです。そこで拙者から村務委員會へまはし、補訂を加へた上、監督の手に渡します。すると監督は秘書と量つて……。」

「いや、飛んでもない！」と、チチコフは悲鳴をあげて、「そんなことをしてゐた日には、いつまでかかるか分つたものぢやありませんよ！ 第一こんなことに書面になど麗々しく書けないぢやありませんか？ 抑々これはその……。農奴とはいひ條、一面からいへば死人にすぎませんからね。」

「少しも差支へありませんよ。ではそのとほり、農奴とはいひ條、一面からは死人にすぎないとお書きになるのです。」

「でも、いくら何でも——死人だなんて？ まさかそんなことは書けるものぢやありませんよ。よしんば死人ではあつても、ちやんと生きてゐるやうに見せかけておかねばなりませんからね。」

「いいぢやありませんか。ではそのとほり、但し、ちやんと生きてゐるやうに見せかけておかねばならない」とか、さういふ必要があるとか、望ましいとか、願はしいとかお書きになつたらいいです。兎に角これは書類を通して手続きをして頂かなければいけませんよ。英吉利は勿論のこと、ナポレオンだつて手本を示してゐますからね。いま案内係をつけて差しあげますからね、いろんな局課へあなたを御案内するでせう。」

彼は呼鈴をならした。と、一人の男が顔を出した。

「書記！ 案内係を呼んでくれ！」そこへ姿を現はした案内係といふのは、百姓とも事務員ともつかぬ男であつた。「さあ、この男が必要な局課へ案内いたします。」

こんな大佐にかかつては手も足も出なかつた。で好奇心も手傳つて、チチコフは案内係につれられて、そのどうしても必要な局課といふやつを一通り見物してやらうと肚をきめた。ところが願書受附係といふのは看板だけの代物で、びつたり扉が閉つてゐた。この係の主任であつたフルリョーフといふ先生は、新たに組織された村建築委員會の方へ廻されてゐた。その後釜にはベレゾーフスキイといふ従僕が据ゑられてゐたが、これも建築委員會の指圖で、何處かへ派遣されてゐた。二人は村務局を訪れてみたが、そこも組織が變つてゐた。酔拂ひが一人寝てゐたから、それを叩き起こしたけれど、さつぱり要領を得なかつた。「わつしどもの村ぢやあ何もかもが滅茶苦茶でがしてな」と、最後に案内係の男がチチコフに言つた。「旦那は鼻をつままれて、いいやりに引きずりまはされてゐるんですよ。建築委員會が何もかも勝手にさいばいをして、誰彼なしに仕事から引きはなしては、好きなところへ廻してしまふんです。この村で旨い汁を吸つてゐるのは建築委員會だけがさあ。」どうやらこの男は、建築委員會に對して不満を抱いてゐるらしい。チチコフはもうそれ以上、見て廻る氣もしなかつた。もとの部屋へ引き返すと、彼は大佐に一部始終を物語つて、何もかもが滅茶苦茶で、さつぱり要領を得ない上に、第一、願書受附の係なんて、てんでゐやしないと告げた。

大佐は佛然として義憤に燃えながら、感謝のしるしにチチコフの手を固く握りしめた。彼は矢庭にペンを掴み、紙を引きよせさま、如何ナル根據ニヨリ建築委員會ハ自己ノ管轄外ナル役人ヲ專斷ヲ以



ツテ處置シタルヤ？ 如何ニシテ總支配人ハ、事務ノ擔任者ガソノ部署ヲ後任ニ委ネルコトナク調査ニ出向クコトヲ許容セシヤ？ 且ツ又、村務委員會ハ如何ニシテ願書受附係ノ全ク缺員トナレルコトヌラ平然ト看過セシヤ？ などといふ、八箇條からなる頗る強硬な質問書を認めた。

「ふん、こりや一騒動もちあがるぞ！」さう思つてチチコフは、徐ろに暇を告げようとした。

「いや、このままお歸しする譯にはゆきませんよ。私はすつかり自尊心を傷つけられてしまひましたからね。抑々農政の正則な有機的組織が如何なるものであるかを一つ證明して御覽に入ませう。そしてあなたの御用件も、一人で萬人の値打を具へてゐるといつた、素晴らしい奴に委嘱してやらせませう、その男は大學まで卒業してゐますよ。うちの農奴は大體こんなものですからね。では、貴重な時間を無駄におさせしないやうに、一つ私の圖書室でお待ち願ひませう。」さう言つて、大佐は横の扉を開けた。「ここには本でも、紙でも、ペンでも、鉛筆でも、何でもありませんからね。どうぞ御自由にお使ひ下さい。あなたはこの部屋の御主人も同様です。文化といふものは萬人に公開されてゐなくつちやなりませんからね。」

コシカレ・フはそんなことを言ひながら、チチコフを圖書室へと案内した。それは素晴らしく大きな部屋で、上から下までぎつしり書物でつまつてゐた。又そこには動物の剥製まで並べてあつた。蔵書は植林から、牧畜、養豚、園藝等、あらゆる部門にわたつてをり、また豫約の購讀者に限つて頒布されながら、いつかう誰にも讀まれない、いろんな方面の専門雑誌もあつた。どうも、そんな書物では退屈さましにもなりさうになかつたので、チチコフは次ぎの書棚へ眼を移した——が、これはまた

更に齒の立たない、哲學書ばかりであつた。すぐ眼の前には、「思想界入門の手引。普通・總和・本質論、並びに社會的生産力相互分岐の有機的原則會得の鍵」といふ表題をつけた、浩瀚な書物が六冊あつた。どの一冊を取つてバラバラと翻つてみても、頁といふ頁に、「顯現」だの、「發展」だの、「抽象」だの、「乖離」だの、「結合」だのといつた、譯の分らない文字が矢鱈に眼につくばかりだ！（こいつはおれの手に負へない）と呟やいて、チチコフは第三の書棚へ眼をうつした、——そこには美術方面の書物が並んでゐた。彼はさつそく一冊のいかげしい神話的な挿繪の入つた大きな本を引っぱり出して、その挿繪を一枚々々丹念に眺めはじめた。凡そかういつた種類の繪畫は中年の獨身者や、また時には、舞踊劇その他の刺戟物によつて催情をはかつてゐるやうな老人連に珍重されるものである。一冊を丹念に見終つたチチコフが、同じ種類の他の一冊を引っぱり出さうとした時、コシカレ・フ大佐が晴々とした顔附で書類を手に入つて來た。

「さあ、すつかり出來あがりましたよ、實に立派に！ 先刻あなたにお話した男はまづたく天才です。ですからね、あの男を他の誰よりも取立てて、あの男だけのために特別の局を設けるつもりです。どうでせう、實に素晴らしい頭腦の持主でしてね、ほんの二三分のあひだに何もかもテキパキと解決してしまひましたよ。」

（まあ、どうにでも勝手にするさ！）とチチコフは思つたが、それでも徐ろに耳を傾けた。大佐は讀みはじめた。

▲大佐殿ヨリ御愛囀ノ件ニツキ篤ト考慮ノ上、左ノ如ク報告仕ル儀。